

# 悪役（ヒール）と黒幕 （フィクサー）

RKC

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アニメのライスシャワーのストーリーと、マンハッタンカフェの初期設定が作者の脳内で超融合して生まれた作品です。（女優設定はないけど…）

人の夢を挫く事に大きな悦びを見出す歪んだ主人公と、その担当になったトレーナーの恋愛話。

愉悦2：シリアス4：恋愛4ぐらいの割合。

原作のキャラは一切登場しません。設定だけ借りています。

主人公（勝負服の姿）

※おまけを削除しました。作者も蛇足と感じていましたが、せっかく書いたのだからと登校した挙句、コメント欄で正論パンチくらったためです。

# 目次

一話 流星と獵犬

二話 理解

三話 雌伏

四話 演説

五話 会見

六話 黒幕

七話 オークス

八話 幕間

九話 シューティングスター

十話 ファン感謝祭

十一話 我儘

十二話 菊花賞

1

12

27

42

53

68

79

90

102

118

133

144

十三話 三冠の行方

十四話 病院

十五話 家族

十六話 カフェ

十七話 ラーメン

十八話 看病

十九話 犠牲になった枕

二十話 帰省

二十一話 愛だの恋だの

二十二話 正月明け

二十三話 思い、重い

最終話 結末

154

172

185

196

206

218

229

237

247

255

262

279

## 一話 流星と獵犬

「今日の選抜レース、注目するのはやっぱりシューティングスターだよな」

「そうだね……。入学試験の成績もぶつちぎりの一位……。」

クラシック三冠も夢じゃないと言われている程だし……」

「そんだけ期待のホープならスカウトもすごいんだろなあ……。新人の俺達が担当する、なんて事にはならないか」

「スカウトするだけならタダだし、ダメ元で声を掛けたらどうか……。？」

「ダメ元か……。ま、元々新人はスカウトを受けてもらえる可能性が低いから、どんどん声掛けていかないとだしな」

「噂をすれば、本人の登場だよ……。」

二人の新人トレーナー視線の先には、ゲートインの準備をするウマ娘達の姿があった。

選抜レース。ウマ娘達にとつてそこは戦場。

選抜レースで良い成果を残し、トレーナーにスカウトしてもらえないと公式レースに出られないのだからそれも当然。

それほど大事な選抜レースのゲートインを待つウマ娘達の表情は一樣に固い。皆が皆、緊張している。

しかしそんな中にも例外はある。鹿毛色の髪に大きな白のメツシユが入っているウマ娘。彼女は右側の前髪やもみあげが左側より長い、アシンメトリーな髪型をしており、顔つきは中性的。

ともすれば美少年にも見える彼女は、選抜レースの場で思いつきあくびをかましていた。

「ふあ……」

選抜レースなど恐るるに足らず、と言わんばかりの態度。しかしそれもむべなるかな。

彼女こそ入学試験をトップで合格し、クラシック三冠すら望まれているシューティングスター、そのウマ娘なのだから。

（みんなピリピリしてるなあ……。そんなに気を張ってちゃ、実力を出せないだろうに

…)

彼女は辺りを見回し、引き締まった空気を感じたので、一応態度を取り繕う。

「……………あふ……………」

しかし、すぐにあくびが零こぼれていた。

緩みっぱなしの彼女がふと振り返ると、目の前に人影が。

「こんにちは」

「あ……………どうも、こんにちは」

シューティングスターの目の前に立っているのは、青みがかった黒色の髪を持つウマ娘だ。

ゼツケンには「レイハウンド」と書かれている。

彼女は今後の命運を左右する選抜レースの前だというのに、微笑を携えていた。

「今日はよろしくお願いしますね」

レイハウンドはそのままの表情で、シューティングスターに向けて手を差し伸べる。

(この娘は緊張してないなあ……………。良い走りするかも……………)

でも入学試験の時にはこれといって目立ってなかったよな……………だつたら別に警戒しなくてもいいか)

「……………よろしく」

シューティングスターはとりあえず握手を返す。レイハウンドはそれに満足したのか、すぐに離れて行った。

(……何だったんだろ？ 単純に勝負の前の握手？ でも僕以外には握手を求めてないし……うーん)

「ゲートイン、お願いします！」

色々考えるシューティングスターだったが、その声を聞いてとりあえずゲートインを果たした。

「……………くくふっ」

その一方で、レイハウンドは不気味な笑みを浮かべていた。

「さあ、各ウマ娘、ゲートインを果たしました！」

年に四回の選抜レースには、トレセン学園内の催しとはいえ実況が付く。

「そして……今スタートを切りました！ おつとお！ このレースで一番期待されているシューティングスター、思いつき出遅れたあ！ 次々と外の娘達が覆いかぶさってくる！ 完全な失策!!」

「思いつき出遅れたね……」

「あれは完全に油断してただろ……。ゲートインしてからもあくびしてたぞ、あいつ」「とはいえ、彼女の実力ならあそこからでも……」

「……さあ！ レースも中盤！ スタートで大分出遅れたシューティングスター！ しかしここに来て前に上がってきているぞ！」

「速い速い！ 出遅れのハンデをもともしない！ クラシック三冠を期待されるだけはある走り！」

「盛り返してきたね……」

「なんだありや、一人だけ早送りじゃねえか。いくら実力差が出やすい選抜レースとは

いえ圧倒的だな」

「軍団は第三コーナーに差しかかる！　ここで先頭に躍り出た！　シューティングスター！　脚色は全く衰えていない！　コーナーさばきも上手いぞ！　速度を落とさず第四コーナーへ！」

「このレース、決まったかな」

「……………いや、後ろの方に……………」

「後ろ？　……………あいつは……………」

「はっ……………はっ……………はっ……………」

（出遅れた時はどうなる事かと思っただけど、今は先頭。やっぱり入学したてのレベルじゃ話にならないなあ……………）

私と張り合うならクラシック……………いや、シニアの先輩ぐらいじゃないとね……………）

軽快に芝の上を走るシューティングスター。ゴールまでは残り300m。

自分が勝つものだと信じて疑わない彼女は、まだゴールにしていなくても関わらず、手を抜いて走っていた。

そんな彼女の横を、深い紺色の髪が通り過ぎて行く。

「……………え？」

シューティングスターから先頭を奪ったのは、スタート前に握手を求めてきたレイハウンドだった。

あり得ない、あり得るはずのない現象に一瞬戸惑う彼女。

しかしすぐに正気を取り戻し、足に力を込める。

（まさか僕が抜かれるなんて。でも本気を出せばすぐに……………っ！）

残りは200m。それだけあれば十分差し返せる。

そう思っていた彼女だったが……………

「おつとお！ ここに来て後ろから上がってきたのはレイハウンド！ 物凄い追い込み

だ！ 先頭に立ったぞ！

シューティングスターも負けじと速度を上げる！ ……しかし！ 差が縮まらない

！」

「……………くっ!？」

前に行くレイハウンドと距離が縮まらない。それどころか背中が遠くなっていく。

(なんで……………っ!?! 本気で走ってるのに……………!!)

これまで同世代の中では自分が一番強いと信じて疑わなかった彼女。

しかし今はその信仰をズタズタに引き裂かれていた。

(なんで……………っ!?! なんでなんで……………っ!)

ゴールまで残り200m。

時間にして1秒ほどの短い間だったが、彼女のプライドをズタボロにするのには十分な時間だった。

「今ゴールイン!! 一着はレイハウンド! シューティングスターは二着!

期待のホープを下したのはノーマークの黒い猟犬!! 鋭い牙で流星をかみ砕いたあ

!!」

「おいおい……シューティングスター、負けちまったぞ……」

「しかも大差で……。序盤の出遅れと途中で明らかに手を抜いていたのを加味してもレイハウンドの方が……」

「こいつは思わぬ掘り出し物が出てきたな……」

「……………」

（負けた……？ 負け？ 僕が……？）

シューティングスターは地面に手を付き、呆然としている。

初めての敗北を受け止め切れていない彼女に、

「良いレースでしたね」

上から声が降り注いだ。

それに反応し、顔を上げるシューティングスター。

その視線の先には、スタート前と同じ微笑を携えたレイハウンドが立っている。

「……何が良いレースだよ。勝ったからって調子に乗って。出遅れと途中で手を抜いた

のが無ければ……」

「自分が勝っていた、と？」

レイハウンドはシューティングスターの言葉を遮る。

「本当にそう思っているのですか？」

私としては、その言い訳が出来ないぐらい大差で勝ったつもりだったので

……本当はアナタも苦し紛れだと分かっているのでは？」

「……っ！ そ、それは……」

言葉に詰まるシューティングスター。その顔がどんどん歪んでいく。

「……くくっ、くくく……」

レイハウンドはそれを見て不気味に笑っていた。スタート前、一人でそうしていたように。

「害虫を噛み潰したようなその表情……良い……実に良いです……」。

三冠も夢じゃないと見込まれ、また本人もその自覚あり。

そんなアナタが。自他ともに認める期待の流れ星が！ たかが選抜レースで墮ちてしまった……！ 泥を掛けられてしまった……！

その時、アナタはそんな表情をするんですね……」

感極まったのか、声を荒げながらシューティングスターに顔を近づけるレイハウ

ド。

「自分が絶対強者と信じて疑わなかったのでしょうか？」

選抜レースでも当然一着を取って、たくさんのトレーナーに囲まれて、引つ張りだこになってしまふな……なんて思っていたんでしよう？

そしてそのまま無敗でクラシック三冠……なんて夢想していたんでしよう!?

でも……初めの一步目でくじかれてしまいましたね……。

くふっ……くふふ……くふふふふ……っ！」

「お、お前は……いったい、何なんだよ……」

眼前で狂氣的に笑うレイハウンドに怯むシューティングスター。

それに対してレイハウンドは鷹揚に返答する。

「……私ですか？」

私はレイハウンド。人が夢破れる……その絶望の表情を食い散らかして愉悅に浸る、最低最悪の獵犬ですよ」

## 二話 理解

「レイハウンド君！ 是非、僕の元に来ないかい？ 君ならクラシック三冠も夢じゃない？」  
「いいー！」

「いいえ！ 彼女は私の元に来るべきよ！ どう？ 私と一緒に三冠、目指さない？」  
「俺のチームには過去にクラシックを勝った娘もいる！ クラシックを目指すなら俺のチームに来た方がよい！」

選抜レースを勝ったレイハウンドは、多くのトレーナーからスカウト攻勢を受けていた。

クラシック三冠も夢ではないと言われていたシューティングスターを大差で下したのだからそれも当然か。

「私は」

トレーナー達の声で、がやがやとうるさい中、凜とした声が響き渡る。

レイハウンドの声はその場を一瞬で支配し、続きの言葉を紡ぐ。

「クラシック三冠には興味ありません。私が走る目的は他のウマ娘の偉業の阻止、それだけです。それでも良ければ私のトレーナーになってください」

その発言に周囲は再び騒ぎ始める。

「く、クラシック路線に興味が無いなんて……一体どうして?」

「さつきも言った通りです。ウマ娘が走る目的、それは多々あるでしょう。」

天皇賞で勝ちたい。有マ、宝塚で勝ちたい。トリプルティアラを獲りたい。クラシック三冠を獲りたい……。

私の場合はその目的が他のウマ娘の夢を阻止する事、というだけです。なのでクラシック路線には興味ありません」

「そ、阻止って……どうしてそんな事を目的にしているんだ?」

「好きなんです。夢を打ち砕かれたウマ娘の顔を見るのが」

「そんな事って……」

「それで……どうなんですか? 私のトレーナーになつてくれる人はいないんですか?」

トレーナーに実力は求めません。私の理念に共感して、私をレースに出してくれれば誰でも構いませんから……早い者勝ちでお願いします」

レイハウンドがそう言うのと、すぐに返事をする者が一人。選抜レースを見ていた新人トレーナーの片割れだ。

「じゃあ、私が……」

「俺が!」

しかし、そこに被せるように他のトレーナーが大声を出した。手を上げるおまけ付きで。

「分かりました。それではそのあなたと契約を結びます」

「ああ、これからよろしくな！」

二人はそのままコースを離れて行ってしまふ。契約を結ぶ手続きをするのだろう。

残されたトレーナー達もスカウトできなかつたとすると、すぐに次のレースを見る為に客席に戻っていく。

そんな中、声を被せられたトレーナーは一人コースに残り、

「……発声練習、してた方が良かったかな……」

なんて呟いていた。

「いや、発声練習は関係ないだろ……単純に手を上げなかつたのが見にくかつたとかじゃないか？」

「挙手練習の方だったか……」

「別に練習するようなもんじゃないと思うが……」

居酒屋でそんな話をしているのは、レースを見ていた新人トレーナー二人。

「まあ、そんなに気を落とすなよ。なんでもそいつ、クラシック三冠には興味ないとか、他の娘の夢を阻止するのが目標、とか問題発言もしてたんだろ？俺ら新人には手にかかりそうじゃねえか」

「う〜ん……私は色物の方が好きだから彼女とはウマが合いそうだと思ったんだけど……」

「色物すぎるって。もう少し素直な娘にした方が絶対楽だぞ。」

「実力だけで担当を選ぶと、えらい苦労するって先輩も言ってたしな」

「実力じゃなくて彼女の目的が面白そうだと思ったからスカウトしようとしたんだけど……。」

「まあ過ぎた事を言ってもしょうがないか……。そっちは上手くやれたみたいだね……」

「おうよ！他のトレーナーがレイハウンドの方にいつてる間に、シューティングスターに声を掛けたら即オツケーしてくれたぜ！いや〜、一途さが身を結んだな！」

「……参考までにどんな口説き文句を言ったのか、聞いてもかな……？」

「ん？俺が彼女に声を掛けたら、「あいつの方に行かなくて良いの？」って聞いて来た

から、正直に「俺は君をスカウトしよう」とレースが始まる前から決めてた。しかしレース結果でスカウト先を変えるのは不誠実だと思ったから、こうして君をスカウトしてる！」って答えたただけだぞ。

そしたら笑って契約を結ぶ約束をしてくれたんだよ。「私がトレーナーを三冠トレーナーにしてあげる」って。やっぱり誠実さが一番だな」

「誠実さ、か……」

「というかお前はこういうスカウトの仕方したんだよ？」

あの後、他の娘にも声を掛けてたけど全滅だったんだろ？」

「そうですね。私としては普通に声を掛けただけなんですけど……」。

君は目つきが悪くて、シリーズの悪役ヒールとして活躍出来そうだ。だから私と一緒に頑張ろう、とか……」。

君には赤と青の目に悪いカラフルな勝負服が似合いそうだ。私と一緒にGIに出よう、とか……」

「いや、それが原因じゃねえか。言葉選びのセンスなさすぎだろ」

「誠実に思ったことを言っただけなのだけ……」

「そういう誠実さは求められてねえし、発揮すんな」

「なかなか難しい物だね……」

シューティングスターのトレーナーと、まだ担当のいないトレーナー。二人はそのまま駄弁り続けた。

選抜レースから数か月ほどが経った。

担当のいないトレーナーは、未だに担当がいないままであった。

（うくん……もつと手当たり次第に声を掛けた方が良いのだろうか……）

しかし、ときめかない相手をスカウトするということのもね……）

そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか袋小路に突き当たっていた模様。  
踵を返そうとしたその時、

踵を返そうとしたその時、

「……どうして皐月賞にも桜花賞にも出るつもりが無いんだ!？」

「事前にお伝えしていたはずですが。私は三冠にもトリプルティアラにも興味がないと」

誰かが言い争う声が聞こえてきた。

袋小路でうろろしている間に出口に誰かが来てしまったのだろう。

(盗み聞きをするのは気が引ける……。けど、今出ていくのも少し間が悪いな……)

トレーナーはバツが悪そうな顔を浮かべる。一方で言い争いは続く。

「三冠やトリプルティアラの初めの一レースを取つても、なんら絶望が無いではありませんか。」

一冠、二冠を取つたウマ娘が居て、ここを勝てば三冠だ。

そこで私が勝ちをかつさらえば……。くふっ、くふふ……。最高のシナリオじゃないですか……」

「お前……。まだそんな事言つて……」

「私は選抜レースの日、他のウマ娘の夢を挫く事が目的だとはつきり言いました。」

トレーナーさんも了承してくれていましたよね？ だからこそ一番に名乗りを上げてくれたんじゃないですか？」

「それは……。確かに了承はした。けど……」

「説得すれば考えを改めてくれるだろうと思つていた、……。ですか？」

「……。そうだ」

「それはとんだ見当違いでしたね」

「そうみたいだな……」

「分かってくれたなら何よりです。」

「それではこれで。私は練習に戻りますので」

「……待て！」

「まだ何か？」

「……担当契約を解除してくれ」

「……唐突ですね。一応理由をお尋ねしても？」

「お前とはこれ以上やっつけていけない……人の夢を阻止する、なんて不純な動機を持ったお前を俺は心からサポートできないからだ」

「不純、ですか……」

「そうだろう？ わざわざ菊花賞や秋華賞だけに出て、クラシック三冠やトリプルティアラの邪魔をするなんて！ 元から三冠を狙うのではなく！」

「……」

「……お前が勝手に改心すると期待して、お前の担当を安請け合いました事に關しては俺が全面的に悪かった……すまん、思慮不足だった。」

「……だが、担当契約は解除して欲しい……」

「……分かりました。担当契約を解除しましょう。」

私に不信感を持つている人に担当してもらうのは、私も望みませんから」

「ありがとう……。せめてもの償いとして後任は探してみる……」

「そうですか。配慮、痛み入ります」

「それじゃあな……。数か月だけだったが、これでさよならだ」

「さようなら。あなたに私よりもっと良い巡り合わせのあらん事を……」

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ……

足音が一つ遠ざかっていく。

そしてしばらくの沈黙の後、

「……………不純、ですか……………」

純粹に三冠を目指すのも、結局は人の三冠を邪魔する事と同義でしょうに……………」

ぼそりと、寂しそうな声はその場に響く。

そしてもう一つ、足音が遠ざかっていった。

「……………今、声を掛けるべきだったのかな……………」

担当のいないトレーナーは、その日も担当のいないままだった。

「いや、僕はちよつと……。君の思想には賛同できないかな……」

「三冠やトリプルティアラの邪魔をするなんて、どうしてわざわざ悪役になろうとするの？」

そんな事をしてもファンから悪く思われるだけよ？

あなた、素質は凄いいんだから素直に三冠でもトリプルティアラでも狙えば良いじゃない」

「三冠やトリプルティアラの邪魔をしたくないなんて……真剣に頑張っている他のウマ娘に失礼だとは思わないのか？ 言葉を選ばずに言うなら、君は性根がねじ曲がってるよ

……」

「全員ダメだったか……」

「そうでしたね。」

まあ、あなたの知り合いなので、あなたに似て私の思想に共感してもらえない事は予想していましたが……」

「すまん。力になれなくて」

「いえ……責任は果たしてくれましたから。」

「これからは私の方でトレーナーを探してみます」

言い争いがあつてから数日。

(ん〜……これと言つた娘が見つからないな……。いまいちビビツとこない……)

もうじき日が沈むと言う頃、トレーニングコースを眺める人物が一人。

例の担当がいらないトレーナーだった。

(というかビビツと来た娘には全員声を掛けたけど、断られたからな……)

そういう娘はもう残つてないかも……)

トレーニングコースに背を向けて、その場を立ち去ろうとする彼。しかし、振り返つた瞬間、目に入つてきたウマ娘に目を奪われる。

「君は……」

青みがかつた黒髪に尻尾、張り付けたような微笑、華奢な体格……その正体はレイハウンド。

「……なにか用でしょうか？」

「あれからトレーナーは見つかったのかい……？」

「あれから……？」

「あ、いや、言葉足らずだったね……。」

数日前に袋小路で君とトレーナーが話しているのを盗み聞きしていたんだ……。悪

いとは思ったけれども……」

「そうでしたか……。」

あなたの問いに答えるのならば「YES」。私は未だに流浪のウマ娘ですよ。

もしかして私をスカウトしていただけるので？」

レイハウンドの眉が僅かに持ち上がる。

「ええ、そのつもりで声を掛けたんだ……。」

盗み聞きをしていた時は、タイミングを逃してしまっただけだからね……」

「……しかし、あなたは私の担当で良いのですか？」

盗み聞きをしていたのなら、私に瑕疵かし（かし）がある事は分かっているでしょう？」

「瑕疵かしというのは君の目的の事かい……？」

「ええ。どうやら他のウマ娘の夢を阻止するという目的は、不純で、失礼で、性根がねじ

曲がっているようで。気に食わないトレーナーが大多数のようです。」

……あなたはどのようなのですか？ 先に言っておきますが、私はその目標を改めるつもりはありません。説得をするつもりなら徒労ですよ」

レイハウンドは浮かべていた微笑を消し、無表情でトレーナーを見つめる。

それに対して彼は笑みを浮かべながら答えた。

「説得するつもりは無いよ……。良いじゃないか、クラシック三冠の阻止、トリプルテイアラの阻害……。まさに性悪って感じで……。私のセンサーにとっても引つ掛かる……。」

そんな君にはヘドロの様な黒を基調とした暗い勝負服が似合いそうだね……。」

下したウマ娘の数だけ撃墜マークを付けるのもおしやれそうだ……。」

「……………」

トレーナーの言葉を聞いた彼女はあつけにとられた表情に。が、すぐに訝しむような目をトレーナーに向ける。

「……アナタ。これまでに担当が居た事ないでしょう？」

「その通りだけど……。どうして分かったのかな……。？」

「誘い文句にセンスが無さ過ぎです。」

年頃の女の子にヘドロのような色の服が似合うと言うのはあんまりですよ」

「そ、そうかな……。ヘドロ、良い表現だと思うんだけど……。」

君の髪と同じ、青っぽい黒は工場の廃棄物処理場から引き揚げた汚染物質たっぷりの

へドロと言う他……」

「青っぽい黒なら藍墨あいすみとか紺鼠こんねずとか色の表現はいろいろあるでしょうに」

呆れたような表情のレイハウンド。

「へえー……良く知ってるんだね……。次までには色の勉強をしてきた方が良くかな……。」

とはいえ、またスカウト失敗か……」

トレーナーは肩を落とした。そしてその場から立ち去ろうとする。

「いえ。失敗ではありませんよ」

その背中に声が掛けられた。

「服に関してはともかく……撃墜マーク、ですか。」

……ふふつ。そっちは中々面白そうですね」

「それは……私のスカウトを受けてもらえるという事で良いのかな……？」

「ええ。センスの無いトレーナーと性悪ウマ娘……あぶれ者同士、きつと仲良くできま  
すよ」

レイハウンドは手を前に差し出す。トレーナーはその手を握り返した。

「そうかもね……。一緒にトウインクルシリーズをぐちやぐちやにしてやろうか……」

「はい。精一杯引つ掻き回してやりましょう」

楽しそうに話すトレーナーに釣られ、レイハウンドも笑みを浮かべる。  
それは作り物のアルカイックスマイルではなく、自然な笑顔だった。

## 三話 雌伏

「よし、こんなものかな……」

昨日、レイハウンドの担当になったトレーナーは、彼女のためのトレーニングメニュートと出場するレースのプランを練っていた。

コンコン

そこにノックの音が。

「どうぞ……」

「失礼します」

レイハウンドが部屋に入ってくる。

「ああ、良い時に……。今後の予定を立てたけれど、これで良いか確認してくれるかな……」

彼女は彼から受け取った書類に目を通す。

「トレーニングに関しては知識が少ないので、私から言える事はありませんが……。出場レース、少なすぎませんか？」

書類に書かれていたのはG1レースに出るための必要最低限のレースのみだった。

一般的なウマ娘が通る道のりと比べて、レース数がかなり少ない。

「少ないけど全部勝てばクラシック三冠やトリプルティアラにも出れるようにしてある……」

「全部勝てば、ですか。さりげなく言いますね。それが出来れば誰も苦労しませんよ?」  
「君なら問題ないよ……。それにダラダラとたくさんさんのレースに出ても君はモチベーションが続かないだろう……?」

君の目的は勝つ事ではなく、他のウマ娘の夢の阻止なのだから……。しかるべきレース以外は最低限で良いと思つてね……」

「そうですね」

トレーナーに同意しながら、レイハウンドは書類をトレーナーに返す。

「それと君の脚、それほど丈夫じゃないだろう……。負担のかかるレースはギリギリまで減らすべきだ……」

「……分かるんですか?」

目を丸くするレイハウンド。

「入学時の精密検査の値を見ればね……。筋肉量に対して骨の強度が弱い……。速く走れるが、その分脆い……。いわゆる泥団子のような脚だね……」

「ど、泥団子……?」

いきなりの比喻に、レイハウンドは困惑したような顔に。

「ピンとこないかい……? 磨き上げた泥団子はピカピカと光つて美しい一方で、その分脆くて壊れやすい……」

優れている一方で壊れやすさを内包している物の例えの一つだよ……」

「……………ガラスの脚で良いのではないのでしょうか」

レイハウンドがそう言うと、トレーナーは顎に手を当てて少し考える。

「ガラス……ガラスか……。確かにそれも言えてるね……。でもやはり泥団子の方が……………」

「……………トレーナーさんのセンスの無さはひとまず置いておいて。話を戻しましょう」

「おっと、そうだね……。とにかく足の負担が少ないように練習メニューを組んでいるから、そこは安心して欲しい……」

「承知しました。ではさっそく練習と行きましょうか」

二人はトレーナー居室を出て、トレーニングコースに向かった。

「結局、あの問題児のトレーナーになったんだな」

「ええ……。とはいえ問題児と言うのは少しトゲのある言葉では……？」

いつぞやの様に、シューティングスターのトレーナーと、レイハウンドのトレーナーが居酒屋で一緒に飲んでいた。

「トレーナー間じゃ有名だぞ？他の娘の夢を阻止するのが目標だと、わざわざ公言してはばか憚らないそうじゃねえか。

そう思うのとはちかくとして、胸の内に秘めておいても良いだろうに……。そりや問題児とも言われるだろ」

「しかし目的を黙ったままだと、彼女の実力でクラシック三冠やトリプルティアラを狙わないのは不自然に思われそうだけどね……」

シューティングスターのトレーナーはグラスを傾ける間、少し考える。

「……まあ、そこら辺を俺らが考えてもしようがないか。

とにかく！ 今日はお前のスカウトが成功した祝いだ！ 奢るからジャンジャン飲め！」

「私は下戸だからジャンジャン食べる事にするよ……」。

ごはん大盛にキムチにスンドゥブチゲにトッポキ、マーボーナス……。後はトムヤムク

ンにしようかな……」

「相変わらず良く食べるねえ……。それに辛いもの好きも相変わらずだ」

店員に注文を通し、料理が来るまで二人は雑談を続ける。

「そつちの担当、シューティングスターは順調だね……。この前も一着、デビュー以来負けなしじゃないか……」

「まあ、あいつの実力なら当然って感じではあるけどな。選抜レースじゃそつちの担当に負けたが、全体で見れば上の上。前評判通り、世代の頂点を争える資質を持つてるよ。

アイツなら無敗のクラシック三冠も夢じゃない」

「頑張っておくれよ、私の担当のためにも……。彼女の目的は相手がいないと達成できないものだからね……」

「ははっ！ 俺の担当を踏み台扱いか。心配すんなって、ちゃんと舞台は整えてみせるさ。ま、お前らのシナリオ通りとはいかねえがな」

「注文の品です」

そこに料理が運ばれてくる。

二人はそのまま話をしながら夜を更かしていった。

「今ゴールデン！ きさらぎ賞を接戦の末に制したのはレイハウンド！ デビューから無敗で三戦三勝！」

「遅いデビューでしたが圧倒的な強さでここまで勝ち上がってきました！ 今、勝利者インタビューが行われています」

「デビューから半年で三戦三勝。」

「皐月賞への参加資格も満たし、無敗のクラシック三冠も狙えますが、今後の出走予定は？」

「記者の質問にレイハウンドは毅然と答える。」

「決まっております」

「き、決まっていない？ それはどういう意味ですか？ 皐月賞には出られるのですよね？」

「皐月賞ですか……。先ほどの発言、少し訂正いたします。皐月賞には出ません。その予定だけは決まっています」

「で、出ない!?!」

「どういうことだ?」「無敗の三冠も狙えるつてのに……」

「菊花賞の3000mを難しいと考えてティアアラ路線に進むとか……?」

臯月賞に出ない。普通のウマ娘が出場資格を得れば、まず出るであろうGIのレースに出ないと言う答えに場がざわつく。

「そ、それはティアアラ路線に進まれると言う事でしょうか? 桜花賞に出るご予定で?」

「桜花賞についての予定も決まっています。出ません」

「で、出ない!?!」

「ティアアラ路線でも無いって……」

「一体どういうことだ……?」

「脚に不安でもあるのか……?」

場が更にざわつく。

「で、では今後いつたいどうするのですか?」

「それは先ほども言いました。決まっております」

「え、えつと……」

要領を得ない答えに、言葉を詰まらせる記者。

「マスコミの皆さんとは来るべき時にまたお会いすることになるでしょう。それまではせいぜい牙を研いでおきます。それでは」

レイハウンドは質問が飛んでこないのを良い事に、締め of 言葉を残して壇上から去る。

「あ、ちよつと！ レイハウンドさん！」

同じく無敗のシューティングスターさんとの直接対決が望まれています、それについてはどうなんですか!？」

「弥生賞での前哨戦も期待されていますが!？」

「来るべき時というのは、具体的にいつの事でしようか!？」

遅れていくつかの質問が飛んだが、もちろん答えは返ってこなかった。

会見が終わって、二人はトレーナー室に帰ってきた。

「あんな受け答えで良かったのかい……?」

「ええ。GIへの出走条件は満たしましたし、後は顔を伏せて待つだけです。

個人的には選拔レースで打ちのめしたスター……シューティングスター。彼女にぜ

ひとも二冠を取ってもらいたいですね。それも無敗のままです。

そして菊花賞で……………くふつ……………ああ、選抜レースにしておいてよかった……………。公式レースではないから彼女の成績には傷がつかなかった。二度も楽しめるじゃないですか……………」

いつもの微笑は鳴りを潜め、不気味な笑い顔を浮かべるレイハウンド。見る人によっては気味が悪いと思うだろうが、トレーナーは全く気にせず口を開く。

「トリプルティアラの方も有力候補がいるみたいだね……………。プラムチェリー、コットンファイート、レッドフワイト……………」

「……………どちらも様子を見てからですね。

二冠達成の可能性が濃い方をメインディッシュに、もう片方は二冠目でつまみ食いしてしましましょう。

できればどちらも三冠目で邪魔したいのですが……………秋華賞と菊花賞、一週間しかインテーブルがないので流石に無理ですね」

心底残念そうだが、といった表情をするレイハウンド。

「特に君は脚が弱いからね……………。という事は五月末までは暇か……………」

「暇、というのは語弊がありますよ。しっかりと牙を研いでおかなければ。

GIで勝つ、並大抵の事ではありませんから」

「そうだね……………。今日は休んで、明日からまた頑張ろうか……………」

「ええ」

日付は進んで4月7日。

「桜花賞を獲ったのはプラムチェリー！ 強い走りでトリプルティアアラの一冠目を制覇！！ このままティアアラの栄誉を得ることができるとは嬉しいでしょうか！ 今、ウイナーズサークルで勝利者インタビューを受けています！」

「プラムチェリーさん！ 今日のリースはどうでしたか!？」

「記者の質問に、プラムチェリーは真面目な顔で。しかし嬉しさを堪えきれない顔で答える。」

「結果はハナ差、ギリギリの勝負でした。しかしハナ差圧勝、とも言います。今日までの練習が実を結んで良かったです！」

「見事桜花賞を制覇出来ましたが、今後の意気込みはどうですか？」

「このままオークス、秋華賞でも一着を獲りたいと思っています。今の私にはトリプルティアアラしか見えていません！」

「オークスは2400mと、今日より800m長いですが、その所は？」  
「オークスまで後一か月と半分。スタミナの強化に重点を置き、800m分の体力を付けようと思っっています！」

一週間後。

「シューティングスターが今！ トップでゴールを駆け抜けました!! クラシック三冠の始めを制したのは期待の流れ星だ!! 願い事を呟く暇もなく、圧倒的な速さで皐月賞を制した！」

「シューティングスターさん！ 今日のレースはどうでしたか!？」  
記者の質問に、シューティングスターはうかない顔で答える。

「……不十分です。今日の走りのままだと、私は二冠止まりだと思っています」  
「き、菊花賞は勝てないという事ですか？ それはまたどうして？」

「このまま無敗の三冠を飾る事も夢ではないかと思えますが……スタミナに不安でも？」

「いえ、そういうわけでは無いですけど……とにかくもつと力を付けたいです。

でなければ三冠は達成できないと思いますので……」

「そ、そうですか……」

G Iの皐月賞を勝ったというのに、後ろ向きな発言をするシューティングスターに、記者は面食らう。しかし、そこは流石のプロ。すぐさま別の話題を持ち上げた。

「さ、三冠と言えば、あなたがこのまま無敗でクラシック三冠を達成すれば、歴代四人目の快拳です！ それについてはどう思っていますか？」

しかし、シューティングスターの顔は変わらず暗いまま。

「無敗……まあ、成績的にはそうなんでしょうけど……」。

とにかく、無敗に関してはあまり意味のない事だと思えます。三冠は……勝てば勝手に付いてくるものです」

「は、はあ……」

連続して質問をする記者はシューティングスターの浮かない様子を見て、それきり口をつぐむ。

代わりに別の記者が話す。

「無敗と言えば、同じく無敗のレイハウンドさんとの対決が期待されていましたが、彼女が出走しない事についてはどう思われていましたか？」

シューティングスターは眉をピクリと痙攣させた。

「……………特に何も。」

ただ言えるのは、私が二冠を取った時、彼女が立ちはだかつてくるだろう、という事だけです」

その発言に、すかさず記者達が食いついた。

「それは菊花賞での勝負になると言う事ですか!？」

「しかしどうして彼女はクラシック三冠を狙わなかったのでしょうか!？」

「学園寮では同室と聞きましたが、何か理由を聞いてはいませんか!？」

「……………ノーコメントで。それについては私の口から言う事では無いと思います」

次々と飛んでくる質問に答えを返さないまま、その日の会見は終わった。

場所はいつもの居酒屋。

「今日の会見、上の空だったね…………。シューティングスター…………」

シューティングスターのトレーナーはレイハウンドのトレーナーに非難の目を向け

る。

「お前の担当ウマ娘のせいだぞ。選抜レースでレイハウンドに負けてからずっと引きずってる。このままじゃ駄目だ。あいつに勝てない、ってな。」

負の感情が今は良い方向に作用して、練習を頑張ってるから良いが……悪い方向に転がらない様にしねえと。今でもオーバーワーク気味なんだ」

「メンタルケアか……。一番難しいとも言われてるよね……」

「思春期の複雑な心をコントロールするのは土台無理な話。とはいえ、少しでも支えになれるよう粉骨碎身、暗中模索で頑張るしかないか……」

シューティングスターのトレーナーはそこで言葉を切り、再びレイハウンドのトレーナーに目をやる。今度は羨ましそうな目線。

「……そっちは楽そうだな、担当がしっかりしてて。思想は厄介だが」

その言葉に対して、レイハウンドのトレーナーは顔を曇らせる。

「それが逆に心配でもあるかな……。弱みが無いのではなく、見せないのだったとしたら……。肝臓のような娘かもしれない……」

「か、肝臓？」

「ピンとこないかい……？」

肝臓は沈黙の臓器とも呼ばれている……。状態が悪化しても本人は痛みを感じない

し、異常にも気づけない……。何か異常を感じた時にはすでに手遅れ、という事になりがちなんだ……。

だから痛み、弱みを外に出さないという例の一つだよ……」

どうして伝わらないんだ？ という顔をするレイハウンドのトレーナー。対してシューティングスターのトレーナーは呆れた顔をしていた。

「ピンとこねえよ。例えるならもう少し分かりやすい例えにしてくれ……」

「これ以上なく分かりやすいと思うけど……」

まあ、とにかくシューティングスターが勝ってくれてよかったよ……。これで一冠目。二冠目も頑張つて欲しいな、それも無敗で……」

「へいへい……。舞台を整えろ、ってんだろ？ 言われなくてもやってやるよ」  
その後もいつものように時間が過ぎていった。

## 四話 演説

「……………」

放課後のトレセン学園。そのトレニンングコースを外から眺めるウマ影が。

「レイハウンド……………？ 今日には練習休みの日では……………？」

「トレーナーさんですか」

その背中に声が掛けられる。レイハウンドは振り向かずには答えた。

「観察してただけですよ、獲物を」

「獲物……………？ ああ、なるほど……………」

彼女の視線の先には桜花賞を取ったプラムチェリーと、皐月賞を取ったシューティングスターの姿が。

「二人とも調子がよさそうだ……………」

しかし、やはりシューティングスターはずば抜けているね……………。ダービーにも期待が持てそうだ……………」

トレーナーの言葉に、レイハウンドは婉曲に答える。

「そうですね……………。前菜はスモモとサクランボにしましょうか」

「前菜というよりはデザートだけだね……。とにかく、そういうことならトリプルティアラ路線、オークスに出走願いをしておくよ……」

「お願いします」

トレーナーはその場を離れていく。

一方でレイハウンドは、その場に残り二人の練習を凝視し続けていた。

「……………くくふつ……………」

そのまま練習風景を眺め続ける。不気味な笑い声を時たま漏らしながら。

レイハウンドがオークスに出走すると世間に知られた翌日。二人は記者会見の場に呼ばれていた。

「前回の出走から間が空き、突然のオークス出走との事ですが……なぜ桜花賞には出走しなかったのですか？」

記者の質問に、レイハウンドはやはり毅然と答える。

「トリプルティアラには興味が無かったからです」

「え、ええと……では三冠は？ どうして皐月賞の方にも出走しなかったのですか？」  
「クラシック三冠にも興味が無かったからです」

「で、ではどうして急にオークスに出走を？ 何か特別な理由があるのですか？」  
「特別な理由、ですか……」

レイハウンドは床に目線をずらし、どう話そうか、と思案する。十秒ほどして口を開いた。

「……記者の皆さんの中に、人が夢破れ、失意に暮れる所を見て悦に浸った事のある人はいませんか？」

あるいは人の大事な場面を自己の優れた力で荒らし、忘我の思いに駆られた事のある人は？

……そのあなたとか」

レイハウンドに一人の記者に手を向ける。

「え、いや、私は……」

「そっちのあなたは？」

記者が答えないでいると、続けてもう一人に手を向ける。

「えつと……その……」

その記者も答えない。レイハウンドは少し残念そうな顔をした。しかし、瞬き一つを

挟んでいつもの微笑に戻る。

「……失礼しました、答えにくい質問をしてしまつて。

人の夢を挫き、悦に浸る体験。皆さんにおいてどうかは分かりませんが……私にはありません。

幼少期の頃、親の前で良い所を見せようと頑張っていたウマ娘が出るレースを大差で荒らした時。

トレセン学園の関係者が見に来ている中、中央にスカウトされようと意気込む娘を12バ身差で下した時。

選拔レースで自他共に世代最強だと認める天狗ウマ娘の鼻をへし折つた時……。

いずれも私は口角が上がるのを我慢できませんでした。

私がなぜそう感じるのか、心理学者ではないので上手く説明は出来ませんが……きつとそういう本能があるのです」

ざわつく記者団を尻目に、レイハウンドは言葉尻を強めながら更に続ける。

「きつとトリプルティアラやクラシック三冠を狙う娘達を下した時も……くふふつ……！」

私の、自分の、自己の！ 圧倒的な力で他者の希望を！ 夢を！ 目標を！ 壊滅的、破滅的に踏みこむ……！

それが私の希望、夢、目標！ だからこそ私は皐月賞にも桜花賞にも出ませんでした！ 他のウマ娘に希望を持ってもらうために！

……オークスではプラムチェリーさんのトリプルティアラを阻止するべく、精一杯の努力を積み重ねる所存です。私からは以上になります」

レイハウンドは小さくお辞儀をする。

彼女の演説にも似た答弁に、場は一瞬静まり返った。しかし、すぐに喧騒に包まれる。

「先ほどの発言は真意ですか!？」

「アスリートとして先ほどの発言は問題があるのでは!？」

「他の頑張っているウマ娘に対して失礼では!？」

「先ほどの発言から、菊花賞にも出ると言う事ですか!？」

「トレーナーさんからも一言!！」

トレーナーはレイハウンドと記者団の間に割って入る、

「彼女への取材はこれで終了とさせていただきます……。何か聞きたいことがあれば後で私に連絡してください……。できうる限り、答えますから……」

「「最後にもう一つだけ!！」」

詰め寄る取材陣からレイハウンドをかばいながら、トレーナーは彼女の背を押し、舞台から姿を消していった。

記者の追跡を振り切り、トレセン学園に戻ってきた二人はトレイナー居室にいた。

レイハウンドはソファに座り、白のカップから真っ黒のコーヒーを啜っている。トレイナーはその体面に座った。

「一つ聞いても良いかな……?」

「なんででしょうか?」

「どうしてわざわざあんな受け答えをしたんだい……?」

レイハウンドはコーヒーの水面を見つめる。

「……わざわざ、とは?」

質問に質問を返す形での返答。しかし、トレイナーは気を悪くするでもなく、淡々と話す。

「あれほど挑発的に話せば、炎上してしまう事が分からない君じゃないだろう……?それが目的だったのならそれで良いのだけれど、今の君はどこか不満そうだ……。他に何か狙いがあったのでは……?」

「……………」

レイハウンドがコーヒーカップをソーサーに置き、スマホに目を落とす。

そこには会見のネット記事が。低評価は数千、コメントにも彼女の発言を批判する声  
が多数寄せられている。

「…………トレーナーさんは、どうしてだと思えます?」

彼女は記事から目を上げて、トレーナーを見る。

「なぜ、わざわざ、あんな受け答えを私がしたと思えますか?」

二人はしばらく見つめ合ったまま。

トレーナーが先に視線をそらした。

「分からない……………」

「……………でしようね」

顔から表情が消したレイハウンドはカップの中身を一気に飲み干し、立ち上がった。

「勝手な行動で迷惑をかけた事、ここに謝罪いたします。申し訳ありませんでした」

「いや、別に迷惑だなんて……………」

「失礼しました」

トレーナーが声を掛ける間もなく、彼女は部屋から出て行ってしまふ。

「……………いったいどうして……………」

一人残されたトレーナーの眩きに答える者はいなかった。

場所はいつもの居酒屋。

「……今日の会見、見たぞ。大炎上だったな」

「そうだね……」

しかし、いつものように楽しげな雰囲気ではない。

「なんであんな受け答えをさせたんだ？」

責めるように聞くシューティングスターのトレーナー。

「させてはないよ……。彼女がした事だ……。止められなかったのか？ という意味なら完全に私の不注意としか言えないけれど……」

「ふーん、あいつが自発的にねえ……。そりやいったいどうして？」

「それが分かっていたらばこうして落ちこんではいないよ……」

「ご注文の品です」

レイハウンドのトレーナーの元に運ばれてきたのは、ご飯中盛とマーボーナスだけ。

「記者会見の場であれだけ正直に話すのはやりすぎだよな。

臯月賞、桜花賞に出なかったのは脚に不安があつたから、とかいくらでもごまかしようはあつた」

「ええ……。なのにならわがわが本音を語つた……。叩かれることを承知の上で……」

「彼女から話は聞いてないのか？」

「何も話してはくれなかつた……。それに今日の会見が終わつてから顔を合わせてくれない……」

大きく息を吐きながら、額に手を当てるレイハウンドのトレーナー。

「……………思春期だな」

「……………そうだね……」

シューティングスターのトレーナーはグラスを煽り、中のを一気に飲み干した。

「今日は私も飲むかな……。すみません。生ビールを一つ……」

「下戸なんだから飲みすぎんなよ」

「大丈夫だよ……。どうせすぐに気持ち悪くなつて吐くから……」

やけっぱちに言い捨てるレイハウンドのトレーナー。

「おいおい、そんなに自棄（やけ）になるな……。よし、一つ面白い話でもしてやろう」

シューティングスターのトレーナーは場を和ませようと、そう口にする。

「この前シューティングスターが皐月賞を獲った祝いに祝賀会を開いたんだ。そこで俺は趣味の女装姿であいつを出迎えた。メイド服を着て「おかえりなさいませお嬢様」つてな。

二人三脚で頑張ってきてGIも取ったし、俺たちの仲も深まってきたと思つたからこそだ。ここらで俺の趣味をさらけ出してやろうと思つてな」

「それで結果は……？」

声が一気にトーンダウンする。

「……………思い出したくもない。ドン引きもドン引きだった……。」

その後の祝賀会はもうお通夜ムード。トレセン学園の歴史を振り返つても、歴代最悪の皐月賞祝賀会だったろうな……。」

「そのどこが面白い話……」

「なんで女装を認めてくれないんだよ!! こんなガタイの良い体に生まれて男らしい、と言われ続けて二十年以上!! そりや女の子になりたい日もあるつてー!! べつにいいだろ!! 人に迷惑かけてるわけじゃあ、なし!!」

レイハウンドのトレーナーが突つ込む前に、シューティングスターのトレーナーは机に伏せこんで泣き始めてしまう。

最後の果実酒一気飲みがダメ押しになったのか、かなり酔いが回っているようだ。

「臯月賞取って、あいつと俺の仲も深まってきたから、俺の全部を知ってもらおうと思つてさー!!」

それで女装して「どうかしら? 似合ってる?」つてあいつに聞いたら「えっ……あつ

……うん……」とか言いながら一歩後ずさつたんだぞ!! もう立ち直れないよ、私……」

「一人称が変わってるよ……。女装をカミングアウトするにしても、もう少しタイミングがあるだろうに……」

「LGBTだけじゃなく、女装趣味にももっと配慮しろー!!」

「……………」

騒ぐスターのトレーナーとは対照的に、レイハウンドのトレーナーは黙ったまま、何かを考えこんでいた。

## 五話 会見

「はっ……はっ……はっ……はっ……」

ひそひそ……

「あの娘って……」

「ああ、あの会見の……」

「なんであんなこと言っちゃうんだろうねー」

「人の邪魔したいだけで三冠もトリプルティアラも諦めるなんておかしいよね……」

「一人で練習してるけどトレーナーはどうしたんだろ……?」

「愛想突かされたんじゃない?」

「あーあるある……そりゃあんなじゃじゃウマ、私がトレーナーでも敬遠するわ……」

「いや、前の会見について弁明するための会見が今日あるから、そっちに行ってるんじゃない?」

「そうなの? 何話すんだろ?」

「……………」

私は自らの陰口を聞きながらも、練習を止めてその場から逃げようとはしなかった。「はっ……はっ……はっ……はっ……」

自分のもろい足に負担が掛からないギリギリまで自分を追い込む。オークスで勝つために。

トレーナーさんからメールで指示されていたメニューをすべて終え、自室に戻った。日が暮れかけていて部屋の中は薄暗いものにも関わらず、電気は付けないまま。

カバンを机の横のフックに掛け、自分は椅子に腰かける。そしてスマホでエゴサーチインターネット上で自分の評判や噂を調査する事を始めた。当然、その結果は批判的な物ばかり。

「……………」  
私の発言、思想、それ自体が非難されることは自然な事だと思う。私自身、最低な思想を持っていると自覚している。

「……………」  
私は記事の感想欄を下へ下へとスクロールさせる。私に肯定的な感想は未だに見つ

からない。

私はいつから人の夢を挫くことに快感を覚えるようになったのか、それは覚えていない。

気づけばそうだった……いや、もしかしたら生まれつきそういう思考回路だったのかもしれない。

（こいつヤバすぎ。こんな異常者にレース走ってほしくないわ）

そんな感想が目に入ってきた。

異常者、か。なら私は生まれつきの異常者。

しかし、私だけが異常者なのか？ 私と同じ思想を持っているが、ただそれを隠している人もいるんじゃないのか？

「……………」

私に賛同している人を探すために、私は画面をスクロールし続ける。だが、そんな感想は見つからなかった。

一番上まで画面を戻す。すると、記事の評価数が目に入ってきた。  
低評価数2000に対して高評価100。

すると1000人は私に好意的な感想を抱いたという事だろうか。

「……………ふっ……………」

バカげている。スマホの画面を一度押すだけで済む評価のどこが好意的だ。薄い。ひどく薄い同調。

そんなものでは幼少期から抱えてきた寂しさを埋めるには至らない。

「……………」

似たような他の記事の感想欄をスクロールする。

（俺はこの娘の意見に賛成かな。プラムちゃんの負けて悔しがる姿見てみてえ…………）  
するとそんな賛同意見が目に入ってきた。

「……………」

待望の同調コメント。しかし私の心は驚くほど動かなかった。

軽い。ひどく軽いコメント。公衆トイレの落書きと何ら変わらない。

素性も顔も知らないネットの向こうの誰かのコメントでは、長期間にわたって拗らせた私の心を動かせない。

それは批判であっても同調であっても同じ事。

生の同調が欲しい。私の考え、思想を認めて欲しい。

そう思い、私は自分の思想を隠す事はしなかった。思想を発信し続ければ、いつか私に同調してくれる人が、認めてくれる人が現れるだろうと。

しかしほとんどの人は私を批判した。トレーナー達、記者団、ウマ娘達、…………確か両

親からもだったか。

幼い頃、私の思想を両親に話すと、ひきつった笑みを浮かべていた。そして後日、道徳の本を読み聞かせしてくれた。

批判とまではいかなくとも、私の思想は遠回しに否定されたのだ。それからは両親への態度をよそよそしくした。

……とんだ親不孝者だ。私のような子供を持って両親は不幸だと思う。

結局、今までの人生の中で私の思想を肯定してくれたのは彼だけか……。

彼……トレーナーさんが私の思想を認め、担当してくれることになった時は嬉しかった。今まで穴の開いていた部分が満たされる気がした。漠然と感じていた孤独感が無くなった気がした。

それで満足するべきだったのだろう。しかし愚かな私はそれ以上を求めてしまった。トレーナーさんの様な人が他にもいるはずだ、もっとたくさんの人に私を認めて欲しい、と。

不道德な私には過ぎた願いだったのだろう。結果は私を認めてくれたトレーナーさんに迷惑をかけるだけだった。

そういえば今日は彼が会見をするんだったか……。

私の滅茶苦茶な発言で彼に迷惑をかけてしまった事を悪く思いながらも、動画サイト

で会見のライブ中継を視聴する。

画面の中では多くの記者に囲まれた彼の姿が。

「前の会見でのレイハウンドさんの発言。ネットでは批判的な意見が寄せられています。……担当トレーナーとしてどう思っていますか？」

「当然だと思っています……。彼女の挑発的な発言に批判が集まるのは普通の事かと……」

「ではどうして彼女はあのような発言を？」

「私は彼女ではありません……。そして担当だからといって彼女の全てを知っているわけでもありません……」

です。その質問にはお答え出来かねます……」

「彼女の発言についてあなたはどう思われていますか!？」

「面白い思想を持っているな、と……」

「……そ、それだけですか？」

「ええ……。それ以外、特には……」

「侮辱的な彼女の発言に、何か思う所は無いのですか!？」

「質問に質問を返すようで恐縮ですが、あなたは彼女の発言が侮辱的とおっしゃいました……。具体的にどの部分がですか……?」

「そ、それは……他者の夢や目標を踏みにじるのが目的、と言った部分などが……」

「その部分ですか……。確かに悪感情を抱かれやすい言い回しですが、あくまでも彼女自身の思想を語っただけです……」。

そこに他者をバカにする、または辱めるような侮辱的意図は含まれていないかと……」

「しかし彼女が語った過去のエピソードについては!? わざわざ他の人の邪魔をして悦に浸っていたと……!」

「わざわざ、と言うのは少し誇張表現が過ぎると思われれます……。訂正してください……」

「……っ、ほ、他の人の邪魔をして悦に浸っていたという発言についてはどう思われているんですか!? 問題発言では!」

「何も問題は無いと思いますが……」

「し、しかし……!」

「人によって感じ方は様々です……。誰かに叱られ、*“私は駄目だ”*と落ち込む人もいれば、*“なにくそ”*と奮起する人もいます……」。

彼女は人の邪魔をする事に後ろめたさを感じるのではなく、快感を覚える……。ただそれだけなのです……」

「他の人の目的を邪魔するという理由でレースに出場するのは不純な動機では？」  
「不純な動機では無いと思います……。」

彼女は選抜レースから一貫して他者の偉業を阻止したいと語り、今まで一度も曲げた事はありません……。それこそ記者会見の場でも……。

これ以上なく純粹で混じり気の無い、クラゲのような動機だと思います……。」

「く、クラゲ……?」

「ピンときませんでしたか？」

クラゲの身体は種類にもよりますが、非常に透明で美しい……。純粹で混じり気の無い表現の比喩です……。」

「い、いえ、そういう事では無く……。真剣に勝利する事を目的としているウマ娘に対して、彼女の目的は不純……。いえ、不健全では!」

「不健全と言うと少し定義が曖昧なので、返答に困りますが……。道徳的では無い、と言う意味であればその通りでしょうね……。」

「そんな不健全な動機でレースを走るのは他のウマ娘に失礼ですよね!」

「失礼、というのは語弊があるかと……。」

オークスは八大競争にも数えられるほど由緒正しいGIです……。出場するウマ娘達は、同世代で最高峰……。当然楽に勝てるはずありません……。」

それは彼女も分かっています……。ですから日々、全力で練習に取り組んでおります……。それは彼女のトレーナーである私が保証しましょう……。

目的を達成するために力を尽くして骨を折る彼女が、レースを走るだけで他のウマ娘に対して失礼だなどと、少なくとも私は思いません……」

「なぜあなたは彼女の担当に？ あなたも彼女と同じような思想を持っていらつしやるとか？」

「いえ……私自身は人の邪魔をして喜ぶような思想は持っていないと思います……。

持っていたらウマ娘の手伝いをするトレーナーにはなっていないかと……。私は単純に彼女に興味を持って、スカウトしただけ……。

そして今は彼女のトレーナーとして彼女が目的を果たすために全力を尽くすだけです……。

その目的がどれだけねじ曲がっていて、不健全で、世間一般のものさしから外れていようと……。

それが担当トレーナーとしての責務ですから……」

私は重たく、生々しい彼の言葉を一言一句聞き逃さない様に耳をそばだてていた。  
生放送のコメント欄には、

(ウマ娘がウマ娘ならトレーナーもトレーナーだな。そもそも人相が悪いわこいつ)

(冷静に語る所が本音隠してるサイコパスっぽい。裏で小動物虐待してそう)

(担当やからって依怙<sup>えこひ</sup>鼻<sup>い</sup>尻<sup>き</sup>しすぎやろ。やべえ思想の奴に出走資格を与えるな)

(レイハウンドが悪役<sup>ヒール</sup>ならこいつは黒幕<sup>フィクサー</sup>つてとこか。目が死んでるのも普通に怖えわ)  
などと書きこまれている。

批判を恐れずあの場に立ち、毅然と話している彼の言葉は泥のように重い。匿名という盾の後ろから無責任に発言する誰かの言葉とは雲泥の差だ。

「……………」  
画面の向こうで記者団に怯まず言い返す彼の姿。

それをにじんだ視界の中でずつと眺め続けていた。

記者会見の翌日。トレーナーは居室でパソコンをつづいていた。モニターに表示されているのは昨日の会見についてのコメント。

「なにになに……。」

レイハウンドは……悪役、ヒール、敵役……。

私は……悪の親玉、黒幕、首魁、フィクサーか……。

ずいぶんな言われようだね……挑発的な発言はしないよう気を付けていたつもりだったけど……。」

コンコン

ノックの音が部屋に響く。

「どうぞ……。」

「失礼します」

部屋に入ってきたのは夏手前にもかかわらず、体を覆い隠すような外套を羽織ったレイハウンドだった。

「レイハウンド、二日ぶりだね……。今日も会えないかと……。」

「レイ」

顔を見せてくれた事に安堵の表情を見せるトレーナー。レイハウンドはその言葉を途中で遮った。

「……………えつと……………?」

「レイ……………。私の事はそう呼んでいただいて構いません。フルネームは長いでしょう」

「……………」

いきなりの提案にトレーナーは少々困惑したが、すぐに受け入れる。

「分かったよ、レイ……………。久しぶり……………」

「ええ。お久しぶりです」

彼女はニコリと笑みを浮かべて、トレーナーが座っているデスクの方に近寄った。

「いったい何を見て……………会見の記事ですか」

「あ、いや、これは……………」

トレーナーは記事のページを急いで閉じる。

「別に隠さなくても良いですよ。大体の記事には目を通していますし。ネットの書き込み程度、気になりません。そもそも私から悪役のような発言をしてみましたからね。」

「これからはもつとそれらしく振舞いましょうか。もちろんトレーナーさんも一緒に」

「まあ、ここまで嫌われてしまったのならいつその事、ロールプレイをするのも面白そうだね……。とはいえ私の役割は黒幕か……。」

黒幕つばさと言えはなんだろう……。真つ黒なローブでも羽織った方が良いのかな……。」

「トレーナーさんは目つきが悪いので見た目に関しては満点ですよ。それよりも設定を固めてみては？」

……そうですね。競バ界限に何か恨みを持つ黒幕が、学園で篤実な猟犬を手懐け、トウインクルシリーズを荒らす……。とかはいかがですか？」

「恨みか……。私としては純粹悪の方が好みかな……。」

観客の期待を背負うウマ娘に配下の猟犬をけしかけ、負けたウマ娘と期待を裏切られた観客の絶望を糧とする邪神、というのはどうだろうか……？」

「邪神、ですか。ずいぶんと風呂敷が広がりましたね。」

神を自称するなら名前はハデスでお願いしますよ。さすれば私はケルベロスを名乗れますから」

「冥界の王か……。トレーナーからずいぶんと出世したものだ……。」

雑談に華を咲かせた二人。トレーナーはレイハウンドの外套に目を向ける。

「話は変わるけれど……。初夏にもなるのに、どうしてそんな外套を……？」

トレーナーがそう聞くと、レイは外套を勢い良く脱いだ。その下から現れたのは彩度の低い、暗めの服。

全体的にSFチックな黒のインナーに、着丈の短い橙のレザージャケットを上羽織っている。

胸の部分にはイヌ科の牙を模した意匠。肋骨に沿うように骨のようなデザインが。

下はスカートの下にタイツ。ふくらはぎ辺りまで覆うブーツ。いずれも黒から青で統一されている。

手袋もしているため肌が覗いているのは首と顔の部分だけだった。

「どうでしょうか私の勝負服。出来るだけ悪役らしい衣装になるよう発注してみました」

「うん、良いと思うよ……。全体的に重めの色使いで気味の悪い感じが出てるし……」

「……………もう少しプラスの評価を頂きたかったです」

レイはじつとりとした目でトレーナーを見る。

「一応プラスの評価なんだけれどもね……」。

気味が悪い方が善玉役を負かした時、観客がより残念がるだろうし……」

「役を果たすのには十分という事ですか。……まあ良いでしょう」

ひとまず納得したレイ。

「今日はそれで練習するのかい……?」

「ええ、勝負服に慣れる必要がありますから」

「それじゃあトレーニングコースに行こうか……」

「はい」

二人そろって、トレーナー居室を出る。トレーニングコースまで行く道中、

「トレーナーさん」

「なんだい……?」

「……昨日の会見での言葉、とても嬉しかったです……」

「なら良かったよ……」

「つ……。な、何で聞こえてるんですか……!」

「そこは嘘でも聞き逃す場面でしょうに……!」

「ご、ごめん……。耳が良いばかりに……」

そんなやり取りが繰り返し広げられた。

## 六話 黒幕

5月23日。東京競バ場。

『さあ、今日の第11Rは待ちに待ったオークス！ 今、出場ウマ娘達がパドックで顔見せを行っています！』

『一番人気は当然この娘！ 三梓プラムチェリー！ 桜花賞では2バ身差で堂々と逃げ切り勝利を収めていました！』

このままオークスも勝ち、トリプルティアラにリーチを掛けるのか!?!』

「頑張れー！」

「今日も一着とつてー!!」

「あいつに負けんなー！」

『良い顔していますね。観客の声援もプレッシャーではなく、力に変えてくれそうです。好走が期待できますよ』

『続く四枠はこのウマ娘！ 十八番人気、レイハウンド！ 問題発言が祟ったのでしよう！ 人気は最低です！』

しかし彼女は今まで不敗！ 実力は疑いようがありません！ 悪役としてオークス

の舞台で大立ち回りを演じるのか!？」

「良く顔させたな……」

「逆にメンタル強えよ……」

「引っ込めー!!」

「すっこんでろー!」

『ああつ! 批判はお止めください! 歓声はあくまで健全にお願いします!』

『表情も少し硬いですね。アウェイのような空気に委縮してしまっているのか。とにかくゲートインまでに落ち着いて欲しいですね』

パドックを終え、レイハウンドとトレーナーは控室にいた。彼女はソファに姿勢よく座っている。

「……………」

「レイ、大丈夫かい……?」

「…………ええ」

返事をする彼女の手は震えていた。

トレーナーはそれを見て、彼女の前で膝をつき、目線を合わせる。震える彼女の手を両手で包み、優しく言う。

「深呼吸を……。多少は落ち着くかと……」

「スー……ハー……スー、ハー……」

しかし彼女の呼吸は浅い。緊張しているのがはつきりと分かる。手も震えたまま。

「全身に思い切り力を入れて……」

グツ、と彼女の身体に力が入る。

「そのまましばらく……力を抜いて……」

「ふ……」

力みから解放された彼女の身体は一時的に平静を取り戻す。

しかし、数分と持たずに震えだした。今度は足。

「……………すみません。止まらなくて……」

彼女は手で膝を抑え、無理やり震えを押し込もうとする。しかし効果は無かった。

「パドックでの事を気にしているのかい……う？」

「……………いいえ。いまさらあの程度の批判は気になりません。しかし、私が負けた時……」

負けた時は……。どうなるんでしょうかね……？

記者会見であれだけ大口を叩いて、結果負けました、なんてことになれば……」

「……………」

コンコン

「本バ場入場です」

「もう時間ですか……。行ってきましたね、トレーナーさん」

彼女は震える膝を何とか動かし、控室を出た。

暗い地下バ道。光が差す方向へ歩みを進める。

その間考える事は今日と過去の比較について。

過去のいずれの場合も、私は無責任に戦ってきた。レースで標的を負かせば愉しい。負けても愉しくないだけ。

プラスに振れる事はあっても、マイナスになる事はない。

しかし今日は違う。事前に挑発をってしまった今、負ければ観客の批判はより力を持

ち、鋭い暴言となって私を貫くだろう。

加えて、負けてしまえばその暴言を私は甘んじて受け入れるほかない。言い訳は決して出来ないのだ。

これほどなのか……負けられないプレッシャーというのは。

人生で初めての感覚に自分がこのレースに出ている目的すら忘れ、ただ負けたくないだけ思っていた。

『さあ、次々とウマ娘達が本バ場入場してきます！　その中で最後に現れたのはレイハウンド！』

『少し速足ですね。緊張してしまっているかもしれません』

「そりやそうだろ。なにしろ観客のほとんどが敵みたいなものだからなあ……」

実況、解説の声を聞き、そう呟くのはシューティングスターのトレーナー。その横にはシューティングスターもいる。

菊花賞で競う事になるだろうと思って、偵察に来ているようだ。

「レイ、ガチガチじゃん。もうちよつと凶太いかと思つてたけどそうでもないんだ」  
シューティングスターは失望の感情を顔に浮かべる。

「おいおい、その評価は少し酷じゃないか？ あいつの立場になつたら誰だつて委縮するだろ」

「だから普通はああいう立場にならない様に上手く立ち回るんじゃない」

わざわざ自分からその立場に立つて、委縮するなんてバツカみたい。選抜レース以降、敵視して損した。

トレーナー、もう帰らない？ 見るだけ無駄だよ」

「ここまで待ったんだ、もう5分ぐらい追加で我慢しろ、スター」

……っーかあいつはどこにいった？ 場所間違えたのか？ もうすぐ自分の担当が走るつてのに……」

きよろきよろと辺りを見回すスターのトレーナー。その時、

「退けいー」

そんな声が観客席に響き渡った。二人は何事かと、声がした方を振り返る。

「前を開けよ。このバッジが見えんのか？」

すると黒いローブにトレーナーバッジを付けた人物が、人ごみを割つて最前列に進み

出てくるのが見えた。

「あれは……まさかアイツか？ それになんだあの長い髪。ウィツグ？」

「レイのトレーナーじゃん。……うわ、こっち来るし」

そのままスターのトレーナーの横まで歩いて来た彼は、辺りから一身に注目を浴びながらも大声で叫ぶ。

「レイ!! 我が篤実なる猟犬よ!!」

大きな声に私は振り向く。視線の先には長いウィツグを付け、真つ黒な外套を纏ったトレーナーさんが。

私だけでなく、観客、果ては実況、解説の人達ですら無言。

誰もが彼を見つめる中、彼はゆっくりと動いた。

バサリと黒の外套をたなびかせながら、バ場にいるプラムチェリーを指差す。

「……贄にえが足りん。手始めにそのスモモとサクランボを狩つて来い」

威風堂々、悪役然ぜんとした態度のトレーナー。

(そもそも私から悪役のような発言をしましたからね。

これからはもっとそれらしく振舞いましょうか。もちろんトレーナーさんも一緒に)

前に私が言ったのを守ってくれたのだろうか。

それとも私の緊張をほぐすために芝居を打ってくれているのだろうか。

はたまた私と一蓮托生、運命共同体となるため、わざと観衆の前で黒幕のロールプレイをしたのか。

彼の真意は分からない。

……なら私の方で勝手に解釈をしまおう。

強張こわばった私の身体はいつの間にか弛緩していた。

顔に悪戯っ子のような笑みを浮かべ、鷹揚にお辞儀を返す。

「ご命令とあらば、仰せのままに……」

赤信号、二人で渡れば怖くない。私が負ければ一緒に破滅ですね、トレーナーさん。

会見ではあくまで中立的に発言をしていましたが、そこまでやってしまつては言い逃れできませんよ？

「……………くくふつ……………」

平静を取り戻した私は獲物の方を向き、静かに笑った。

「「……………はああああああああ??」」

トレーナーとレイの演劇が終わり、しばらくは静寂が続いていたが、すぐに怒号が押し寄せる。

「プラムがお前らみたいなのに負けるわけないだろ!!」

「こんな奴らに負けないでー!!」

「会見の時にキャラ違くない?」

「引っ込めー!!」

「とういかなにちやつかり最前列に居座ってんだよ!!」

『ああーっ！ 観客の皆さん！ 落ち着いて!! 落ち着いてください!!』

『すごい嫌われようですね。物が飛び交わないだけ、もしかもしれません』

『そんな事まで解説しなくても良いですから!!』

色々な声が混ざり、てんやわんやになる場内。

レイのトレーナーはすまし顔でその最前線にいた。その隣にいるスターのトレーナーは気が気でないが。

「お、おい……」

「下賤で矮小なる人ごときが気安く話しかけ……つと、君か……。何か……う？」

「何か？　じゃねえだろ！　この後始末、どう付けるんだよ！　というか何だその恰好

！　その口調！　頭イカレちまったのか!？」

「恰好と口調について、女装をする君にとやかく言われたくないけれど……。とにかく私は至つて正気だよ……」

そしてこの騒ぎの後始末の付け方は彼女次第かな……」

彼の視線はゲートインを待つレイの方へ。それにつられてスターのトレーナーもバ場の方へ目を向ける。

「彼女？　……レイハウンドか？」

「ええ……。彼女が勝てば非難の声を聞き流しながら魔王のようなロールプレイをすればよし……」

負ければ暴言を浴びながらの敗走かな……。ライブにも出ない方がよさそうだ……」

「本当に大丈夫かよ、おい……。こんだけ悪目立ちしちまって、マジでどうなるんだ……？」

スターのトレーナーは頭を抱えて、顔を青くしている。一方でレイのトレーナーはいつもの調子だった。

「まあ、何とかなるよ……。そんな事より彼女の緊張が少しでも解れていけば良いんだが……」

「それなら心配いらないと思いますよ……。レイ、もう自然体だから。」

レイのトレーナーさんは勝つた後の演技でも考えていけば良いんじゃないですかね」  
スターはゲートイン寸前のレイを見ながらそう言う。

「そうかい……。同室相手の君がそう言うのなら心強いよ……」

「とはいえ勝つと言いつ切るのは流石にじゃないか？ レースに絶対は無い。何かあるか分からねえだろ？」

「下手に緊張なんかしなければ、あいつには絶対がある。……不確定要素になれるのは私だけだよ、トレーナー」

スターは鋭い目つきでそう言った。

## 七話 オークス

レイとそのトレーナーの振る舞いによって、一時は騒がしかった東京競バ場。しかし、ウマ娘がゲートインする時間になると、流石に騒動は下火に。

『客席でひと悶着ありましたが、各ウマ娘ゲートインを終え……今スタートしました!!  
やはり飛び出すのはこの娘、プラムチェリー!! 抜群のスタートセンスでトップに躍り出た!』

『素晴らしい反応でしたね。他のウマ娘達も遅いというわけではありませんでしたが、その中でも特に速かったです』

『その後ろにはレインボールプ、クラウドハイブン、シーストリームと続きます』

『各ウマ娘、それぞれ得意な走りをしていますね。これは実力が出るレースになりそうですね』

『そして件のレイハウンドはここにいますぞ! 後方三番手! かなり後ろの方から前を狙っている!』

『彼女の一番の武器はスパートでの末脚ですからね。今は様子見といったところでしよ  
うか』

『さあ、軍団は第3コーナーに差し掛かってレースも終盤、今一度順位を振り返ります！前を走るのは相変わらずプラムチェリー！ 続いてシーストリーム、レインボーループ、アメノシズク……つと!? 五番手にはレイハウンド！』

いつの間にながたてきていたのか!? 少し目を離れた隙に……まるでワープしたかのように!! こうして実況している内にも順位を上げているぞ!!』

『凄い伸びですね。この勢いのままごぼう抜きもありえますよ!』

『最終直線に入り、他の娘達もスパートに入る! 東京の直線は500もあるぞ! 後の娘達にもチャンスはまだある!』

……しかし伸びてこない! 前を行く二人が速すぎるのか!? 先頭を逃げるはプラムチェリー! それを追うのはレイハウンド! 差がどんどん詰まっているぞ!

5バ身から4バ身……3バ身……猟犬の牙が迫ってきている! プラムチェリー、粘れるか!? もう既に差は一バ身……ついに並んで、いや! 並ばない!!

更に速度を上げるレイハウンド!! 併走など許さない! 恐ろしい切れ味だ!!』

『上り坂なのにあのスピード。すごいパワーですよ!』

「止めろー!!」

「お前なんか勝つなー!!」

「プラムの邪魔すんなー!!」

『観客の非難を尻目に、今ゴールイン！ 一着はレイハウンド！ 二着のプラムチェリーに六バ身差！ 三着はアメノシズク！』

一着のタイムですが……い、1:56.21秒!! これはレコード一步手前!』

『素晴らしい走りでしたね。GIの舞台で六バ身差というのは並大抵ではありませんよ』

『堂々の一着！ しかし……』

「……」

『歓声がありません……！ 重い雰囲気！ これほど静かなオークス、私<sup>わたくし</sup>初めて体験いたしますー!』

『観客のどよめき、愚痴がここまで聞こえてきそうですね。あからさまなブーイングが無いだけましでしょうか』

『当の本人は……つと、プラムチェリーに近寄っていますー!』

「はあっ……はあっ……はあ……はあ……」

膝と手を地面に付き、息を整えるプラムチェリー。そこに近付く黒い影が。

「いい勝負でした。プラムさん」

レイは、うなだれるプラムに対して手を差し出す。

「……………っ……………」

プラムは上を向く事も無く、うずくまったまま。

「おや、握手していただけないので？」

「……………」

「ずっと俯いたままでは私が愉しめないのです……失礼」

「っ……………」

レイは膝を付き、プラムの頬を手で挟み込む。

そして優しく、ゆっくりと、彼女の顔を上げさせる。

弱弱しい抵抗。プラムの顔はすぐにレイの目に晒された。

「……………くふっ……………くふ、くふふふふ……………」

笑い声に釣り合うような底意地の悪い笑みを浮かべるレイ。

「トリプルティアラの夢破れ、観客の声にも応えられず、負けてしまったアナタはそんな顔をするんですね……。」

失意、不甲斐なき、無念、後悔……いや、無念や後悔とは違う……絶望？」

「っ……………」

プラムはビクリと体を震わせる。

「……………そうですか、アナタは絶望してしまっただけですね。」

私の走りを体験し、この先覆す事ができない程の圧倒的な差を感じてしまった……だからこそその絶望。

きつと、今日のアナタは過去一番の走りが出来たのかもしれませんが……。

自分の才能、今までの努力を全て出し切った最高の走り……。それを私にすべて否定され、折れてしまったんですね……。

……………くふ……ふふふ……………っ！」

表情から彼女の内面を勝手に分析するレイ。その行為はまるで咀嚼。

獲物を噛み、砕き、口の中で調和させ、味わっているかのよう。

「ひっ……………ぐ……………」

「……………おや、涙が。可愛い顔が台無しですよ？」

プラムの目じりに浮かんだ涙を指で掬うレイ。

その際、プラムの耳元に顔を近づける。

「ご馳走様でした。次は……無さそうですね。アナタの味、よく覚えておきましょう……」

それだけ耳打ちして、レイは悠々とバ場を後にする。

静まり返った観客達と崩れ落ちているプラムを背中にしながら。

レースは終わってウイニングライブの時間。しかし場は異様な雰囲気にもまれていく。

「結局アイツが勝っちゃったな……」

「はあく……プラムがセンターで踊る所を見たかったのによお……」

「あんな奴がセンターのライブなんか見たくねえよ……」

「でもまあ、センターサイドのプラムが見られると思えば……」

「次は頑張れよー！ プラム！」

ウイニングライブ。本来ならば勝ったウマ娘がセンターで踊れる栄誉を飾り、応援し

てくれた観客・ファンに対して感謝の気持ちを表す場面だ。

ファンもウマ娘を全力で応援する。翌日、声が出なくなるまで応援する人もいる程。しかし今、センターを飾っているウマ娘を応援する声は無い。その横にいるプラムチェリーを応援する声がまばらに聞こえてくる程度だ。

しかも、応援されるプラムは非常にぎこちない笑顔しか浮かべられていない。レイに心をへし折られた彼女。最後の責務を果たすため、ライブの場に立っただけ気丈と言えるだろう。

「予想はしてたけど想像以上だなこりゃ」

「そうだね……。気にして何かミスをしないと良いんだけど……」

観客席の最前列にスターのトレーナーとレイのトレーナーはいた。スターは「ライブまで見る義理は無い」と言って、先に帰っている。

不穏な空気の中、ついにライブが始まった。

センターで堂々と踊るレイには剣呑な視線が向けられていたが、それも最初だけ。ミスの無い彼女のダンスと歌。それはセンターとして申し分のないパフォーマンス。

しかしその表情だけは不気味だ。ニヤリというオノマトペが似合う、底意地の悪そうな笑みを浮かべて踊り続けるレイ。

（くふふ……。良い……。プラムチェリーに期待していた観客達の残念そうな顔、失望

した雰囲気……。

大勢の期待を挫いたのはこれが初めてだけれど、思ったよりも嬉しい……。

そして私が完璧なライブをこなすことで、観客達の期待を裏切られた鬱憤の晴らす場もない。

私がミスをすればけなして憂さ晴らしも出来るのだらうけど。……くふっ……)

センターで踊る彼女は満たされていた。しかし、それはレースで強敵を倒して一着を取り、センターで踊る事に対してではない。

一番人気のプラムチェリーを下し、多くのファンが期待していたウイニングライブを台無しにすることに対してだ。

そして推しが負け、悪役がセンターで嬉々として踊るさまを見るファンたちの顔は優れない。

今のライブ会場はウイニングライブとしてあるべき姿を失っていた。

そんな中、曲はセンターのソロパートに入る。レイが前に出て、一人で歌唱する。その途端、観客席のサイリウムの動きが止まった。

(随分と嫌われているようで……。けれど心地良い。ライブを形無しにしている実感がひしひしと湧いてくる。本来、センターで踊るはずだった彼女を押しつけ、私がセンターの座を蹂躪している実感が……)

センターのソロパートを終え、センターサイドのパートに入る。少しの休み時間。

(トリプルティアアラの二冠目でこれなら、無敗のクラシック三冠を阻止したのならいいたいどれほどの……)

「く……ふ……ふ……」

ピンマイクを一時的にオフにし、密かに笑うレイ。

(来週の日本ダービー、スターにはぜひとも頑張つて欲しいですね。私のためにも勝つてくださいよ……)

そこで彼女の意識は現実に戻ってきた。センターサイドのパートでは、彼女のソロパートの時とは違って、サイリウムがリズムよく動いていたり、合いの手が上がっていたりする。

「……………」

それを見て、レイは少し悲しそうな顔をした。

(本性を隠して走つていれば、私もあんな風に応援してもらえたのだろうか……)

いや、本性を隠したまま応援してもらっても、それは本当の私を肯定してくれた事にはならない。きっと虚無感に襲われるだけ……)

そう納得しようとするレイだが、応援してもらっているウマ娘を見る目には羨望の感情が浮かんだまま。

しかし全体パートに入る前には、その感情を作り笑いの下に押し込めた。機械のように正確な踊りと歌を披露する。

そして曲は二番に入り、再びセンターのソロパートに。やはりと言うべきか、サイリウムの動きが止まる。

レイの眉がほんの少しだけ下がった。

（人の希望、期待を挫いておいて応援してもらおうと言うのは虫の良い話……。悲しいと思うのは私が欲張りだからだろうか……）

その時、最前列で八つのサイリウムが揺れた。レイの目は動く光に惹きつけられる。

（トレーナーさん……）

彼女の視線の先には彼女のトレーナーがいた。5本の指の股に4本のサイリウムを挟み、大きく腕を振っている。

彼のすぐ横でもサイリウムの手が上がった。スターのトレーナーだ。レイのトレーナーを見て、しようがねえな、と言う顔でサイリウムを振っている。

そして観客席の所々でもサイリウムの手上がり始める。まるで彼のサイリウムの光に触発されたかの様に。

揺れるサイリウムは非常にまばらで、全体から見れば1%にも満たないだろう。

しかし、彼女を応援する色とりどりの光が確かに揺れていた。

(隠れていただけで、私を応援してくれるひねくれ者もいるんですね……)

彼女の作り笑いが、いつの間にか自然な笑みに変わっていた。

(そんな奇特な皆を引き出してくれたのはトレイナーさん。本当にあなたは私が望む物をいつもくれますね……)

機械のように正確な彼女の踊りと歌に変化が現れた。踊りには柔らかさと不自然にならない程度のタメが。歌声には大胆な伸びが。

(愉悦はこれまでで十分楽しんだ。今は私を応援してくれる奇特な人達、そしてトレイナーさんへの感謝を込めて踊ろう、そして歌おう……。精一杯の心を込めて……)

この時、ウイニングライブは少しだけあるべき姿を取り戻した。

## 八話 幕間

5月30日。東京競バ場。

『さあ、先週に引き続き今週もGⅠレースです！ クラシック期の優駿を決定する日本ダービー!! 最も運の良いウマが勝つと言われていますが、果たして幸運の女神がほほ笑むのはどのウマ娘か!』

『パドックで顔見せしているのは堂々の一番人気！ シューティングスターです！ ここまで無敗の一等星!! 流星の如き速さで今日も一着をもぎ取るのか!』

『彼女の武器は速さもさることながら、縦横自由自在のフットワークと視野の広さにも注目したいです。』

彼女がバ群に飲まれる事はまず無いので、見ている方も安心して応援出来ますね』

東京競技場で日本ダービーが行われようとしているその時、レイとトレーナーの二人はトレーナー居室にいた。

「そろそろじゃないかな……」

「もうそんな時間ですか」

レイがコーヒーカップ片手にリモコンを操作し、テレビをつける。

『第四コーナー曲がって最終直線へ!! シューティングスターは内側に居るが大丈夫か!?』

前を塞がれて……つとおっ!? う、内から!? 外ではなく内から来たぞシューティングスター!!

コーナーで膨らんだバ群の内をスルスルと抜けて先頭に立った!!』

『素晴らしいセンスですね。外ではなく内を最短距離から行ったので、足も残っているはずです。これは一着、ありますよ』

『前を塞ぐ者がいなくなつた今、彼女は止まりません! 一気に加速し、トップを走る走る!! 今、一着でゴールイン!!』

クラシック三冠の二冠目、日本ダービーを制したのはシューティングスター! また一つ無敗記録を伸ばしました!! このまま無敗のクラシック三冠を達成できるのか!』

「くふっ……」

テレビ画面を見つめるレイの口元が歪む。

「悪い顔が出てるよ……」

トレーナーに指摘され、口元を手で隠すレイ。

「……失礼しました。しかし……ふふっ……すみません、くっ……ふふふ……っ！」

笑い声を抑えきれないレイ。しばらくの間、顔を伏せて体を揺らし続ける。

「彼女には感謝しないといけませんね。最高の舞台を整えてくれましたから」

「そうだね……。君の目的は一人だけでは完結しない……」

優秀なライバルが居ることは幸運だったね……」

「ええ、本当に……」

薄ら笑いを浮かべながら、レイはコーヒーカップに口を付けた。

いつもの居酒屋。スターのトレーナーは手にスマホを持ち、レイのトレーナーに見せ

ている。

「ほら、この記事見てみろよ。」

『菊花賞、勝つのは流星か獵犬か!?!』

『最も強いウマ娘は王者シューティングスターか? はたまた性悪レイハウンドか?』

「こつちに至つては『勇者シューティングスター v s 魔王の使いレイハウンド!!』なんて書かれてるぞ」

「二つ名がまったく統一されてないね……。それに勇者に対してなら魔王が適切だろうに、魔王の使いとは……」

「そりゃここに魔王がいるからな! 居酒屋で飲む妙に庶民的な魔王がな!」

スターのトレーナーはレイのトレーナーの肩にわざとらしく手を置く。

「私が魔王なら君はさしずめ……。何だろうね……。? 勇者に付き沿う大男……。小間使いとか……。?」

「ええ……。? 魔王に魔王の使い、勇者ときて俺は小間使いかよ。一気にグレードダウンしたな……。」

「せめて執事ぐらいには……。いや、いつそのこと女装してメイドつてのも……。」

「またシューティングスターに引かれるよ……。」

「いや、構わない!! 俺はオークスでお前から己を貫き通す勇気を学んだ!」

俺は周りから何といわれようと好きな時、好きな場所で女装をする!!」

スターのトレーナーは拳を握り、胸を叩いた。

「まあ、迷惑防止条例に引つ掛からない程度にね……」

「そんな事よりだ。10月の菊花賞、ついに俺らの担当がぶつかるわけだが……どうよ？」

勝算の程は？」

「君は担当を慰める準備をしておいた方が良い……。それだけ言っておこうかな……」

「おいおい、自信满满だな！……というより、お前、そういう迂遠な言い回しをするタイプだったっけか？」

「いや……。オークスでのロールプレイが残っているのかな……。それともレイに影響されたのか……」

「確かに。もったいぶったようなセリフ回し。言われてみれば、あいつっぽい喋り方だ」  
「やはり人は他人から影響を受けるものだね……。彼女から私にと言う事は、当然、私から彼女にも……。」

気づかない内に悪い影響を与えてなければ良いのだけれど……」

「そうだな。お前の壊滅的なセンスの無さとか、わけわからん比喩の仕方とかが移ってなければ良いな」

レイのトレーナーは眉を少しだけしかめた。

「失礼な……。センスはともかく、他の人がついてこれていないだけで的確な比喻を行っているよ……」

「比喻つてのは分かりやすく例えるのが本懐だろ？ 他の人がついてこれない時点で比喻としては的確じゃねえよ」

「それは……、……………」

その言葉に対して、レイのトレーナーは何も言葉を返せなかった。

ウーン……

「……………ねえ」

「なんででしょうか？」

「それ……何？」

寮の廊下でレイと鉢合わせたスター。目の前の光景に、つい彼女の口から疑問が飛び出た。

「これですか？ 電動車椅子ですよ」

レイは発言通り、電動車椅子に乗っている。

「いや、それは見れば分かるんだけど……。なんでそんなもんに乗ってるの？ しかも寮の廊下で……」

「ああ、理由の方でしたか。足に負担を掛けないようにですよ。」

私は骨が弱いですからね、練習しない時は出来るだけ座っていきましょうかと。

それに漠然と立っていると、どうしても片足に体重をかけてしまったりしますからね。体幹や骨が歪んでしまわないようにという意図もあります。

さつき届いたようなので試乗しているのですよ」

「えつと……。いや……。ええ……。？」

困惑するスター。

（いや、言わんとする事は分からなくもないけど……。そこまでする？ ふつー……）

呆れ気味なスターを他所に、レイは車椅子を扉の横に停車させ、ダストカバーをかける。

「外に停めといて良いの？ これ」

「寮長に許可は取ってますよ。部屋に置くには大きすぎるでしょう？」

「まあ、それはそうだけど……。」

邪魔になるなら買わない方が良かったんじゃないの？ 毎日こいつに乗るのもいちいち面倒だろうし……」

「面倒なのは確かですね」

レイはスターの横を通り過ぎる。

「しかし、これぐらいやらないと菊花賞のアナタには勝てそうもありませんので」  
すれ違いざまにそう言つて、レイはさっさと自室に入つていつてしまった。

「……………」

廊下に残されたスターは壁に寄り掛かる。

（レイ……僕に唯一土を付けたウマ娘。

そこまで本氣つて事は、今の僕になら負けるかもしれない、つて思つてるはずだよね）  
「……………ふん。リベンジ、やつてやろーじゃん……………」

スターは手のひらに拳を突き合わせ、そう呟いた。

季節は初夏から盛夏へ。

トレセン学園も普通授業は夏休み。長期休暇という事で、トレセン学園付属の合宿所に泊まり、特訓するウマ娘達もいる季節だ。

しかし、レイとトレーナーの二人はトレセン学園に残っていた。

「夏休みなのに合宿所にも行かず、トレセン学園でトレーニングしてるけど……。良いのかい……？」

「ええ。別に合宿所に行かなければいけない、というわけでもないでしょう？」

額を流れる汗をタオルで拭きながら、レイは答える。

「それはそうだけど……。同じトレーニングでも新しい場所であれば、気分も変わって効率が上がるとも言われてるし……。」

変化は人を新鮮な気分にするからね……。」

「変化というなら長期休暇中のトレセン学園もいつもと違って良いじゃないですか。」

いつもなら騒がしい校舎も人が少なくて静か。トレーニングコースも空いてて走りやすい。

同じ場所なのに違う所に居るような情緒を感じませんか？」

レイに振られ、トレーナーは辺りを見回す。

「言われてみれば確かにそうだね……。今なんて朝早いとはいえ、私達以外には人がいないし……。」

朝日が完全に昇り切っておらず薄暗い中、トレーニングコースには二人以外に誰もいない。

しかもトレーニングコースの周りは土手で囲まれており、外の世界から隔絶されたような雰囲気が漂っている。

「……………まるで世界に二人つきりみたいですね」

レイはトレーナーに流し目送りながらそう言った。

「二人つきり、か……。トレーニングコースから出たら外にはゾンビが溢れたりするかもね……………」

トレーナーの返しを聞いて、顔をしかめるレイ。

「……………まったく、雰囲気が台無しですよ」

「雰囲気通りじゃないかな……………?」

少し前に見た映画ではこういう良い雰囲気の後、ゾンビが大量に乱入してきたんだけれど……………」

「どんなB級映画を見たんですか……………。はあ……………」

レイはため息を付きながらトレーナーのそばに寄る。

「まあ、さんざん変化について話してきましたが、変わらない方が良い物もあるでしょう……………」

「変わらない方が良い物……。例えば……。？」

「そうですね……。」

私がコースを走って……。その横にトレーナーさんが居て……。そういういつも通りの光景ですよ。

それさえ変わらなければ、他はどれだけ変化してもかまいません。トレセン学園だろうと合宿所だろうと競技場だろうと……。」

「……………」

トレーナーは黙ったまま、レイを見つめる。二人ともそのまま動かない。

この場には二人しかないと言うのに、その二人が動かないものだから、あり得ない程に静か。

吹く事しか出来ない風と、鳴く事しか出来ない蝉までもが己の役割を怠惰に放棄しているせいで、周囲の時間が止まってしまったかのよう。

「…………お、お喋りはこれぐらいにして練習を再開しませんか？」

沈黙に耐えかねたレイは目線を下にずらし、時を動かした。

「あ、うん、そうだね……。ごめん、少し見つめすぎたかな……。」

バツが悪そうに謝るトレーナー。

「い、いえ、大丈夫ですよ。……嫌ではありませんでしたから」

「そうか……。じゃあ練習を始めよう……」  
「ええ」

二人は今日も同じ時を過ごす。菊花賞に向けて。

## 九話 シューティングスター

季節は夏から初秋へ。

天高くウマ娘肥ゆる秋。トレセン学園の食堂にはいつにもましてテーブルの皿の量が多い。

その食堂の一角にウマだまりが出来ていた。

「スター先輩！ 一か月後の菊花賞頑張ってくださいね！」

「うん。応援ありがとう」

ウマだまりの中心にはシューティングスターがいた。

「絶対三冠取ってくださいいね!! それも無敗の！」

スターは少し困ったような表情をする。

「……そうだね。三冠目指して頑張るよ」

「レイハウンドなんかには負けないでくださいよ!?!」

スターの顔が若干強張<sup>こわば</sup>った。

「……もちろんそのつもりだよ。期待しててね」

「あっ！ それと週末は待ちに待った秋のファン感謝祭ですよね！ スター先輩はどん

な催しをするんですか?」

「確か……男装して、女装したトレーナーと一緒にダンス、だったかな……」

「ええ〜! 先輩、男装するんですか!? ぜひ見に行かないと!」

「だよ〜! めったに見れるもんじゃないよ!!」

「楽しみにしてくれてるようなら何よりだけど……」。

完全にトレーナーの趣味だよ〜この出し物……」

「先輩、何か言いました?」

「な、何でも無いよ……あはは……」

「ダンスが終わったら私達のクラスにも来てくださいよ!! カフェやってるんで!」

「あっ! 抜け駆けするい! 私達のクラスに来てくださいよ! ライブやってるんで

すけど、先輩なら飛び入り参加OKですよ!!」

「いやいや! こっちのクラスにぜひ! 私たちのクラスは……って」

そんな風に盛り上がっていた食堂だが、一人のウマ娘が入ってきただけで静かになる。

ウイーン……

その正体は電動車椅子に乗ったレイハウンド。

「せっかく盛り上がったのに……嫌なの見ちゃった」

「どうか何なんですかね、あの車椅子。前からそうでしたけど、なんで乗ってるんでしょうか?」

「脚に負担を掛けないように、って言ってたかな」

「負担……って、それだけのためにずっと乗ってるんですか!？」

「バカみたいだよねー。なんていうの? 意識高い系って言うんだっけ、ああいうの」

「あそこまで行くとね……私、普段からレースの事しか考えていません、って感じで鼻につくなー」

「言えてるー!」

「もしかして寮の部屋でも乗ってるのか!? 先輩、どうなんですか! 確かあいつとは二年生に上がった時に同室になったんですよ? 部屋にも持ち込んでたらマジやばくない!？」

「あんなのに負けないくださいよ!! 菊花賞! ここにいるみんなで応援しますから! あいつに赤っ恥かかせて……」

ガラッ!

スターは椅子を後ろに蹴とばし勢いよく立ち上がる。

「……みんなごめん、先生に呼ばれてたから先に行くね」

彼女はぶつきらぼうにそう言い、食堂を後にした。

時は放課後。トレーニングコースではたくさんのウマ娘達が練習に励んでいる。

その中でもウマ密度が特に高い場所が。

「スター先輩！ 凄かったですね、さっきの一本！ タイムは何秒だったんですか!?」  
やはりその中心にはスターがいた。

「トレーナー、何秒だった?」

「50:84。かなり良かったぞ」

「えー! 51秒切ったんですか!? 速すぎませんか!」

「あはは……ありがとね」

口ではそう言うが、表情はやや堅い。

「先輩! 次は併走ですよね? わ、私としませんか!」

「うん、良いよ。僕が先行でも良いかな」

「はい! 先輩の走り、参考にさせてもらいます!」

「あつ! ずるい! 先輩! 私と併走してくださいよ!」

「私とも! お願ひします!」

「ちよ、ちよつとみんな……」

併走を迫られるスター。後輩に詰め寄せられ、仰け反っていた所に後輩のある一言が。

「あいつ……もう練習切り上げて……」

その場の皆が同じ方向を向く。視線の先には、やはりと言うべきかレイがいた。

「まだ日も沈んでないのに……サボり？」

「あんなんでもG I出れるなんて……ホント不公平」

スターは前髪をいじり始める。

「……別にサボってるわけじゃ……。レイは骨がもろいから早めに切り上げてるってだけで……」

「えー……でもズルいですよね。スター先輩はこんなに頑張ってるのに。あいつはちよこつと練習するだけで速く走れるなんて……」

「だよなー。あーあ、あんなのが居ると頑張るのがバカらしくなっちゃう……」

「おい、お前ら……」

「併走！……やるんでしょ。早くやろ」

見かねたスターのトレーナーが注意しようとするが、それより先にスターの大声が場を支配した。

「えっ……あ、はい！」

スターと後輩が横並びになり、スタートポジションに入る。

「トレーナー、合図」

「……よーい、始め！」

併走開始の合図が出た瞬間、スターは本気で地面を蹴る。

「えっ！ これ併走じゃ……は、速っ!!」

後輩は置いてけぼりを食らった。

時間が経ち、日が沈んだ。今は夜間照明が辺りを照らしている。さっきまで僕にまわりついていていた奴らも練習を切り上げ、静かな中で練習出来ていた。

「はっ……はっ……はっ……」

「よし。今日の練習は終わりだ。しっかり柔軟しておけよ」

タオルで汗を拭き、水筒を空にした後、片づけをしているトレーナーに話しかける。

「ねえトレーナー、ちよつとプール行ってきても良いかな？ ゆっくり泳ぐだけだから

さ……」

「ん？ それぐらいなら良いぞ。けどあんまり張り切るなよ？ 結構きついトレーニン  
グやった後だ、無理したら攣るかもしれない」

「うん、分かってる。柔軟は泳いだ後にするから」

僕はトレーナーに背を向け、その場を後にしようとする。その時、後ろから声がかかった。

「スター、ちょっと待ってくれ」

「なに？」

振り返ると、トレーナーは心配そうな表情を浮かべていた。

「遠慮して言えないようなら、俺から言っておこうか？ あの後輩達に」

「……いいよ、そんなことしなくて」

「けどよ……」

「いいから。それじゃ」

「……また明日な」

僕はトレーナーと別れ、室内プールに足を向けた。その足取りはかなり乱暴。

ここ最近イライラする事が多い。もちろん人前では出来るだけ表にしていけないが。

思い出すのは今日のお昼の事。

(レイハウンドなんかには負けないでくださいよ!?)

(バカみたいだよねー。なんていうの？ 意識高い系って言うんだっけ、ああいうの)

(あんなのに負けないでくださいよ!! 菊花賞! ここにいるみんなで応援しますから!  
! あいつに赤っ恥かかせて……)

(えー……でもズルいですよ。スター先輩はこんなに頑張ってるのに……あいつは  
ちよこつと練習するだけで速く走れるなんて……)

(だよねー……あーあ、あんなのが居ると頑張るのがバカらしくなっちゃう……)

「……っ!!」

反射的に近くにあった自販機を蹴り飛ばしそうになった。

すんでの所で踏みとどまる。今、脚を傷つけるような行為をするわけにはいかない。

ざり……っ! ざり、ざり……っ!

代わりに極限まで耳を引き絞り、右足で前かきをする。

……「なんか」? 「あんなのに」? 僕の前でレイをそんな風に呼ぶな……!

成績を見てみる。そう言っているお前の方がよっぽど「なんか」「あんなの」だろう

が……! 有象無象どもめ……!

「バカみたい」? 「意識高い系」? レイは僕に勝つために必要だと思ってるから

やってるんだぞ?

周りにどれだけ罵られようと馬鹿にされようと必要だと思っただけやっってるんだ

……お前らにそんな事が出来るのか？

それにレイは結果をだしてやるだろうが！ 何が意識高い系だ……！ レイより成績が悪い癖にレイの事をバカにするな……！

「ちよこつと練習」？ 「頑張るのが馬鹿らしい」？ あいつは骨が弱くて実際に走る練習が出来ない分、プールでの練習と座学をずっと頑張ってるのを知りもしないで……！ 「悪役」って肩書と上辺だけ見て勝手にレイを評価しやがって！

「ふーっ……ふーっ……ふーっ……」

酷く息が荒れている。それに気づくと、怒りに染まっていた頭が冷静さを取り戻していった。

レイの陰口を叩かれてイラつくのなら、あいつらと縁を切れば良い。それが一番手っ取り早い。

とはいえそれが出来れば人もウマ娘も有史以来、対人関係で悩んでこなかっただろう。そもそも陰口を叩かれるのにはレイにも原因がある。

あいつがもう少しまともなメディア対応をしていれば、あそこまで悪しく言われることはなかったはず。

とはいえ、私人としては彼女の思想が悪いとは思ってない。

選抜レースの時は面食らったけれど、何のために走るのか、そんなものは人の自由だ

ろう。だからそれだけでレイが批判されるのが、頭では理解できても心では納得できなかった。

レイは僕より速いんだから僕より評価されるべきなのに……！ どうして……

レイに対する評価が自分と他人で違っているのにどうしようもないイラつきを覚える。

「……………くそっ……………」

もやもやとした思いを抱えながら、僕はプールへ向かった。

仏頂面のまま更衣室で着替え、室内プールに足を踏み入れる。時間も遅いためか、中には数人のウマ娘が居るだけだった。

「おや……………？ これから泳ぐのですか？」

プールサイドまで近寄ると、プールの中から聞きなれた声か。

「レイ……………」

彼女の琥珀色の瞳が僕の目を捉える。そのまま見つめ合って、しばらくすると、

「練習熱心なのは良い事ですが、もう少し落ち着いて取り組んだ方が良いかと」

イラついていた私の心の内を見透かしたような言葉を掛けてきた。

「落ち着こうと思つて落ち着ければ苦勞しない……。とういかなんで分かるの？」

耳にも尻尾にも、当然顔にも感情が出ない様にしていたつもりだったが。

「何となく」

「何それ……。原理はともかく便利そうだね、その能力。」

「ええ、特に相手を負かして愉しむ時とかは役立ちますよ？」

気味の悪い笑みを浮かべながらそう言うレイ。

「……はあ、そんなんだから陰口叩かれるんだよ」

もつとまともにしてたら電動車椅子の件も、早めに練習を切り上げる件も、もう少し

前向きに捉えられていたはずなのに。

「陰口ですか。私もずいぶんと嫌われたものですね。」

まあ、あれだけの事をした後ならば致し方無し、と言つた所でしようか」

レイは事もなげにそう言つた。

「……全然気にしてないの？」

「ええ。人づてに陰口を叩かれてると聞いただけでヘコむ程度のメンタルなら、とつく

に首をくくつていますよ」

「ま、それもそっか……」

ハシゴを使ってプールの中に入る。

「んで？ レイはどれくらい泳いでんの？」

「10kmほど」

10km。ウマ娘がそこそのペースで泳いで二時間程かかるだろうか。

レイがコースでの練習を切り上げたのが二時間ほど前だったから、それからずっと泳いでいるわけだ。

「えらい頑張ってるね」

「まあ、骨がもろいせいで走れる時間が限定されますから。その分は負担のかからない方法で鍛えませんか」

「……………」

ぎり…………つ。

レイが遅くまで頑張っているのを再確認すると、後輩の陰口を思い出し、また腹が立ってきた。

「…………泳ぎましようか」

歯ぎしりをする僕にそう提案してくるレイ。

「…………うん」

息を吸い、水の中に潜る。そのまま壁を蹴って、けのびで水中を進む。

水中は静かだ。雑音に惑わされる事は無い。やっと静けさを取り戻した気がする。

気づけば反対側に手が付いていた。

もう50m泳いだのか……。

水中でターンをしてもう一度壁を蹴る。

壁を8回ほど蹴った所で、息が苦しくなる。4往復泳いだところで足を付けた。

「ふはあっ！ はあ……っ！ はあ……っ！」

水面から顔を出し、荒れた息を整える。平常時の呼吸に戻る頃、横から声を掛けられた。

「素晴らしい肺活量ですね。400m息継ぎなしとは」

そう褒めてくれるレイだが、僕より先に泳いで待ち構えていたようなので素直に喜べない。

「そっちの方が速いじゃん」

「私は息継ぎをしながら全力で泳いでいましたし、比較するのはナンセンスかと。」

それに水泳で速くても意味が無いでしょう。私たちは水泳選手では無いのですから」

「それはそうだけども……」

どうしてもレイには対抗心を抱いてしまう。

僕に唯一勝ったウマ娘。

公式ではないが、選抜レースで僕の無敗を破ったウマ娘。

自分が最強最速だと信じて疑わなかった僕の鼻つ柱をへし折ってきたウマ娘。

……次は勝つ。

そんなことを考えていると、

「ありがとうございます」

急にレイがお礼を言ってきた。

「え？ な、何に對して？」

困惑する僕に、レイはゆっくりと語りかける。

「無敗で二冠を取った事に對してです。アナタという同期のおかげで、私は過去最高の晴れ舞台を手に入れたのですから。」

夢を阻止するには夢を打ち立てようとするライバルがいまさんと……こればかりは自分の力だけではどうにもなりませんからね」

夢を阻止、か。

僕にとつては、三冠はもうどうでも良い物だ。レイに勝てれば舞台はどこでも良い。

彼女を引きずり出すために二冠を取り、決戦の場面が三冠目と言うだけの事。

だから彼女の言っていた事は少しズレているのだが、わざわざ指摘する必要もないだろう。今の私の夢はレイに勝つ事。結果はほとんど変わらない。

「……ふん、僕に負けて泣いても知らないから。」

あれだけメディアの前であれだけ大口叩いたんだから、下手したら競バ界に居られないかもよ?」

対抗心からか、つい脅しのような発言をしてしまった。しかし、レイは相変わらず涼しい顔をしたまま。

「確かに。今の私は勝っているからこそ掛けられる言葉はギリギリ批判止まり。負ければ暴言の嵐でしょうね。そうなったら競バ界には居られないかもしれません……。」

けれど、それはそれで良いかもしれないね。トレーナーさんと共に罵られ、表舞台から姿を消す。その後は隅っこの方でひっそりと。それもまた悲劇的でロマンチックな……。」

トレーナーの事を話し始めたレイはどこか嬉しそうに見える。いつもの事だ。

「……レイ、本当にトレーナーの事好きだよね」

僕が<sup>からか</sup>揶揄う様に言うと、レイは顔を赤くする。照れ隠しなのか、レイは反論してきた。「好きと言うのは少々浅い言葉ですよ。私と彼はもう一蓮托生、運命共同体なのですから。」

例えるならばそう、連理の枝」

「連理の枝？」

聞きなれない言葉に首をかしげると、レイが補足説明してくれる。

「おや、知りませんか？ 連理とは、別々に生えた二本の枝が連なつて木目を同じくする事です。」

生まれた場所も違えば、異なる時間を過ごしてきた私とトレーナーさんがトレセン学園で相混じつた……まさに連理の枝と言えるでしょう」

「知らないよそんな難しい言葉……というかレイ、そんな比喻表現するタイプだったわけ？」

僕がそう聞くと、レイは驚いた表情をする。すぐに柔らかい笑みに変わった。

「それもまた連理、ですよ」

「いや、ぜんぜん分からんけど……」

なぜだか嬉しそうにしているレイに、少し気が抜けてしまった。

## 十話 ファアン感謝祭

今日は秋のファアン感謝祭。この日ばかりは学校中がお祭り騒ぎだ。だというのに僕の内心はむしやくしやくしている。

原因はやはり、レイの悪評についてだ。

ファアン感謝祭は基本クラスで出し物をする人が多いが、有名なウマ娘になると一人でも多くのファアンを呼べるので、単独での催しが出来る。

僕がこれから行おうとしているトレーナーとのダンスが良い例だろう。なんなら僕は無敗のクラシック三冠を一か月後に控えている。集客力だけならトレセン学園の中でもトップだと思う。

だつたらレイも単独での催しが出来て然るべきだ。

レイも僕と同じ公式戦無敗だ。クラシック三冠にリーチこそかけていないものの、注目度で言えば単独で催しが出来るぐらいのはず。

けど、悪役という肩書のせいで健全な集客が見込めないからと、彼女に単独での催しは許可されていない。

ここでも世間の評価と自分の評価のズレに苛立ちを覚える。

ざりっ……

「坊ちやま。何があつたかはご存じありませんが、落ち着いてくださいませ」

「っ！ な、なんだトレーナーか……。女声で急に話しかけないでよ、驚くじゃん」

急に声を掛けられて振り向くと、そこには身長190cmの女装メイドトレーナーがいた。ただでさえ見た目が心臓に悪いのに、驚かせないで欲しい。女声も相まつて威力が二倍だ。

「いえ、今はトレーナーではなく、ちよつとガタイの良いスター坊ちやまの忠実なメイドですよ」

「うええ……。敬語も止めてよ……。何か気持ち悪いし」

「今回のダンスはウマ娘が男装、トレーナーが女装して行うという趣旨です。」

ですのでアナタには名家の若き天才子息としての設定が、そして私にはそれに付き従うメイドという設定が付加されています。きちんと役柄は守りませんと」

一応そういう設定らしい。僕は燕尾服を身に纏い、トレーナーはメイド服を着ている。

「役柄ねえ……。付く物付いてる癖に」

僕はトレーナーの来ているスカートをバサリとめくりあげた。

「おわっ!! ちよ！ 何すんだスター！ あゝ、いえ……。何をなさるのですかお坊ちや

ま！」

「うええ……わざわざ女声で言い直さないでよ……。とうか一応短パン履いてるんだ。少し安心した」

もし女物の下着をそのまま履いていたら、流石に契約解除に踏み切る所だった。

とはいえ、バカみたいなやり取りをしたおかげで少しは気分が紛れる。うるさいトレーナーを他所に時計を見ると、そろそろ開演の時間だ。

「ほら行くよ。メイドさん」

「はあ……承知しました。お坊ちやま」

僕が先行しながら二人で舞台上に足を踏み出す。

ワアアアアアアア!!!

すると場は大きな歓声に包まれた。

「キヤー！ カッコイイー!!」

「こつち向いてー!!」

「メイドがデカ過ぎんだろ……」

歓声には黄色い声も交じっていれば、トレーナーに対する感想も含まれていた。

『みんな！ わざわざ見に来てくれてありがとう！ 今日ファンの皆のためにダンスを披露するから楽しんでって！』

「今日は喉が枯れるまで応援するから頑張つてねー!!」

「菊花賞も勝つて無敗の三冠を飾つてー!!」

「レイハウンドなんかに負けんなよー!!」

「スター! お前がトインクルシリーズをあの狂犬から守ってくれー!!」

ピンマイクで僕の口上が拡散されると、再び歓声が上がった。中には耳を塞ぎたくないようなものも交じっていたが。

……なんでこいつらのためにサービスしなきゃいけないんだろ。レイの事を悪く言つて、僕に勝手な期待を押し付けてくる奴らなんかのために……。

とはいえ、一か月前から企画された僕とトレーナーのダンスショー。僕のがままで中断することは許されない。

ヒクつきそうになる頬を何とか押さえつけながら、既定の立ち位置に立つ。ピンマイクをオフにし、トレーナーと手を繋いだ。後は曲が流れるのを待つだけ。

『待て……!』

突如大きな声がスピーカーから響き渡った。

裏方の娘が何かハマでもしたのだろうかと思つたのも束の間、舞台上が上がってくる二人の人影が見える。

『我らを除け者にして随分と楽しそうな事をしているな』

『ええ……。悪役と善玉とはいえ、同じ菊花賞の注目株同士、ダンスの場に誘ってくれても良かったのではないですか?』

乱入者の正体はレイとそのトレーナーだった。

レイは黒いドレスに身を包み、レイのトレーナーはオークスの時と同じような黒い外套に片目が隠れるようなウィッグを被っている。

突然の乱入者にその場の皆が顔に驚きを浮かべていた。

それは当然私達も。こんな展開は知らされていない。舞台裏が騒がしくなっているのも鑑みると、台本に無い乱入なのだろう。

「ふ、二人ともなんで……!?!」

「こ、これは一体なんだよ、おい! あゝ、い、いえ……何事ですか!? というかマイクはどこから……!?!」

『我らが崇高なる目的の前ではそんな事など小事。黙して耳を傾ける、小間使い風情が』  
トレーナーの疑問をバツサリと切って捨てるレイのトレーナー。普段の落ち着いた口調は鳴りを潜め、傍若無人なセリフ回しだ。

「なっ……! キヤ、キャラになりきりすぎですわ……!」

「そういうトレーナーは口調が崩れてるよ……!」

キャラを見失う僕のトレーナーはさておき、乱入者二人組が口を開く。

『これはいったい何事か。そうおつしやいましたね？ ダンスの場への乱入と言えば決まっているでしょう？』

『そう……………ダンスバトルだ』

「……………は？」

そんな黒幕っぽいコスプレをしているのに「ダンスバトル」とか気の抜ける事を言わないで欲しい。

観客達もぼかんとしていた。しかし、皆すぐに正気を取り戻したのか、大きな野次が飛ぶ。

「いきなり出てきてなんだお前ら！」

「これからスターのダンスだったのに……………」

「邪魔すんなよー！」

いきなり乱入してきたレイ達に対して当然の非難。とはいえ、観客達に不信感を持っていた僕はその非難に対しても腹を立ててしまう。

いや、非難の声にだけではない。わざわざ非難されるような行動をするレイにもだ。こんな事をすれば悪く言われるのは分かっているだろ？　なのになんでわざわざ

……！

冷静さを欠いた僕はレイを指差しながら、ピンマイクをオンにして叫んだ。

『なんで!!　どうして君は悪目立ちする!!　炎上しに行く!!　必要以上に悪役ぶる!!　速いの!!　強いのに!!　どうして非難される!!』

レイへの不満と観客への不満を同時に吐き出したため、滅茶苦茶な内容。

キイイイイ……ン

不快なマイクのハウリングに、血の上つていた私は少し落ち着く。大勢の前で叫んだ事を後悔し始めた頃、レイがゆっくりと喋り始めた。

『悪役ぶるも何も、私は悪役そのものですよ。自らの栄光には興味のない、人の栄光の架け橋を壊すことに快楽を覚える腹黒ウマ娘……』

それに私が観客からいくら非難されようとアナタには関係無いはずでは?』

『いや、それは……!』

そんな事はない。僕が認めたレイが非難されるのはムカつく。

しかし、僕がそう言う前にレイは割り込んでくる。

『関係無いはずですよ。大切なのはアナタが何を信じるか。そしてアナタを信じてくれるのは誰か……』

それさえハッキリと分かれば、雑音は耳に入ってこなくなりますよ。このように……』

そこまで言って、レイは観客の方に体を向ける。

『ここにお集まりの皆様方。全員が菊の舞台上で流れ星が輝くのを期待しておられる事でしょう。』

どうか存分に期待してください。思いの限り彼女の勝ちを願ってください。その方が失望した時の落差が大きくなりますから。

流星が瞬またたくのは一瞬……光り続けはしません』

ドレスの裾を持ち上げ、お辞儀をして締めるレイ。当然観客席は大騒ぎ。

「ふざけんなー!!」

「人の邪魔するお前とは違って、無敗のクラシック三冠を目指すスターは強いんだよ!!」  
「3000m走れんのかー!!?」

場はもう滅茶苦茶だ。下手をすれば暴動になってしまいかねない程。

レイにとっては、その場の全員から敵視されていると言っても過言ではない状況だ。しかし、彼女はただ堂々と舞台上に立っていた。

(大切なのはアナタが何を信じるか。そしてアナタを信じてくれるのは誰か……)

それさえハッキリと分かれば、雑音は耳に入つてこなくなりますよ)

雑音。レイにとってはこれが雑音なのか……。

その姿を見てみると、レイの事を悪く言われて心を乱していた自分が、ひどく弱い様に感じられた。

僕が何を信じるのか。僕を信じてくれるのは何か。

がやがやがや……！

……ああもう、こつちが考え事してるつてのに……！

『みんな静かにして!!』

私が叫ぶと、場は再び静まる。

『……僕は勝つよ。菊花賞でレイに勝つて三冠を果たす。

今日はその前哨戦。ダンスでも僕は負けない。だから皆は静かに見ててよ』

場をひとまず静かにさせる為に僕はそれだけを言い、トレーナーの手を取った。それを見て、レイとそのトレーナーも踊り出しの構えに入った。

観客達も僕の言葉どおり静かに事態を見守っている。

そこに音楽が流れ始めた。グチャグチャになった流れの中、裏方の娘は機を逃さず良くやつてくれたと思う。

練習で何度も聞いた曲。トレーナーも僕も反射のレベルで踊り始めた。僕たちが躍るのはアップテンポなタンゴのダンス。踊りの最中、考える。

僕が何を信じるか……。僕を信じてくれるのは何か……。

僕が信じる物……。レイが速くて強いって事。

彼女はトレセン学園に入学するまで無敗だった僕を負かして、それ以来快勝を続けている。学園内の野良レースですら彼女は負けなしだ。

僕なんかとは違う真の無敗。

天賦の才だけでなく、確かな努力によつて鍛造された日本刀のような脚。骨がもろく、下手をすれば壊れてしまう脚を、あそこまで正確に良く鍛え上げたものだ。

周りから何と言われようと気にせず、我を貫き通す精神力。もろい彼女の脚を壊さずに鍛え上げたのにはそれも一役買っているはず。

彼女は同期の中では間違いなく一番優秀だ。尊敬すらしている。……彼女の素行は除外するが。

ちらとレイの方を見ると、彼女達は落ち着いたワルツのダンスを踊っていた。

タンゴ用の曲にワルツのダンスを良く合わせられるものだ。かなり前から乱入を計画していたのか？　と思う程の完成度。

「……なんでい、あいつら、自信満々にダンスバトルを吹っ掛けてきた割には大したこと

ないじゃねえか」

しかし、観客席からそんな声が聞こえてきた。大きな声では無かったが、ウマ娘の優れた聴力はその声を勝手に捉えてしまう。

確かにタンゴの僕達とワルツのレイ達を見比べれば、動きが派手な僕たちの方が良く見えるだろう。そもそも曲がタンゴ用でもある訳だし。

それを考慮せずに、大した事が無いと言うのは少し乱暴だ。

とはいえ、謂れ無いレイに対する非難を聞いても、僕の心は落ち着いたままだった。

……僕とレイは同室で、レイの事は僕が一番よく知っている。レイの凄さは僕が知っている。それで事足りる。

前までは腹を立てていただろうが、今は不思議とそう思えた。

レイの事を考えていると、そこから派生して次のレースに思考が飛ぶ。

菊花賞、京都競技場3000m、右回り。その舞台上僕はレイに勝てるのだろうか？勝てる算段はある。勝つために努力もしてきた。

しかし、選抜レースでの敗北の記憶がいつも僕を咎める。全力で走ってもレイには追いつけなかった場面を回想すると、ひどい無力感に包まれてしまう。

僕は自分自身を信じ切れしていない。自分ならレイに勝てるかと信じ切れしていない。自分を信じているのは、少なくとも自分ではない。

自分でなければ誰だ？ ……観客？

いや、観客は僕を信じてくれているわけではないと思う。

信頼、期待というよりは要望？ 僕に三冠を取る義務を課しているようでもうどうにも嫌だ。

「……………」

グイと手を引つ張られた。そこで動きが小さくなっているのに気づき、慌てて修正する。

ごめん、トレーナー。

目配せで謝意を示す。すると、トレーナーはウインクで返してきた。……………申し訳ないけど、少し気持ち悪いと思った。

曲も終盤に差し掛かり、ダンスもクライマックス。そこで思わず口を開いた。

『……………トレーナーは、菊花賞で僕が勝てると思う？』

トレーナーは驚いたような表情をした。しかし、すぐに自信満々に返事をしてくれる。

『勝てるさ。お前は天才だ。その上努力家。油断と慢心も選抜レースで克服した。』

しかも舞台は京都競技場の3000m。バケモンみたいな肺活量にステイヤー気質の脚を持っているお前が負ける道理は無い。

あの魔王達に思い知らせてやれよ、勇者様。戦う舞台を間違えた、つてな』

僕の次に……いや、走りに関しては僕以上に僕の事を知っているトレーナーからの言葉。心に芯が通ったような気がする。

同時に照れくさくなってきた。普段は三枚目のキャラなのに、こういう時だけカッコつけないで欲しい。

『……口調。キャラ守れてないよ』

『さつきはトレーナーとしての発言ですことよ。今からはただのメイドに戻りますわ』

『ふふっ……。都合が良いんだね』

そんな事を話していると、曲は最後の小節へ。

曲の終わるタイミングで、決めポーズとしてスローアウェイ・オーバースウエイを決める。

本来この決めポーズは男性側（僕）と女性側（トレーナー）の間に距離を作り、大きく印象的に魅せるポーズなのだが、僕は一步踏み出し、トレーナーに詰め寄る。

『えっ……！　ちよ、顔近いって……！　それにポーズ！　ポーズ！』

僕に背中を支えられ、顔を間近に近づけられたトレーナーは驚いている。予定外のポーズだから尚更だろう。

しかし、僕はトレーナーの苦情申し立てを無視して囁く。

『……菊の舞台上で三冠を贈るよ、トレーナー』

自分自身ですら信じられなかった、僕の勝利を信じてくれるトレーナーのために。

『お、おう……』

……女装姿で頬を赤らめるのは止めて欲しい。

ウワアアアアアアアアアア!!!

締まらないな、という思いは大きな歓声にかき消された。

「スター!! 勝てよー!!」

「応援してるからねー!!」

「トレーナーを三冠男にしてやれー!!! いや、女か……?」

「頑張つてー!!」

どうしてそんなに観客達が騒いでいるんだろうか。いや、ダンスが終わったのだから歓声上がるのは不思議な事では無いが、それにしてもは歓声の内容が妙だ。

まるで僕たちの話を聞いていたかのような……。

頭に疑問符を浮かべていると、トレーナーが顔を真っ赤にしなが僕らの胸元を指してくる。

胸元? 胸元には……

『あつ、ピンマイク……。切るの忘れてた……』

トレーナーとの会話は全部筒抜けだったわけね……………。

トレーナーと僕、二人して顔を真っ赤にしながら、その日のダンスショーは終わりを迎えた。

## 十一話 我儘

秋のファン感謝祭。その一角で行われたダンスバトルの終了後。

『ふふふ……。今日のダンスバトルに関してはお前らの勝ちだ。それは認めてやろう。

しかし！ 前哨戦に勝ったぐらいで良い気になるな。本番は一か月後、それもターフの上でなのだからな。

その時は我が篤実なる僕（しもべ）が貴様らを噛み砕くだろう……。』

……ふふふふふ……はははははは……！！ はーはっはっはあ!!!』

「帰れー!!」

「何しに来たんだお前らは!!」

「後、うるせえ!! ピンマイク切ってから笑え!!」

レイのトレーナーはマントを翻（ひるがえ）しながら、舞台から去っていく。レイは観客達にお辞儀を残し、トレーナーの背中に続いた。

舞台から退（しりぞ）いた二人は、トレーナー居室に戻ってきていた。レイは相変わらず電動車椅子に乗っている。

「お付き合いいただき、ありがとうございます。それとすみません、いきなりダンスショーに乱入したいなんて我儘を言いだして」

「いや、問題無いよ……。レイと踊るのは楽しかったしね……。可愛い我儘だったよ……。」

それより良かったのかい……。？ 乱入したものの、結局は非難されただけで終わってしまったし……。」

「ええ。悩んでいたスターを激励したかっただけなので。」

それにあの場の主役は彼女とそのトレーナー。乱入者が主役を食ってしまうのはマナー違反ですから。引き立て役としては良く振舞えたでしょう？」

「そうだね……。結果的には大盛り上がりだったし、それで良しでしょうか……。」

それより意外だったな……。君がダンスなんて……。」

それを聞いてレイは少しムツとした表情に。

「おや、私はダンスを踊るようなタイプには見えませんか？」

「いや、そうではなくてね……。」

電動車椅子に乗るほど足を氣遣っているのに、踊るなんて足に余計な負担のかかる事をするとは、と思っただけなんだ……」

「ああ、そういう事ですか。それなら……」

レイは「菊花賞で争うスターの調子を取り戻す方が重要だっただけですよ」と言葉が続けようとしたが、少し押し黙る。

「……トレーナーさんと踊る方が大事だった、という答えはいかがでしょうか？」

レイは揶揄（からか）いの笑みを浮かべる。

「ダンスショーに参加したのはシューティングスターを励ますためじゃなかったのかい……？」

トレーナーのズレた回答に対して、レイはじつとりとした目を向けるが、すぐに氣を取り直す。

「それは半分……いえ、三分の一ぐらいでしょうか。」

残りの三分の二はトレーナーさんと踊る事が目的でしたよ。そして非常に楽しかったです」

「そうか……。こちらこそ、で良いのかな……？」

「ええ。私とのダンス、楽しんでいただけただけなら幸いです」

レイはそう言うのと、トレーナーに背を向けてコーヒーを作り始めた。その口端を少し

持ち上げながら。

一方でトレーナーはウィッグと外套、上着を脱ぎ、クローゼットにしまった。

「さて、これからレイはどうするんだい……？ ファン感謝祭はまだ終わってないけど、どこかを見て回るとかするのかな……？」

「これからですか……。そういえば「ダンスショーに乱入したい」というのは可愛い我儘、なのですよね？」

でしたら、もう一つ可愛い我儘を聞いていただいても？」

「構わないよ……」

「では、この服を着て耳と尻尾と髪の手入れをしていただきたいです」

会話中にコーヒーを作り終えたレイは、どこからともなくチェーン付きの黒ベストと白手袋を取り出した。

「それは……」

「私のクラスがウマ娘の執事喫茶をやるそうなので、一着余分にオーダーしておいたのです。」

サイズは目測なのでぴったりではないかもしれませんが、大方は合っていると思いますよ」

トレーナーは服を受け取り、黒ベストと白手袋を着用する。ワイシャツにネクタイ姿

と相まって、まさに執事のような格好になった。

「サイズは問題無いね……。まずは耳からで良いかな……。う？」

「ええ。耳は手袋のままですぞ」

「じゃあ、失礼して……」

トレーナーはゆつくりと指をウマ耳に触れさせた。その途端、ウマ耳がピクンと痙攣する。

「……少しびつくりしただけです。続けてください」

レイの言葉の後、五本指がウマ耳を捕らえた。すぐさま、もう五本の指がウマ耳の根元を優しく抑える。

そのままウマ耳の外側を手が撫でていく。

カチャツ……

レイが持っているコーヒーカップと、ソーサーが触れ合う音がした。

「珍しいね……。普通、ウマ娘は耳を触られるのを嫌うと聞いていたんだけども……」  
「それは少し偏見ですね。耳を触られるのが嫌なのではなく、気を許していない人に触られるのが嫌なだけですよ。」

人だって赤の他人に耳を触られたくはないでしょう？ 物珍しいからとウマ耳を遠慮なしに触り、嫌がったという事例が表面化しているだけかと」

「それもそうか……。耳の中もすれば良いのかな……。う。」

「……え、ええ……。その前に少し失礼します」

レイはコーヒークップを傾け、中身を半分ほど飲み干した。

「どうぞで」

ウマ耳の外側を撫でていた指が、内側に侵入する。

ガチャツ……！

レイが持つているコーヒークップとソーサーがぶつかり、大きな音を立てた。

指は耳輪の部分をなぞるように動く。そして徐々に奥の方に寄って行く。

カチカチ、カチ……

コーヒークップとソーサーが細かくぶつかる音がしている。

時間をかけて周辺部を整えた指は、ついに耳の穴にまで侵入した。

「っ……！」

レイの上半体が鋭く前傾する。少しだけ零れたコーヒークップがソーサーを濡らした。

耳の穴に侵入した親指が回転し、ごぞごぞ、という音がレイの頭に響き渡る。

指から逃れようと首を傾げる無意識の反射を押さえつけ、不動のまま耳をほじくられるレイ。

るレイ。

彼女の顔はトレーナーには見えてないが、くすぐったそうな、嬉しそうな、それでい

て真つ赤な……とにかく混沌とした表情をしていた。

長いようで短い間、耳を蹂躪していた親指が引き抜かれた。その代わりに人差し指と中指が耳の内側を撫で、耳毛を整えていく。

しばらくして右耳の手入れは終わった。トレーナーは手袋に目を落とす。

「綺麗にしてるんだね……。垢一つなかったよ……」

「ま、まあ……。毎日……。耳掃除を……。してますから……」

レイの息はなぜか荒く、その言葉はとぎれとぎれだ。

「なら耳の穴までする必要は無かったね……。ごめん、勝手に指を入れてしまつて……」

「い、いえ……。汚れが残っている可能性もありますし……。全然大丈夫ですよ……。はい

……」

「そうか……。じゃあ、もう片方も同じようにやるね……」

トレーナーがそう言った瞬間、まだ手付かずの左ウマ耳がペタン、と伏せた。

レイは残りのコーヒーを全て飲み干し、カップとソーサーをテーブルに置く。そして耳を再倒立させ、

「……………ど、どうぞ……………」

そう言った。

その結果はここに書くまでもないだろう。

悶絶の耳掃除を終えた二人。次は髪の手入れ。

ダンスで大きく動いたため、毛先が少し荒れている。それをトレーナーが手櫛で梳いていく。

さつ……………さつ……………さつ……………

髪と指が擦れ合う音だけが部屋に広がる。

「何というか、柔らかいね……………。私の髪質とは比べ物にならない……………」

レイの髪を梳きながら、感想を述べるトレーナー。

「ええ、それはもう。髪と尻尾はウマ娘の命とも言いますから」

「なら今の私は君の命を預かる身だ……。丁寧にやらないとね……」

トレーナーは柔らかな素材のブラシを手に取り、優しく髪に通す。

「もう少し奥まで差し込んでも大丈夫ですよ。そのブラシは先端にマツサージピンが付いていますから。」

頭皮に先端が触れるぐらいでお願いします」

「分かった……」

レイの言葉に従い、ブラシが奥まで髪の奥まで差し込まれた。ブラシの先端が頭皮に触れる。

そのままブラシは頭の形に沿うように動かされ、髪を梳いていく。

さつ……さつ……さつ……

一連の流れが繰り返されるたびに、レイは目を細め、頭にブラシが当たる感覚を意識していた。

しばらくすると髪が綺麗にほぐされた状態に。

「仕上げはこれでお願います」

レイがトレーナーに獣毛ブラシを手渡す。トレーナーがそれを使って髪梳くたび、動

物由来の油分を含んだブラシのおかげで、髪に艶が増していく。

「すごいね、このブラシ……。髪がまるで……」

お得意の比喩表現を用いようとしたトレーナー。しかし、途中で口を噤む。

「一梳き毎に綺麗になっていくよ……」

代わりに無難な感想を述べる。

「おや？　いつもの例えは無しですか？　てっきりまたヘドロの様だと言われるのかと

……」

「友人に注意されてね……。比喩は止める事にしたよ……」

「まあ、賢明な判断ですね。個人的には好みでしたが」

場は再び、髪を梳く音だけが支配する。

「……こうして世話をされていると、まるでお嬢様と執事のような関係に思えてしまい

ますね」

ふとレイがそんな事を言った。

執事服を着たトレーナーに、ダンスの時のドレス姿のままのレイ。確かにお嬢様とそ

の世話をする執事の様だ。

「お綺麗ですよ、お嬢様」

いつもの間延びした喋り方ではなく、はっきりとした口調でそう言うトレーナー。

「……お嬢様、ではなく「レイ」でお願いします」

「承知しました。お綺麗ですよ、レイ」

褒められたレイは、へにやりと破顔する。

「それではトレーナーさん……いえ、セバスチャン。尻尾もお願いしますわ」  
「承りました」

二人はそのままロールプレイを続けながら、尻尾の手入れを行った。

## 十二話 菊花賞

10月24日、京都競バ場。

『さあ！ 今年もやってまいりました、菊花賞！ ウマ娘達にとって一生に一度の挑戦！ クラシック三冠の最終舞台！』

しかも今年は無敗の三冠に手を掛けたウマ娘がいるぞ！ 現在パドックで顔見せをしている5枠シューティングスター！ 当然一番人気！

秋に唯一輝く一等星！ まさにフォーマルハウト！ 胸に二冠の勲章を携え、大歓声を受けています！』

『無敗のクラシック三冠となると、20年以上ぶりですからね。是非とも頑張つて欲しいです。会場にいるほとんどの方々もそれを見に来ているのではないでしょうか』

『しかし！ 煌めく彼女の前に不気味な影が！ 三か月前にティアラの榮譽をズタズタに引き裂いた黒い獵犬！ 6枠レイハウンド！』

冠ハンターがクラシック三冠にも表れた！ 彼女の前で三冠を賜る事は叶わないのか！ ああつと！ 全く歓声がありません！』

『相変わらず人気は低いですが、実力はオークスで証明済みですよ。しかし、彼女は24



「んで、お前もその衣装なのな……」

観客席でパドックの成り行きを見守っていたスターとレイのトレーナー。

レイのトレーナーはもちろん、黒の外装を着て、長めのウィッグを装着していた。彼女のトレーナーとして役割を果たさなければいけないからね……」

「そのせいでやたら敵視されてんだよな、俺ら」

ギユウギユウ詰めめの観客席だが、二人の周りには少し空間が出来ている。

そしてレイのトレーナーには厳しい視線が注がれていた。

「敵視されているのは私だけでは……？」

「その近くにいる俺もとぼっち喰らってんだよ」

「なら離れた所に行けば良いのでは……？」

「もう観客席は全部埋まっちゃった。ここ以上の特等席は無えよ。……つと、もう本バ場入場か」

パドックでの顔見せを終えたウマ娘達が、続々とゲート前に集合している。その中には当然、スターとレイの姿も。

「レイ！ 我が篤実なる獵犬よ！」

オークスの時と同じ口上を叫ぶレイのトレーナー。

「流れ星の正体など、所詮は数センチの塵芥ちりあくた。大気圏で燃え尽きる儚い存在……。

お前の手で引導を渡してやれ。流星は今日、菊の舞台で燃え尽きるのだ」

「ご命令とあらば、仰せの通りに……」

それに対して鷹揚にお辞儀を返すレイ。スターのトレーナーは耳を塞いだ。

BOOOOOOOOOOOOO!!!

その直後、観客席は怒号に包まれた。京都競バ場が人の声で震える。ここが雪山なら確実に雪崩が起こっていただろう。

『あーもう！ また煽ってからに！ 係員はなんであの人入場させちやつたんですか！？』

『トレーナーは関係者として裏口から入れますからね。入場を止めるのはまず無理でしょう』

『そんな解説はしなくて良いですから!!』

「はあ……。まあた悪目立ちしてからに……」

罵詈雑言をBGMに、呆れた顔をするスター。レイは微笑を絶やさずに答える。

「私は悪役ヒールですから。悪役はブーイングを受けるのが役割……。あなたも役割を全うしたらどうですか、一等星さん？」

「ふん、あほらし。なんでわざわざそんな事……」

「スター!! 頑張れよー!! お前は空に輝く流星だ!! 犬っころの牙なんか届くわけねえつてとこを俺に見せてくれ!!」

轟音の中でもはつきりと聞きとれる大きな声。スターのトレーナーが叫んだようだ。

「……ですつて、流星さん」

「……あーもうー!」

スターはガシガシと頭を掻いた後、三本指を突き上げる。

ワアアアアアアアアアアアアアア

それをきっかけに、客席のブーイングが全て歓声に変わった。

三本指、つまり三冠を取るぞという宣言。観客が湧かない訳は無かった。

「何だかんだでノリノリですね」

「ふん……。トレーナーが煽るから仕方無くやっただけ」

「仕方無く、ですか。その割には満更でもない顔ですが」

「つ……。う、うるさい! もうゲートインするから!」

そんな茶番を繰り広げる二人。それを見つめる二人のウマ娘が。

「二人とも余裕だねえ」

「まあ、あれだけ強ければねえ。無敗の獵犬と流星、カツコいいねえ」

「でも二人の無敗が競えば片方は無敗じゃなくなっちゃうよねえ」

「そうだねえ……。今日はどちらかの無敗伝説が確実に崩れ去る。勝負の無情だねえ。」

ま、もつとも崩れ去るのは片方だけじゃないかもだけど、ね……」

「……………そうだねえ……」

二人はニヤリと笑った。

『さあ各ウマ娘、ゲートインを終えました！ ……そして今！ クラシック最強のウマ娘を決めるレースがスタートしました!!』

素晴らしいスタートを決めて真っ先に飛び出したのはこの二人！ ジャックテイアとクイーンコーヴァス！ クラシック戦線はこの二人が牽引してきた！ 今日でも今日とて大逃げだあ！』

『3000mという長丁場。大逃げが決まる事は稀ですが、頑張つて欲しいですね』  
『シューティングスターはいつも通りの好位置！ 6番手につけています！ そしてレイ  
ハウンドは後ろの方で目を光らせているぞ！ いつ牙をむくのか！』

レースはそのまま一度目の第三コーナーへ！』

(実況もあの二人を鼻<sup>ひいき</sup>舐<sup>き</sup>してゐるねえ)

先頭を走るジャックテイア。

(でも、私達は菊花賞のために積み上げてきたんだよねえ。皐月賞、日本ダービーと後塵<sup>こうじん</sup>  
を拝して……)

そのすぐ後ろを走るクイーンコーヴアス。

二人は菊花賞のために協力し、皐月賞、日本ダービーで布石を打っていた。

(普通の逃げじゃなくてわざわざ大逃げをしている理由。それはこの菊花賞で後ろの  
ペースを乱すためなんだよねえ)

(そうそう。前の二つのレースで大逃げをする事で、私達が他の皆を先導……つまり  
レースのペースを作る役割をしたんだよねえ)

(その上で、今は大逃げよりはペースを落としている……)

その結果、私達をペースメーカーとしている娘はいつもより遅く走る事になってしま  
うだよねえ)

(そして私達をペースメーカーにしている娘をペースメーカーにしている娘も、いつも  
より遅く走る事になってしまふ。その連鎖は最後尾まで続く。

つまり私達がこのレースのテンポを握っていると云つても過言じゃないんだよねえ)  
(全体的にスローテンポにすれば、終盤後ろから差されないだけのスタミナと脚を私達  
は残せる。

そして後ろの娘達はスタミナを余らせての不完全燃焼に終わる)

ジャックとクイーンは再びニヤリと笑う。

(私達ながら、完璧な作戦なんだよねえ……！)

『コーナーが終わりホームストレッチへ！ つとお!! ここでシューティングスターが  
上がってきた!! 逃げる二人のすぐ後ろにいるぞ!』

後ろの方でもレイハウンドが順位を上げている! 序盤は控える彼女にしては珍し

い!!』

「「なっ……………」」

「無駄だ」「無駄だね…………」

「スターは50kmから70kmまで1km単位で速度を調節できる。元々の奴なんかペースメーカーにしてねえんだよ」

「レイは5分を誤差1秒以内で数えられる……。ペース配分を間違える事はないよ…………」

『さあ!! 二人に釣られたのか全体のペースも上がってきたぞ! こうなると苦しいのは逃げる二人! 詰まりすぎている! 簡単に捲られてしまう距離だ!!』

「くっ……………」

(良い体感速度をお持ちで……………!)

(良い体内時計をお持ちで……………!)

策を破られたジャックとクイーン。

(けど、これぐらいは想定内。二の矢もあるんだよねえ、私達には……！)

しかし彼女たちの目はまだギラリと光ったままだった。

## 十三話 三冠の行方

『直線も終わり軍団は第一コーナーへと差し掛かる！　ここで逃げの二人がペースを上げたぞ！　後ろから追い立てられ、気が気でなかったか！』

『先頭の二人、素晴らしいコーナーリングです。体がまったくヨレていませんよ。二人でぴったり張り付いたまま曲がる姿は組体操にも似た芸術性を感じますね』

『おっと！　ここでジャックの後ろを走っていたクイーンが前に出てきた！　しかしジャックも容易くは抜かせない！　先頭は私のものだ、と競り合っているぞ！』

しかし、ここで先頭交代！　クイーンがジャックを抜かし、前に出た！　ジャックはクイーンの後ろにピタリと張り付く！』

『ジャックティア、先頭を譲りはしましたが、すぐ後ろに付いたのはなかなか冷静ですよ。前を走るクイーンコーヴァスを上手く風よけにしていますね。そのまま脚を溜める作戦でしょう。』

一方的に利用されているクイーンコーヴァスはかなり嫌だと思えますよ。ペースを乱さなければ良いのですが』

(解説さん、ご名答だねえ。そう、確かに僕はクイーンを風よけに使ってる)

(けど前を走る私が嫌がっている事は無いんだよねえ。だって、風よけ役を交代したただけだから)

(そう、序盤は僕が先頭を走り、1000m地点まではクイーンの風よけになっていたんだよねえ)

(そして1000m地点で競り合いを演じているように見せ、ジャックと私で自然に先頭を入れ替わった。

露骨に先頭を変わっても、進路妨害を取られるかもしれないし、談合だ、と騒がれるかもしれないから、あくまで競り合いを演じながらゆっくりとねえ……)

(そしてここから1000mは僕がクイーンの風よけになる。

他の娘達が自分だけの力で3000mを走るのに対して、私たちは1000mずつ体力を温存している)

(つまり圧倒的有利、なんだよねえ……!)

(そうして他の娘達に有利を取った後は、私達で、恨みっこなしの末脚勝負……)

(これぞまさしくスリップストリーム・トレイン作戦。

私達の内ですべて完了する、邪魔される事も破られる事もない完璧な作戦なんだよねえ……！)

『さあレースも終盤に差し掛かってきた！ 第一コーナー抜けてそのまま第二コーナーへ！ つと！ ここで一気に上がってきたのはシューティングスター!! まさかこんな所からスパートか!』

『いえ、前を逃げる二人のすぐ後ろに付けましたね。恐らく彼女も前を風よけにしようという作戦ではないでしょうか?』

「なっ……!」

クイーン、ジャック、スターの順番で三人がびつたりと並んだ。まるで三両編成の電車のよう。

(いつの間に……! 気配を感じなかった。いや、僕と足音、呼吸を合わせて気づかれないうようにした……!?)

いきなり後ろを取られ、取り乱してしまおうジャック。

(このままじゃ、こいつにも脚を溜めさせてしまおう……! くっ!)

ジャックは強く踏み込み、芝と土を後ろに巻き上げた。風よけにされないための後ろへの妨害。

(どうだ……!?)

後ろを確認するジャック。しかし彼女が後ろを確認した時、スターはそこにいなかった。

「っ……!?!」

(どこに……!?)

左右を確認するが、スターは見当たらない。しかし再び後ろを見ると、そこには確かにスターがいた。

(い、いったい何が……!)

『おっと! ジャックタイヤの後ろに付いていたシューティングスターがいきなり横にヨレた!! しかしすぐに後ろに戻りました!』

『めくれた芝や土を避けたのでしょうか。それにしても機敏な動きですね。縦横自由自在の素晴らしいステップです』

(ならもう一度……っ！)

再び土を後ろにめくりあげるジャック。しかし不自然な脚の力の入りを見抜いたスターは難なく避ける。

「くそっ……！」

風よけにされるだけのジャックはどんどん平静を失っていく。

(落ち着けジャック……！　ペースを落とすんだ。そうすれば後ろのスターもペースを落とさざるを得ない。)

しかし私達と一緒にペースを落とし続ければ、後続に差される恐れが出てくる。スターは前に行くしかない。

無敗の三冠を期待されてるスターなら、その気負いから、なおさらペースは落とせなはずだ。私たちはその後ろに付いて体力を温存すれば良い……！)

前を走るクイーンはジャックより冷静だが、その思考をジャックに伝えることは出来ない。

彼女は自分からペースを落として後ろを走るジャックのペースを落とそうとも考えた。しかし、後ろを気にしてばかりのジャックにそれをする、下手すれば衝突してしまいかもしれない。

(くっ……！)

何もできない状態に齒噛みするクイーン。

一方でジャックは無駄に芝をめぐりあげたり、後ろを気にしすぎたせいで無駄に体力を消耗している。

そして後ろを気にしすぎるあまり、クイーンの真後ろから離れてしまったので、風よけの恩恵も受けられなくなった。さらに体力を消耗する。

「はあっ、はあっ、はあっ……！」

ジャックの息が荒れ始めた。

『先頭に行く三人！ しかしジャックが段々と失速している！ 後ろにぴったりとつかれたプレッシャーにやられたのか!? ズルズルと後退！』

こうなれば二人旅！ シューティングスターがクイーンコーヴァスの真後ろにつける！

またまた前を風よけに使うシューティングスター！ 貪欲にスタミナを溜めているぞ！』

『多少のリスクを負ってでも、スリップストリームを狙う。勝利への執念が伺えますね。全力投球です。』

無敗の三冠を目指すウマ娘として王者の走りを期待していましたが、今の彼女はまるで挑戦者ですよ。実力以上の走りをしよう、という気概が感じられます』

『レースは2000m地点を通過！……つと、ここで後続が追い上げてきた！先頭との差が段々と縮まって……いや、これは前を行く二人が失速しているのか!?!』

『そうですね。後続との差、ゴールまでの距離を考えて息を入れているのでしょうか。風よけにされているクイーンコーヴァスにとっては、急ぐ意味ありません。冷静ですよ』

「ふっ……!」

クイーンが段々とペースを落とす中、スターは横に飛び出し、一気に加速する。

(来たっ……! ついに焦れたねえ。今度は私がスリップストリームに……!)

前に出るスターの後ろに位置付けるクイーン。前後が入れ替わる。

(良し……! このままスターの後ろに付けて脚を溜める。そして最後に差して勝つ!)

逃げ脚質の私には一瞬の切れ味は無い。けど、へばったウマ娘を抜くだけなら私にも……というより誰でも出来るんだよねえ……!!)

そう考え、表情を緩めるクイーン。

「ふっ……ふっ……ふっ……ふっ……」

しかし、彼女は前を行くスターの呼吸音を聞いてしまった。

「っ……!!」

(どうしてこいつは息が切れてない!? まるでジョギングでもしているかのような息遣い……!!) どんな心肺機能して……っ! もう、2000mも走ってるんだぞ……!!?)

ペキ……

「はっ、はっ、はっ……!!」

(私はこんなに息が荒れているのに……!!)

ピキピキ……

「ふっ……ふっ……ふっ……ふっ……」

「はあっ、はあっ、はあっ……!!」

(スターを風よけにして呼吸を整えれば……。いや、もうそんなレベルの差じゃ……)

ボキ

その時、何かが折れる音がした。

その音は誰にも聞こえない。無論、クイーン自身にも。

しかし確かに折れたのだ。彼女の心が。

闘争心を失った彼女は、自身でも気づかない内に失速する。スターの真後ろから外れ、風の抵抗をモロに受けてしまい、更に失速する。

この時、彼女の菊花賞は終わってしまった。

『クイーンコーヴァスどうした!? ここに来て急に失速!』

こうなればシューティングスターの一人旅! このまま逃げ切るのか!? しかしレースはまだ800mも残っているぞ!』

(まあ、いくら心肺機能が強いとはいえ、脚の方は結構限界なんだけどね……)

早めに折れてくれて助かった。あのまま後ろに付かれていたらどうなっていた事やら)

クイーンの失速を確認したスターは少しペースを落とす。

(スリップストリームに入ったおかげで後続とはかなり距離を離れた。けどスパートの脚は残ってない。

後は休みたいって駄々こねてる脚をなだめながら走り切るしかないか……。もう後ろを気にしてもしょうがない。体勢をいたずらに崩すだけ)

スターは前を向く。

(……………とはいえ怖いなあ……。アイツにいつ抜かされるとも分かんないのは)

そして少し頬を引き攣らせた。

(速い。先頭のスターは……。もう残り三八ホン。だとするとゴールタイムは……。3:0

1:00〜3:01:50ぐらいか)

バ群の後ろに控えていたレイは、類稀たくいまれな体内時計からスターのゴールタイムを推定する。

そしてそのタイムは、レイがレース前に想定していたものより速い。

(私の今のペースは3:02:00想定。つまり今のままでは勝てない。ならどうする？  
早めにスパートをかけるか？ けれど……)

そこでレイの脳裏にトレーナーの言葉が浮かぶ。

(いいかい……？ スパートを掛けるのは600m地点からだ……。そして全力で走って良いのは400、いや、300mだけ……。それ以上は君の脚にとって負担になりすぎる……)

だから間違っても800m地点の下り坂でスパートをかけないように……。下りで勢いをつけてスパートにつなげたいかもしれないけど、我慢するんだよ……)

(……)

レイは目を閉じる。

「……すみません、トレーナーさん。でも勝つにはこうするしかないんです」

思うだけでなく、わざわざ言葉にしたのは罪悪感の発露か。

レイは目を開く。その瞬間、芝と土が爆発した。

『さあ、後方集団が下り坂に差し掛かり、一気にペースを上げてきた！ 先頭を行くシューティングスターとの大差をゴールまでに埋める事が出来るのか!?』

その中に順位を上げる一つの影が！ 来たぞ来たぞ！ 黒い凶兆、六棒レイハウンドオ!!』

「……………!!」

レイのトレーナーは、彼女の早仕掛けを見て目をカツと開いた。そして観客席から身を乗り出して叫ぶ。

「スパートが早すぎる!! ダメだ!!」

しかし彼女と彼の距離は遠すぎる。観客の歓声も相まって彼の声は彼女には届かない。

それでも限界ギリギリまで身を乗り出して叫ぶ。

「レイ!! ダメだ!! 脚が折れるぞ!!」

「な……………っ！ それは一体どういうことだよ!?!」

「くっ……………!!」

彼はウィッグと外套がいとうを放り捨て、ゴール後方へと移動を始める。

「どいてくれ!!」

いつもの間延びした口調と、無表情はなりを潜めている。焦りを隠せない彼は、満員の観客の間を強引に進んでいった。

『先頭は第四コーナー終わって最終直線に！ 後続集団が後ろからどんどん追い上げてきているぞ！ しかしシューティングスターの足色が衰えない！ このまま逃げ切るのか!?!』

ここであがってきた！ 上がってきたぞレイハウンド！ 一人だけ早回しだ！ 後方集団から抜け出し、先頭を行くシューティングスターに迫る!! 獵犬が流れ星を射程に捉えた!! その差は8バ身！

後ろは追いつけそうもない！ 二人の一騎打ち！ 獵犬の牙が流星に突き刺さるのか!?! それとも数多の星屑を振り切り、一等星がターフで輝くのか!?! 残りは200m!

差は2バ身！ 1バ身！ そして並んだ!! そのまま勢いが止まらない!! 半バ身

差でゴール!! 菊花賞でも黒の獵犬が冠を狩り取ってしまったあ!!

……つと? ゴールしたレイハウンドの様子が……おかしいぞ……? まるで片足をかばうかのように……つ! こ、故障でしょうか!? 危ういフォームのまま減速していきます……!』

みし……つ

「……つ〃……!」

ド……ツ……

「はあっ……!」

みし……つ〃

「つ〃……あつ〃!」

ズザ……ツ

「つはあ……つ!」

みし……つ〃!

「あゝぎぎ……っゝ……！」

激痛と少しの安寧を何度繰り返しただろうか。とても長い時間そうしていたような気がする。

その甲斐あつてか、私の身体は小走り程度にまで減速していた。

左足を引きずるようにして、歩き続ける。

……勝った。勝ったんだ。左足が痛い。無敗のクラシック三冠を阻止してやった。負けたスターは今どんな顔をしているだろうか？ きつと、痛い、表情をしているはずだ。早く彼女の表情を味あわないと……痛い。観客達も、痛い、きつと静まり返って、痛い、失望の、痛い、痛い。

苦痛が思考に不純物として混ざって気持ち悪い。

体が何かに受け止められた。

「レイ……。すぐに横になるんだ。左足を安静にして……」

「ダメですよ……。それじゃあ……。スターの顔が……。見れないじゃないですか……」

スターの夢を。大勢の観客の期待を挫いてやった。今、この時のために私は頑張ってきたのだ。誰かは知らないが、最高の愉悦を邪魔しないで欲しい。

「それどころじゃない……。君の左足はおそらく骨折してるはずだ。すぐに病院に……」

「それに……ウイニングライブにも……出ないと……。最後まで……無敗の三冠を……ズタズタに引き裂いて……センターで……」

そうだ。生まれ持つての性を今こそすべて開放するんだ。そうでなければ、今までどれだけ非難を浴びようとも頑張ってきた甲斐が無い。

「レイ……！」

「だから……どいてください……行かないと……」

誰かは知らないが邪魔だ。早くどいて欲しい。誰かの腕を掴み、力を込める。痛みで加減が出来ない。ミシミシと言う音が聞こえてくる。

「……っ！……今、無理をすれば二度と走れなくなるかもしれないんだよ……？」

「構いません……今が終われば……もう走る必要はありませんから……！」

理由も説明した。もういいだろう。早くどいてくれ。さらに力を込めて腕を下に引っ張る。

「うぐっ……！……ゆ、夢を碎けるのはクラシック三冠だけじゃない……。秋シニア、春シニア三冠に天皇賞連覇もある……っ！」

「今が全部ですから……。無敗のクラシック三冠の阻止以上の愉しみは……もうないので……！……この大一番を愉しめば後はどうでも良いんです……！……だからどいて……」

「……ください……！」

いい加減にしろ。こっちは痛みで問答どころじゃないんだ。

ガコ

何かが外れた音がした。掴んでいる誰かの腕が下にズレた気がする。

「……っぐき、君がコースを走つ、て……！」 その横に私……君のトレーナーがいて……。 そんないつも通りも……どうしても、良いのかい……？」

「……………」

それを聞いた途端、全身から力が抜けた。頭に上った血が下がっていく。

「……………」 どうでも、良くないですね……。 走れなくなるのは……トレーナーさんの横に……いられなくなるのは……とても……困りま……す……」

そこで私は意識を失った。

「3、2、1、はい！」

救急隊の人達が、息を合わせてレイを担架に乗せる。そしてレース場の外に運び出していく。

「私もついていきます……」

「トレーナーの方ですか？ つ！ というよりあなた、その腕！ 脱臼して……アナタも病院に……！」

「いえ……、これぐらいなら……」

レイのトレーナーはブラブラと揺れる左手を地面に付ける。そして左の肩を右手で抑えて、左腕に体重を乗せる。

ガコ

「はまったので大丈夫です……」

救急隊の人は目を丸くする。

「そ、それでも、一応診察は受けた方が良いでしょう！ さあ、あなたも！」  
「そうですね……。結局は同じ病院に行くわけですし……」

トレーナーとレイ、二人は同じ救急車に乗って、病院に向かった。

## 十四話 病院

病院の個室。そこでレイは目を覚ました。

「起きたかい……?」

「トレーナーさん……」

レイは顔を動かしてトレーナーの方を向く。その視界にはギプスが巻かれた左足も映っている。

「大丈夫かい……? 痛みは……?」

ギプスに目を取られていたレイ。続くトレーナーの声に彼と目を合わせる。

「……かなり痛いです」

しかし、彼女はすぐに彼から目を逸らした。

「医者を呼んでくるよ……。痛み止めも打ってもらおう……」

「……ありがとうございます」

トレーナーは部屋から出ていく。しばらくして白衣を着た医者が部屋に入って来た。

「レイハウンドさん。足の具合はどうですか? 痛みはありますか?」

「かなり痛みます」

「そうですか。では痛み止めの注射をしておきましょう」

医者は手に持っていた注射器をレイの左ももに注射する。

「少ししたら効いてきます。それまでは痛いでしょうが我慢してください」

「はい。ありがとうございます」

医者は使用済みの注射器の処理をしている。そこにレイが問いかけた。

「先生……私はもう一度走れるようになりますか？」

「……元のように走れる可能性はかなり低いです」

医者は残念そうな表情を。しかし、レイは気を落とさずに続けて聞く。

「元のように、でなくとも構いません。レースで勝てなくても。ただ走る事が出来れば良いんです。その場合はどうでしょうか？」

「それならほぼ確実に大丈夫と言えます。リハビリには時間がかかりますが、しっかりとやれば走行機能を取り戻す事は可能です。下手に転ばなかったのが幸いしました」

「そうですか」

医者の言葉を聞き、安心するレイ。が、すぐに心配そうな表情に。

「……転ばなかった、と言いましたが、私を支えてくれた人が誰か、先生は知っていますか？」

「えつと……確か、あなたのトレーナーが支えたと救急隊から聞きましたが」

彼女の表情があからさまに曇る。

「そう、ですか……」

「他に何か質問はありませんか？」

「……いえ、ありません」

「では、しばらくは安静にしてください。特に左足には気を使うように。移動した場合はナースコールで看護師を呼ぶようにしてください。

リハビリについては後日説明させていただきます」

「分かりました」

医者は部屋を出ていく。入れ替わるようにトレーナーが部屋に入ってきた。

彼の姿を見た途端、無造作に放り出されていたレイの手が、お腹の上に引き寄せられる。

「痛みはどうか……?」

「……少し収まりました。痛み止めが効いてきたようです」

「なら良かった……」

トレーナーは椅子に座る。

「申し訳ありませんでした。私の勝手な判断で足を折ってしまつて」

俯うつむいて自分の手を見つめるレイ。

「スパートを早めないと勝てないと思っただろう……？　なら責任はトレーナーの私にあるよ……。」

骨に負担を掛けない走法を開発しようと思っただけど、私の実力不足、準備不足で菊花賞に間に合わなかった……。ごめん、レイ……。」

「いえ、そんな事までトレーナーさんの責任にはなりませんよ。今回の件は私の勝手に骨折した、それだけですから。」

それより……。」

彼女の手が震える。

「……気を失う前の事は痛みでよく覚えていません。ですが、何かを握っていた感触。それと、ゴール直後に脚から聞こえてきたのと同じ、骨の音……。」

その二つははつきりと記憶に残っているんです。」

レイの顔がどんどん思い詰めた表情に。

「ゴールした私を支えてくれたのはトレーナーさんだと聞きました。……もしかしたら私、トレーナーさんに、怪我を……。」

彼女は右手を握りこむ。そして自分の手を握る感触に、怯えるように手を開く。

「レイ」

トレーナーに呼ばれた彼女はビクリと肩を揺らした。

「別に私はどこも怪我していないよ……。君の言う通り何か骨の音がしたのなら、君と同じくギプスを巻いていないといけないだろう……。？」

トレーナーは手を広げ、どこにも異常が無い事をレイに示す。

「……………そう、ですね。すみません、冷静では無かったです。嫌な感触がずっと残つて……………」

レイは自分の右手を触る。その様子を見たトレーナーは少々悩んでから、口を開く。

「……………とはいえ、君に掴まれた右腕には少し痣あざが出来たけどね……………」

トレーナーが袖をめくると、手首の部分に手の形の青痣が。

「やはり……………。すみませんでした……………」

「これぐらいなら大丈夫だよ……………。痛みもほとんど無い……………」

骨の音の方はきつと、足が折れた時の音を勘違いしたただけだと思ふ……………。痛みで正常な意識状態じゃ無かっただろうし……………」

「そう……………そうですね。……………良かったです」

レイは自分の右手を左手で撫でる。そしてようやくトレーナーと目を合わせた。

「改めてありがとうございます。支えていただいたおかげで最悪の結果は避ける事ができましたから」

「どういたしまして……………。とはいえトレーナーとして当然の事をしたただけだよ……………」

そこで彼女の瞳に不安が浮かんだ。伏し目がちに口を開く。

「……トレーナーさんは、私が走れるようになるまで待っていてくれますか？」

それに対して、トレーナーはいつも通りの口調で答える。

「うん……。いつまでも……」

「元のように走れなくても、レースで勝つ事が出来なくてもですか？」

「もちろん……。リハビリは辛いかもしれないけど頑張つて欲しい……。君の走る姿がもう一度見たいからね……」

「………承知しました。トレーナーさんのご命令とあらば、仰せのままに」

そう言つてレイは笑う。その表情は選抜レースやオークスで見せた底意地の悪い物ではなく、年相応の無邪気な物だった。

レイが目を覚ましてから少しの時間が過ぎた。病院の個室には彼女一人。

コンコン

「ぶつぱん」

扉が開く。部屋に入ってきたのは勝負服姿のスター。

「邪魔するよ」

「おい、スター……！ し、失礼……」

次いで入ってきたのはスターのトレーナー。

「スター、ウイニングライブはどうしたのですか？」

「すっぽかしてきた」

「格式ある菊花賞のライブをすっぽかすとは……。アナタもたいがい悪わるですね」

「もつと言つてやってくれないか？ こいつ、どうしてもレイハウンドの様子を見に行つて聞かなくてよ……」

スターは不機嫌そうに眉をしかめる。

「ふん……。レイの様子も見ないでライブに出るなんてのんきな事してられないよ。」

それにライブはライブでも「ウイニング」ライブだよ？ 勝者が病院で寝てるんだから、やらなくても良いでしょ。センターを欠いたライブに価値なんかない」

「だから二着のお前にセンターを、って」

「はあ……!? 負けた私が！ 繰り上がりセンター!? バカにするのも大概にしろ！

G1のライブを中止にすると体裁が悪いからってふざけた提案しやがって、URAの奴ら……！」

ぐしゃぐしゃと髪を掻きむしるスター。荒れるスターとは対照的に、レイは口元に人差し指を当て、冷静に注意する。

「病室ではお静かに」

「それに発言がかなり危ないぞ。もう少し自制してくれ」

「ふー………………。騒いだのはごめん。でも文句言うのはいいじゃん、僕たちしかいないんだし」

口を尖らせるスター。

「お前、人の目があると結構いい子ちゃんだけど、根はかなりわがままなのな」

「当然。こちとら、トレセン学園に入るまで負けも挫折も失敗も知らなかった温室育ちだし」

「胸を張る事じゃねえんだけどな…………」

スターのトレーナーは呆れ顔だ。

「とにかく、僕はライブに出るつもりは無いから」

「へいへい…………。どうせ今からレース場に戻っても間に合わないし、俺が代わりに怒られてきますよ。」

じゃあな、レイハウンド。お大事に」

「お気遣い、感謝いたします」

それきり、スターのトレーナーは個室から出ていった。

しばらく経って、スターは「やってしまった」という表情を浮かべる。

「はあ……。後で謝つとかないな」

「素直じゃないですね」

「レイに言われたくは……。いや、レイは口調が仮面被つてる風なだけで、普通に素直か。

マスコミの前でも自分を貫き通すし」

「それでもありませんよ。特にトレーナーさんの前では」

「ま、好きな人の前じゃ、しょうがないんじゃない？ とはいえあのトレーナー、相当鈍

そうだからガンガン行かないと、そのうち横取りされるかもしれないけど」

「……………」

レイは不安そうに布団の端を握る。

「あー、そんなに悲しそうな顔しないでよ……」。

大丈夫、大丈夫だって。あの人ぐらい死んだ目してると、寄り付いてくる女の人もそ

ういないだろうし」

「そう、ですかね……。？」

「うん、本当に大丈夫だと思う。正直私だったら絶対アプローチかけない」

「その言い方は少し引つ掛かりますが……」

何とも言えない顔をするレイをよそに、スターは近くの椅子に座る。

「それで？ お見舞いに来てくれたのですか？」

「同室のよしみでね。……………」

さつきまでの軽い雰囲気が消え去った。スターは何度か口を開閉させる。意を決したのか、言葉を紡ぐ。

「……………ついでに愉悦の見舞い品も……………デリバリーしに来て、あげたから……………」

その言葉を境に、スターの瞳に涙がにじんだ。

それを見た途端、レイの口角が吊り上がる。

「……………もう少しこちらに近付いて来てもらえませんか？」

「……………」

涙目のまま、椅子ごとベッドの方に近寄るスター。レイはそんな彼女の頬を手で挟み込んだ。

「……………くふ……………つ、くふふふ……………つ」

「……………つ」

ギリ……

レイの不気味な笑い声に、身を竦すくませつつも歯を食いしばるスター。

「選抜レース。初めての敗北を知ったあなたは、私にリベンジを誓った。」

そして秋のファン感謝祭で三冠を取るとトレーナーに宣言したにも関わらず、本番では負けてしまった。

そんな時、アナタはこんな表情をするんですね……くふふっ……」

レイはスターの顔を色々な角度から覗き込む。

「無念、屈辱、不本意、そして怒り……。怒りは自分に対してでしょうか。私に勝てなかった自分に対して、得意な長距離で負けてしまった自分に対して。

……強いですね、スターは。私と戦って負けたウマ娘は心が折れてしまう事がほとんどでしたが、あなたは私に二度負けてもなお立ち上がろうとしている」

レイがスターの目の端に浮かんだ涙を拭おうとする。

「ふん……」

スターはレイの手を掴んで引きはがした。服の袖で目元を拭く。

「当たり前じゃん！ 言っとくけどレイに勝つまで挑むつもりだから。

……だから、足は大丈夫なの？ こんな所で引退されちゃ困るんだけど。シニアでも活躍してレイのための舞台も整えてあげる……あげるからさ、絶対復帰してよ……？」

拗ねた様子の中に不安が混ざった口調のまま、レイに問いかけるスター。

レイは目を伏せ、少し考える。遅れて口を開いた。

「……………ええ、そうですね。スターは私のために無敗の二冠を達成してくれましたから。今度は私の番。」

怪我を治し、もう一度ターフであなたの前に立ち塞がる。それを見舞いの返礼としましようか」

「そ、なら良いんだけどさ」

レイの返事を聞いて、満足そうな顔をするスター。

「……………りハビリ、頑張らないといけませんね」

「ん？ 何か言った？」

「いえ、独り言ですよ。お気になさらず」

「ふくん？ ……そういえばレイのトレーナーは？ 別の病室？」

「今は席を外していますよ。そろそろ帰ってくる頃だと思えますが……………ちよつと待ってください。別の病室？ どういう意味ですか？」

スターの一言にレイが食いついた。

「どういう意味も何も……………肩、脱臼してたでしょ？ あの人」

「……………脱、臼……………？」

レイの顔から表情が抜ける。

「うん。レースが終わった直後は呆然としてたから、トレーナーがどうしてそうなったかまでは分からないけど、あの人の左腕がブラブラしてたのは見たよ。多分脱臼してたと思うけど。」

レイのその様子だと怪我してなかった？ あれ？ 私の見間違いかな？ 遠目だったから……」

「……………」

レイは自分の右手を見つめる。彼女の眉がハの字に歪む。ギリ……と歯がきしむ音が。

「それとも脱臼ってすぐ治るのかな？ 関節を嵌めるだけとか？」

「……………いえ、きつとスターの見間違いですよ」

レイはヒビが入りそうな程噛みしめた歯をやつとの思いで開き、言葉を紡ぐ。そして自分の右腕を左手で握りしめた。

「トレーナーさんがそういう事にしたいようですから……」

「？」

しばらくしてレイは左手を緩めた。その右腕、入院服の下には手の形の痣あざがくつきりと残っていた。

## 十五話 家族

レイが担ぎ込まれた病室の廊下。そこに二人はいた。レイが乗った車椅子をスターが押している。

「わざわざありがとうございます」

「別に良いよ。ウイニングライブ、バックレちゃったからどうせ暇だし。」

……にしても病院なのに普通の車椅子しかないんだね。レイが乗ってた電動の奴は無いの？ もしかしてこの病院、赤字とか？」

「電動の車椅子は結構値段が張りますよ。ただでさえ多くの車椅子を用意しなければいけない病院で、全てを電動にしているは予算がかかりすぎます。」

電動の物はどちらかと言えば個人向けの物なのではないでしょうか？」

そんな話をしながら、移動を続ける二人。病院の待合室の前まで来た。

そこにはレイのトレーナーの姿が見える。彼の姿を見てレイは頬を緩ませる。しかし、トレーナーの近くに立っている人を見た瞬間、顔が一気に強張った。

「あ、レイのトレーナーじゃん。ホントにケガしてないや」

「止まってください」

「え？ でもトレーナーを探しに来たんじゃ……」

「引き返してください。……お願いします」

いつになく真面目で、かつ弱気なトーンのレイ。スターは彼女の言葉に素直に従う。待合室からは見えない廊下の角に姿を隠した。

「いきなりどうしたの？ 急に引き返せ、だなんて」

「……………」

「言いにくい事？」

「……両親が来てたので」

レイは悲しそうな顔をする。いや、悲しいというよりは情けない、と言った表情だろうか。

スターの顔が若干険しくなる。

「不仲なの？」

「いえ、私が一方的に遠ざけているだけです。両親は悪くありませんよ」

「何があつたか聞いても良い？」

「私の例の思想が原因です。私の思想は両親にとって快こころよい物では無かつたようで。

それを両親に話し、否定されてからは私から距離を取っています」

「両親に悪く言われたの？」

「いえ、そこまでは。苦笑を浮かべられたり、道德の本の朗読をしてはもらいましたが」  
そこまで語ると、レイの顔にはいつもの微笑が張り付けられた。

「……………」

一方でスターは目を伏せ、悲しそうな表情に。

「理由は分かりましたか？ では病室に戻ってください、お願いします」

「……………やだ」

「えっ……………！ ど、どうして……………？」

「やだったらやだ」

「では自力で戻ります」

レイは車椅子の車輪の部分に手を掛ける。しかし、手に力を込めても車輪が回る事は無かった。スターが車輪にロックを掛けたからだ。

「外してください、このロック」

振り向いてスターに抗議するレイ。その時、二人の目がぼつちり合った。スターの厳しい瞳がレイを射抜く。

「逃げちゃ駄目。ちゃんと向き合わないと」

「……………っ」

泣きそうな顔になるレイに、今度は優しい目を向けるスター。

「レイはさ、お父さんとお母さんの事、嫌いななの？」

「……いえ。不自由なく育てていただきました。嫌いどころか好きです」

「なら、ちゃんと向き合わないと」

スターはレイの肩に手を置く。しかし、レイはその手をすぐに払いのけた。

「けれど、向こうは私の事をきつと疎ましく思っています。こんな不道德な私の事は

……」

レイは顔を伏せる。

スターはレイの後頭部に額を当てて話す。

「……きつとレイのお父さんとお母さんもレイの事、好きだと思うよ。じゃないとわざわざ病院に来ないだろうし。

今はすれ違つちやつてるだけ。仲直りした方が絶対良い。家族なんだしさ」

「……………」

「ほら、トレーナーと話してるみたいだし、どんな話してるのか聞くだけ聞いてみれば？」

私は部外者だし、耳塞いどくから」

スターは自分の耳を手で塞いだ。レイは伏せていたウマ耳を待合室の方に向けて、聞き耳を立てる。

遅い時間帯のためか、待合室には人が少ない。レイの耳は彼らの話し声をしっかりと

捉えた。

「申し訳ありませんでした。私のせいで娘さんに怪我をさせてしまつて……」

「あ、頭を上げてください！ トレーナーさんが謝る事じゃありません。どんなに気を付けていても、ウマ娘がレースで走つていれば怪我をする事があります。ある種の事故です。」

あの娘は特に骨が弱いですし……」

「……そ、それで、娘は大丈夫でしたか？ その、骨折の具合は……」

「レースで再び走れるかどうかは分からないのですが、普通に走行する程度の機能は取り戻せると医者が言っておりました……」

「そうですか……。歩けなくなるほどでは無くて良かった、と言うべきなのでしょう……」

「ウマ娘にとつて、レースで走れないのはとても辛い事。けど、あの娘の場合はどうなのでしょう……」

あの子は走つて勝つ事、それ自体には固執していませんでしたから。

それよりもあの子自身の欲を満たすために、他の娘を負かすために走っていたので、あまり落ち込んでいないかも……」

「そうですね……。元のように走れないかもしれないと聞いても、それほど気落ちしていませんでした……。」

それでもただ走りたいとは言っていたので、彼女もウマ娘の一人という事だと思えます……。」

「そう、ですか……。とにかく容体が聞けて良かったです。失礼しました、トレーナーさん。今後も娘をよろしくお願いいたします」

「よろしくお願いいいたします」

「娘さんに会っていかないのですか……?」

「……………きつと、私たちが会いに行ってもあの子は嫌がるだけでしょうから」

「理由をお聞きしても……?」

「娘の特殊な思想はトレーナーさんもご存じでしょう?」

「ええ……。人の夢を挫きたいと……」

「娘は昔からそうでした。幼い頃、娘はその事を私達に打ち明けてくれたのです」

「しかし、私たちはあの子のその言葉を肯定してあげられませんでした。不道德な考えだと思い、その考えを矯正しようとしてしまったのです……」

「娘は聡い子でしたから、不道德な思想だと分かった上で私達に打ち明けてくれたのでしよう。困った人がいれば率先して助けていましたし、親切心や道徳心は間違いなくあ

りました。

けれど人の夢、目標を挫くという一点において、喜びを感じてしまう。そんな自己矛盾に苦しんでいたんだと思います。だから私達に打ち明けてくれた」

「けど、私達はそれを認めてあげる事が出来ませんでした。あの子の考えを否定してしまっただけです……。」

生まれ持つての性さがを……！ 親である私たちが認めてあげられなかったんです……！」

「それ以来、娘は私達を遠ざけるようになりました。そしていつの間にか、誰に対しても、親である私達にも敬語を使うように……。」

「トレセン学園に行ったのも私達と一緒に暮らしたくなかったからだと思います。親失格の私達があの子に合わせる顔はありません」

「だからトレーナーさん、娘をこれからどうかよろしくお願いします。あなたは娘の初めての理解者ですから」

「私からも、どうかよろしくお願いします。それでは……。」

「お二人とも、待ってください……。」

「まだ何か……？」

「レイに、彼女に会ってあげてください……。」

「……しかし……」

「お二人が彼女の事を大切に思っているなら一言、一言で良いんです……。頑張ったね、と声を掛けてあげてください……」

「……」

「お願いします……」

「……分かりました。会うだけ会ってみます。娘が私達を拒絶しなければ……」

「……」

レイはスターの体をつつく。

「終わった？」

「ええ、病室に戻ってください。すぐに来客が来ますので」

「……了解、分かった」

スターは車輪のロックを外し、車椅子を押し始めた。

「じゃ、私はもう帰るね」

「え、あの、ベッドに戻るの、手伝ってくれないんですか？」

「来客、来るんでしょ？ その人たちに手伝ってもらいなよ」

「え……」

「じゃ、バイバイ。暇だったらまた見舞いに来てあげるから」

「そう言い残して、スターは部屋から出て行ってしまった。」

「あ……」

すると病室に残ったのは困ったような表情のレイだけ。個室を静寂が支配する。

コンコン

それも束の間、すぐにノックの音が響いた。

「……っ。ど、どうぞ……」

扉が開く。中に入ってきたのはレイの両親。

「ひ、久しぶり、レイ……」

「そ、そうね、久しぶり、レイ……」

「お、お久しぶりです……」

「「……………」」

長い沈黙。レイの父親は何かを言おうと口をもごもごさせている。レイの母親はしきりに自分の手を触っている。レイは両親の間で視線をさまよわせていた。

「……今日のレース、見てくれていましたか？」

沈黙を破ったのはレイ。

「あ、ああ、見てたぞ。父さんと母さん二人でな……」

「え、ええ、そうよ。二人でね……」

「……少し前のオークスもですか？」

「あ、ああ……」

「え、ええ……」

「そうですか……」

レイは不安そうな顔をしながら、それでも両親の方に手を伸ばした。

「……私、頑張つて勝ちました……。オークスも、菊花賞も……」

トリプルティアラとクラシック三冠、どちらも阻止しました……」

観客の期待も、ウマ娘達の夢も、挫き……ました……」

両親の方へ伸びる手はひどく弱弱い。すぐにでも下に垂れてしまいそうな程。

レイの両親は伸びてきた彼女の手を握る。目じりからは涙を流れていた。

「ああ……ああ！ 良く……良く頑張ったな……！」

「ええ……ええ！ GIを二つも取って……！ 本当にすごいわ……！ 良く頑張ったわね……！」

「……………許して、くれますか……？ 認めて、くれますか……？ 不道徳に生まれた私を……。そう生まれた親不孝を……」

消えそうな声でそう言うレイの目からも涙が溢れていた。彼女が泣くのは、物心ついてからはこれで二度目だ。

「バカを言うな……！ 父さんの……父さんの方こそ親失格だ……！ レイをこんなに苦しめて！」

「お母さんの方こそレイの気持ちを全然考えてあげられなくて……！ ごめんね……本当にごめんね……！」

「良いんです。私は、ただ認めてくれれば……許してくれれば……それだけで良いんです……」

三人の涙が水たまりを作る勢いで床に垂れていった。

## 十六話 カフエ

レイが骨折してから一か月。

「もう大丈夫そうですね。ギプスを外しましょうか。

それにしても凄い回復力ですね……。痛みで嫌になる人が多いのにリハビリもよく頑張りました。この状態なら元通りの走力を取り戻すことも不可能ではないかもしれませんよ」

「そうですか。なら頑張った甲斐がありました」

「ギプスが取れたといっても、いきなり走らない様にしてください。リハビリを続けていたとはいえ、筋力の低下と関節の硬化の影響があります。なので、まずは歩行から慣らす様に」

「分かりました」

そうこう話している内に、レイの左足からギプスが取れた。

「ひとまず、ここで立ってみてください」

医者に促された彼女は、その場で立ち上がる。

「痛くありませんか？」

「はい……足首、動かしてみても良いでしょうか？」

「どうぞ」

レイは左のつま先を立て、足首を回す。そして何度か左足を踏みしめる。

「確かに以前より足首が硬くなっていますね。きちんとほぐさないと……」

「すごいですね。骨折してギプスが取れた直後は、折れた部分を動かすのを躊躇うのが普通なのですが……」

「そうなのですか？ 私の場合は、もう一度レースの場に立たないといけなくなつたので、躊躇ってはいられませんから」

「頑張ってください。私も一人の競バファンとして、アナタの走りをもう一度見てみたいので」

「ご期待に応えられるよう頑張ります」

ガラガラ

病院の扉からレイが出てくる。扉のすぐ隣では彼女のトレーナーが待機していた。

「レイ、もう歩いてても良いのかい……?」

「ええ、トレーナーさん。とはいえ、まだ走れませんがね。当分は歩行訓練になりそうです」

「そうかい……。とにかく良かったよ、君の足が治って……」

二人はゆつくりと歩き始める。

「そうですね。こうして並んで歩くのも久しぶりですね」

「君と一緒に行動する時はずっと車椅子の背を押していたからね……」

「二か月、本当に久しぶりですね」

「二か月間リハビリ、お疲れ様……。よく頑張ったね……。快気祝いに何か欲しい物やしたい事は無いかな……?」

「快気祝い、ですか? そうですね……」

口元に手を当て、考え込むレイ。

「そこまで考えこまなくても……。直感的に思ったことを言ってみたらどうかかな……?」

「……………では、私の散歩に付き合ってくださいか? 久しぶりに自分の足で外を歩いてみたいので」

「良いよ……。というより、それだけで良いのかい……? もっと我儘を言っても……」

「もつと、ですか……？」

レイは再び口元に手を当てる。

「……では、毎週土曜日にトレーナーさんの時間を二時間、私に頂けませんか？ 私  
が走れるようになるまでで良いので……」

「お安い御用だよ……。 ……それだけかい……？」

「だ、だけ……？ ま、まだ良いんですか……？」

トレーナーの言葉を聞き、うろたえるレイ。

「う、うん……。毎週君に付き合うくらいなら快気祝いでなくても喜んでするけど……。  
他には無いのかい……？」

他には、と聞かれたレイは困ったような表情をする。

「……その、今の段階では思いつかないので保留にしてもらっても良いでしょう  
か？」

「わかったよ……。じゃあ、ひとまずは散歩に行こうか……」

「そうですね。行きましょう」

二人は病院の外へと繰り出していった。

今は12月。街路樹はすっかり葉を落としている。寒さ故か、人以外の生物の気配が希薄な道を二人は歩く。

「外は寒いですね」

レイが口を開くと、吐く息が白く染まる。

そこに冷たい風が吹いた。レイは首をすくめて体を震えさせる。

「ならこのマフラーを使うと良い……。私が身に着けていたもので良ければだけど……」

トレーナーは自分の首に巻いていたマフラーを解き、レイの方に差し出した。そして上着の襟を立たせて、マフラー代わりにする。

「……ありがとうございます」

レイは差し出されたマフラーを受け取る。少し長いそれを、何周も自分の首に巻いた。

その時、トレーナーの香りがレイの鼻腔をくすぐった。

「……………」

レイはマフラーを少し緩め、鼻に近付くよう位置を調整した。

そのまま二人はしばらく歩く。そしてレイはあるカフェの前で足を止めた。

「ここで少し休憩しませんか？ 行きつけのカフェなんですけど、骨折してから来店できなかつたので、久しぶりに寄りたくなつてしまいました」

「構わないよ……」

店内に入る二人。カフェの内装は壁やテーブルが木で出来ており、窓はすりガラス。照明も控えめなので、全体的にシックで落ち着いた雰囲気だ。

時刻は10:20。昼時から、オープン直後からも外れた最も人の少ない時間帯。店内には二人の他に、一組しか客がいなかった。

二人は一番奥のボックス席に座る。トレーナーはメニュー表を開き、目を通す。

「軽食だけでなく、パスタやカレーなんかの料理も置いてるんだね……」

「少し早いですけど、昼食替わりにしますか？ その食後にコーヒーなど」

「そうだね……。とはいえ私はコーヒーが苦手だから、パスタだけを頼もうかな……」

トレーナーはメニュー表を閉じ、元の場所に戻した。

「そういえばトレーナーさんがコーヒーを飲んでいる所を見た事無いですね。コーヒーのどこが苦手なのですか？」

「単純に苦いのがダメでね……。この年にもなつてまだ子供舌で恥ずかしい限りだよ

……」

「そうですか、苦いのがダメですか……」

そう呟きながらレイは手を上げる。すると、ややもせず店員が来た。

「ご注文は？」

「ブレンドコーヒーとハニートースト、それにコーヒーゼリーを」

「私はボンゴレパスタとポロネーゼを……」

「かしこまりました」

店員はオーダーを聞き、下がっていく。テーブルは再び二人だけの空間に。

「レイは良くコーヒーを飲めるね……。いつ頃から飲む様になったんだい……?」

「小学生高学年の頃からですね。その時はカフェオレを嗜んでいました。ブラックで飲むようになったのはトレセン学園に入ってからです」

「うくん……。コーヒーって苦いだけの飲み物だと私は思っているんだけど、レイは味を感じるのかい……?」

「味、というよりは風味、ですかね? それはしつかりと感じますよ」

「風味か……。私は苦さに惑わされて感じられていないのかな……」

「そこは慣れですね……。といつても、苦いせいで風味を感じるまでのハードルが高いというのには確かにあると思います。」

そういう時はミルクを混ぜたカフェオレや、ホイップクリームを浮かべたワインナー  
コーヒーなどを吞んでみてはいかがでしょうか？」

「カフェオレか……。コンビニにおいてあるコーヒー牛乳とかなら飲んだことがあるよ  
……。」

甘くて飲みやすかったけれど、あまりコーヒーの風味は感じなかったかな……」

「市販のコーヒー牛乳は製造から時間が経っていますし、砂糖が大量に入っていますか  
らね。」

作り立てのコーヒーをミルクで割っただけのカフェオレは飲みやすい上に、コーヒー  
の風味をしつかり感じられますよ」

「そうかい……。今度機会があればカフェオレを頼んでみようかな……」

「ええ、トレーナーさんも是非コーヒーを。私も嗜んでいる程度ですが十分楽しめます  
よ」

そんなことを話していると、店員が注文の品を持ってきた。

「ブレンドコーヒーとハニートースト、コーヒーゼリーです。パスタはもう少々お待ち  
ください」

テーブルに料理を並べ、下がっていく店員。

「お先に頂きます」

「気にせずどうぞ……」

レイは小さく手を合わせ、蜂蜜とスライスアーモンドがたっぷり乗ったトーストを口にする。

ゆつくりと咀嚼して飲み込んだ後、コーヒークップに口を付ける。黒い液体を飲み込んだ後、ほうと落ち着いた息を漏らした。

「甘い物とコーヒーを合わせるのもよさそうだね……。甘ったるい羊羹（ようかん）に渋くて苦い抹茶を合わせるようなものかな……？」

「そうですね。私もこのハニートーストとコーヒーの組み合わせが好きで良く通っているんです。」

過剰なぐらい蜂蜜が乗ったトーストに、濃いめのコーヒーが良く合うんですよ」

そこでレイはトーストを皿に置いた。そしてコーヒージェリーをトレーナーの方に差し出す。

「パスタが来るまで口が寂しいでしょう。コーヒージェリー、食べてください」「しかし、これは君のじゃあ……」

「元々トレーナーさんに食べさせようと注文しましたから。主食の前にデザートというのは少し戸惑うかもしれませんが、ここは騙されたと思って」

しばし、固まっていたトレーナーだが、コーヒージェリーの入った容器を自分の方へ引

き寄せる。

「君に薦められた物だ、断れないな……」

トレーナーはスプーンを手に取り、黒いゼリーを掬う。そして口に運んだ。

「どうですか？」

「……すごいね、このコーヒーゼリー……。コーヒーから苦さだけを抜いたような味、いや、風味……」

君が食べさせようとした訳が分かったよ……。コーヒーを飲む人はこの風味が好きなんだろうね……」

「ふふ……苦いのがダメな人に、コーヒーの美味しさを分かってもらうにはびつたりでしょう？」

「本当に……。これは全部食べても良いのかな……？」

「ええ、どうぞ」

そのまま二人は、緩やかな時間を過ごしていった。

## 十七話 ラーメン

レイのギプスが取れてから直近の土曜日。レイとトレーナーは二人で出かけていた。

「この前は私の行きつけの店に行つたので、今日はトレーナーさんがどこかのお店に連れて行ってくれませんか？」

「行きつけの店か……。ラーメンでも良いかな……。？」

「大丈夫ですよ」

時間帯はお昼前。二人は店に向かうべく移動する。レイのリハビリも兼ねて、移動は徒歩だ。

休日だけあつて街には人が多い。人ごみを縫うように二人は歩く。

「これだけ人が多いと誰かに声を掛けられるかもしれないですね。私達、一応有名人です」

「まあ、主に悪評の方でだけどね……」

「そうですね。いきなり喧嘩を売られてもかなわないので……。これをどうぞ」

レイは鞆からマフラーを取り出した。

「大きめのマフラーなので鼻元まで覆えます。顔を隠すには十分ですよ」

レイはそう言いながらフードを被り、ウマ耳を隠す。尻尾は外に出ないような服装なので、これで傍目には彼女がウマ娘であるという事は分からなくなつた。

ウマ娘の絶対数は人に比べて少なく、ウマ耳や尻尾を見るだけで「あれ？ もしかしてレースに出てる娘かな…？」と声を掛ける人がたまにいる。

それでなくとも、やはりウマ娘はウマ耳と尻尾が特徴的なので、それらを隠すだけでも十分身バレ防止になる。

「そうだね……。私生活でまで目立つ必要は無い……。使わせてもらうよ、ありがとう……」

今日はマフラーをしていないトレーナー。上着の襟を折り、レイから受け取つたマフラーを首に巻く。そして余つた布地を重ねて鼻元までを覆つた。

「いえ、先日はトレーナーさんにマフラーを借りましたから。今日はそのお返しです」

二人は顔を隠し、目的の場所まで歩みを進める。そうして10分ほど歩くと、ある店の前に着く。

「ここですか？」

「ええ……」

二人が店内に入ると、中は典型的なラーメン屋と言つた内装だつた。壁にはスープレシピが書かれた張り紙や、サイドメニューのおすすめなどで雑然としている。

二人はカウンター席に並んで座った。テーブルの下にある籠に荷物や上着を置く。レイはメニュー表を開いた。そこには色々なラーメンの名前と写真が載っている。

しかし、普通の店とは違う表記がこの店のメニュー表にはあった。

「トレーナーさん、メニューにある「辛味度」というのは？」

「文字通り辛さの指標だよ……。この店は辛いラーメンを出す店だからね……」

「辛いラーメンですか……」

レイは珍しく、険しい顔を見せる。

「もしかして辛いのがダメだったかな……？」

「かなり苦手な方ですね」

「なら、普通のラーメンもあるからそれを頼むと良いよ……」

そこでレイは、少し考える素振りを。

「……とはいえ、そういうお店に来て辛い物を食べないのも食べず嫌いが過ぎるので、辛味度の物を頼もうと思います。この赤ラーメンとか……」

そう言うレイだが、今度はトレーナーの顔が険しくなる。

「うーん……。辛いのが苦手なら辛味度1ですら止めておいた方が良いよ……。このお店の辛さの基準はかなり高いんだ……」

辛味度1でも一般的には激辛と呼んで差支えない程度にはね……」

「そ、そうなんですか……それなら大人しくこの魚介豚骨ラーメンにしておきます」  
「決まったかな……。すみません……」

トレーナーが店員に声を掛ける。

「へい！ ご注文は？」

「唐紅からくれないラーメン、固めで……」

「魚介豚骨ラーメンの大盛、麺の硬さは普通でお願いします」

「かしこまりました！ 唐紅固め、魚豚大盛普通！」

「了解！」

注文を取った店員は厨房の方に引っ込んでいく。その一方、レイはメニュー表を再度見ていた。

「唐紅、唐紅……辛味度4ですか。良く食べられますね」

「昔から辛い物が好きでね……。山椒やコシヨウ、唐辛子を使った料理を良く食べていたんだ……。そのせいか辛さには大分強くなったよ……」

「辛さに強くなる、とは言いますがどのような感じなのですか？ 私の場合、辛い物を食べると口の中がヒリヒリして、それ以降、味が分からなくなってしまうので苦手なのですが……」

「そうだね……。私の場合は単純に、辛い物を食べても口の中がヒリヒリしないんだ

……。

ある程度の辛さまでなら、普通の料理と同じように辛さを感じずに食べる事が出来るよ……」

「なるほど……。一つ思ったのですが、どうしてトレーナーさんは辛い物を食べるのですか？ ヒリヒリ感を楽しむ物だ、と聞いた事はありますが」

「うーん……。辛い物を食べるというよりは唐辛子を食べると言うのが正しいかな……？」

「とうとう？」

「唐辛子は一般に辛味を付けるための香辛料と言われているけど、私は唐辛子の味、風味が好きでね……」。

辛い物を好んで食べるというよりは、唐辛子を好んで食べているんだ……。その唐辛子が辛い、つてだけかな……」

「なるほど……」

「あ、後、辛い物が得意といってもワサビとかカラシは苦手かな……。それらと唐辛子はまた辛さのベクトルが違うんだ……」。

鼻から抜けていくようなあの辛さはどうにもなれなくてね……」

「辛さにも色々あるんですね。それにしても唐辛子の風味、ですか……ふふっ」

口元に手を当てて、笑うレイ。

「いきなりどうしたんだい……?」

「いえ、トレーナーさんが好きな唐辛子は辛さに隠れた風味を持っている。

そして私が好きなコーヒーは苦みに隠れた風味を持つ……意外な接点に気づいて可笑しくなってしまうただけですよ」

「確かに……。二つとも万人受けしない美味しさを持っている物だね……」

「であるならばトレーナーさん。私でも唐辛子の風味が味わえるような食べ方、料理はありませんか?」

「うーん……。苦さを抑えたコーヒージェリーに対応するような、辛さを抑えた唐辛子料理か……。あ、それなら丁度良いのがある……」

トレーナーはカウンターに置かれている調味料を取り、レイの方に差し出す。

「これは……?」

「赤ダレ……。味噌に唐辛子を漬けた調味料だよ……。この店にしては珍しくピリ辛程度の辛さだし、唐辛子の風味が良く出ているから試してみしてほしい……」

「分かりました」

そうこう話している内に、注文の品が運ばれてくる。

「魚介豚骨ラーメンの大盛、固め! 唐紅ラーメンの固め! 器、熱くなっているので気

を付けてください！」

「あ、すみません……。辣油らいう麵の固めを一つ……」

「追加注文ですね！ 辣油固め！」

「了解！」

「……二つも食べるんですか？」

「ん、ああ、こう見えても結構食べる方ですね……。そのおかげで二種類のラーメンを楽しむめるよ……」

「そういうえば、カフェでもパスタを二皿頼んでいましたね」

「とはいえウマ娘程は食べられないけどね……」

「私もウマ娘にしては食べない方なので、私とトレーナーさんの胃袋の大きさは同じぐらいでしょうか」

話もそれくらいに、二人は割り箸を割る。そして自分の分を食べ進めていく。

レイは三分の一を食べ終えた時に、トレーナーから薦められた赤ダレの蓋を開ける。そしてレンジの上に適量落とし、それをスープで溶き、口にした。

「……これが唐辛子の風味ですか。いつもなら邪魔なだけなんです、ヒリヒリ感と相まって後を引きますね。これなら私でも食べられそうです」

「なら良かったよ……」

そう言うトレーナーの器はもう空になっていた。その器に入っているのはレイと同じ濃厚な魚介豚骨のスープだが、その色は真っ赤。

「た、食べるの早いですね。その辛そうなスープでよく……」

「まあ、これを食べるようになるにはかなり慣れが必要だと思うよ……。啜（すす）るだけでむせる人がほとんどだし……」

「その域に到達するまでには時間がかかりそうです」

「少しトイレに行ってくるよ……」

トレーナーが席を外したその時、店に新たな客が入って来る。

「いらつしやい！ 好きな席にどうぞ！」

「……あれ？ もしかしてレイ？」

その声に反応してレイが顔を上げると、そこにはスターと彼女のトレーナーが。

「おや、奇遇ですね。こんな所で」

「ホント。たまたま入っただけの店で行くわすとは思っても無かったよ」

スターはレイの隣に、スターのトレーナーはスターの隣に座る。

「ギプス取れてから足は大丈夫？」

「ええ、特に問題ありません。年が明けてから走る練習を始めようかと」

「なら良かった。春シニア三冠までに……は流石に厳しいかもしれないけど、秋シニア

三冠までには治してよ？ 天皇賞とジャパンカップ、二つ取って有マで待ってるから」  
「有マですか。ファン投票上位が出走条件なので、もしかしたら私、出れないかもしれないかもしれませんよ？」

レイにそう言われたスターはポカンと口を開ける。

「……………それは考えてなかった。まあ、悪役にも一定数ファンはいるでしょ。何とかなるって」

「おい、スターは注文どうすんだ？」

「メニュー表見せて」

トレーナーからメニュー表を受け取るスター。入れ替わるようにレイとスターのトレーナーが話し始める。

「そういえば今日はアイツ…………トレーナーと一緒にじゃないのか？」

「一緒ですよ？ 今はトイレに行っています」

「えっ!? それを早く言いなさいよ!? ほらトレーナー！ 邪魔しちやいけないから店変えるよ！」

レイの発言に立ち上がり、トレーナーの腕を引くスター。

「い、いきなりなんだよ？ 邪魔、って何の話だ？」

「かあ……………！ これだから鈍<sup>にぶ</sup>ちゃんは！ いいから店変えるよ！」

「別に構いませんよ、スター」

ウマ娘の怪力でトレーナーを引きずっていかうとするスターをレイが止める。しかし、スターの方は気まずそうな表情を浮かべ、レイに耳打ちする。

「いや、ホントに良いの？ 二人で出かけるなんてそうそう無い機会だろうし……」

「その点なら大丈夫です。毎週土曜は時間を確保していただいていますから」

「えっ!? もうそこまで進んだんだ！ ならいつか。正直、店変えるのも面倒だと思つてたしね」

トレーナーの腕を離し、席に座るスター。彼女は気を取り直してメニューを眺める。

「何だよいったい……で？ 結局スターは注文どうすんだ？」

「ん……。僕は紅くれないラーメンで」

「じゃ、俺もそれで……いや、待てよ？ なあレイハウンド、この店つてアイツの行きつけか？」

「ええ、そう言つてました」

「そうか。なら一応辛味度を下げて赤ラーメンにしとくかな……」

「あれ？ トレーナー、ビビった？」

ニヤニヤとからかうような笑い顔を浮かべるスター。

「いや、そうじゃねえよ。アイツは結構辛党で、そいつの行きつけつて事は何かヤバそう

だからな。安全策を取っただけだ」

「ふくん……ま、トレイナーがそうしたいならそれで良いけど……。一回り以上年下の僕より辛いラーメン食べるのはトレイナー的にどうなの？」

「……そこまで言うなら上等だ。俺も紅ラーメンにしてやる。アイツに付き合ってる身だ、そこそこ耐性はあるぞ」

「じゃあ僕は辛味度一つ上の唐紅ラーメンにする」

「……なら俺も」

「じゃあもう一つ上、最高ランクの辣油麺で！」

「付き合ったらあー！」

そんなノリで二人は注文をする。

レイは残りのラーメンを啜りながら、それを傍観していた。

(トレイナーさんは辛味度1でも一般的には激辛と言っていましたか……大丈夫でしょうか)

食事をしていいたせいで、二人に忠告するタイミングを失ったレイは、そんなことを考えていた。

結果←

辣油麵に悪戦苦闘する二人を見守ってから、二人は退店した。家路に着く途中、

「寮まで送っていくよ……」

「いえ、ここままで構いませんよ。ここから学生寮まで行くとなると、トレーナーさんにとつては回り道でしょうし」

「そうかい……？　ならここでお別れだね……。マフラー、返すよ……」

トレーナーは首に巻いていたマフラーを解き、レイに手渡す。

「ええ、それではまた後日」

トレーナーと別れたレイは、彼の背中を名残惜しそうに見つめた後、彼から返してもらったマフラーを自分の首に巻く。マフラーが長いので、鼻元まですっぽりと埋まってしまう。

「……………ふふっ……………」

彼女は彼の香りに包まれながら、学生寮までの短い道のりを歩いた。

## 十八話 看病

「え……?」

「どったの? そんな顔して」

トレセン学園の学生寮。その一室でレイが眉をハの字に曲げていた。

「その、トレーナーさんが風邪を引いたと今連絡が……」

「……それだけ?」

「とても心配です……」

スマホの画面を眺めて眉を下げたレイ。

彼女とは対照的にスターは呆れたような顔をしていた。

（風邪だけで大げさな……とはいえ、今日はクリスマススイブか。デート出来ないのは確かに残念かな。……いや、待てよ）

スターは何かを思い付いたのかニヤリと笑う。

「まあ、心配なら看病にでも行けば? チャンスでもあるし」

「チャンス……?」

「そうチャンス。トレーナー、一人暮らしでしょ？ 一人暮らしで風邪なんか引いた日には、本当に心細いからさ。そこで看病してあげれば、弱った心に自分の存在を刷り込めるじゃん」

スターはレイの肩に手を置いて、ささやくように語る。

「想像してみてください。風邪で体調が悪いけど、家には自分の他に誰もいない。

体調が悪いから栄養を付けて安静にしたいけど、料理も自分で作らないといけない。

自分で作るの辛いから、外に買いに行こうか？ けど近くのコンビニに行くのさえ辛い。しかもコンビニで買えるものは喉を通りそうにない。

結局ゼリーとスポーツドリンクを買って、じっとしているしかないか……。

ああ、頭も痛いしだるいなあ……。

そんな所に押し掛けて色々看病してあげた拳句、卵とネギたっぷりの雑炊でも作ってあげた日にはもう、たまらんのよ！ 一発で心の中に入り込めるから！」

スターはまるで自分が体験したかのような口ぶりで話す。

「しかし、そんな弱った所につけ込むような……」

「別に悪い事してるわけじゃないじゃん。風邪引いてるトレーナーを看病する……むしろ良い事。気に病む必要ないって」

「……………」

「ほら、ただでさえ担当バとトレーナーっていう立場で向かい風。学園卒業するまで心を引き留めとかないといけないんだから、ガンガン行かないと」

「……………」

「それに雑炊作ってあげたら、あ〜んとか出来るかもよ？ 風邪で弱ってるトレーナーが意外に甘えてきて、ふーふー冷ましてあげた雑炊をあ〜ん…………とか」

「……………そうですね。看病に行きましようか」

レイの頬は少し赤かった。

「そうそう、看病してあげなつて…………。でも冷静に考えると、うら若い女学生が先生の家を押し掛けるつて図式かあ。何か事件があつたら報告してよ？」

「何もありませんよ。看病するだけですから」

「へいへい…………ま、事件じゃなくても何かあつたら連絡してよ。今日はクリスマスパーティあるけど、緊急の要件だったら抜け出して手伝うから」

「ありがとうございます。何かあればその時に」

レイは身支度をして、学生寮を出た。

ピンポーン……………ピッ

チャイムの音の後、かなりの間があったから玄関モニターがオンになる。

「どちら様でしょうか……………」

モニターに映ったのは、レイのトレーナー。しかしその顔は赤く、声にも覇気がない。いや、普段も覇気は無いのだが、いつにもまして覇気が無かった。

「レイです。風邪を引いたと聞いたので看病しに来ました」

「わざわざかい……………」

……………気持ち嬉しいけど、風邪を移してはいけないし…………。それにせつかくのクリスマスを私の看病で潰す事も無いよ…………」

レイはインターホンのカメラに顔を近づける。

「いえ、トレーナーさんの事が心配です。そのまま放っておくと気がかりになりすぎて、それこそクリスマスが台無しになってしまいます。なので看病させてください」

「……………いや、ダメだ…………。君が私の部屋に上がるというのは…………。私は大丈夫だから帰っておくれ…………」

拒否されるレイは、目線を下に逸らして少し考える。

「…………では、顔だけ見せて貰っても？ モニター越しでなく直接顔を見たいです。そう

すれば安心できますから」

「分かったよ……」

ガチャリと音を立ててドアが開いた。その瞬間、レイは扉の隙間に靴を差し込み、閉まらない様に押さえる。そして体を玄関の中に滑り込ませた。

「……！　ちよつと、レイ……！」

体調が悪いのと、突然の事に驚いたトレーナーは、レイの侵入を阻むことは出来なかった。

「すみません、嘘を付きました。けれど、今日は是が非でも看病させていただきます」

「しかし……」

「毎週土曜日はトレーナーさんの二時間を私が貰うという約束ですよ？　なのでトレーナーさんは今から二時間は私に看病される義務があります。違いますか？」

「……分かったよ……」

納得したのか、それとも言い返す気力が無いのか。とにかく、トレーナーはレイの看病を認める事にした。

二人は玄関から部屋の中に入る。その時トレーナーの体がフラフラとよれる。

「トレーナーさん!?!」

レイはとっさに彼の体を支えた。

「ごめん……。大丈夫だから……」

そう言うトレーナーだが、目を閉じたまま動こうとしない。

(玄関では気丈に振舞っていましたが、かなり深刻なようですね……)

レイはトレーナーを支えたまま歩き、彼をベッドに寝かせる。

「喉、乾いていませんか？ スポーツドリンクを買ってききましたけど」

「ああ……。ありがとうございます……。そこに置いておいて欲しい……」

「お腹、空いていますか？」

「うん……。朝から何も食べてなくて……」

「では雑炊を作りますのでトレーナーさんは大人しく寝ていてください」

「そこまでしてもらわなくても……。いや、ありがとうございます、レイ……」

「どういたしまして」

レイはキッチンへ向かう。片手に下げている買い物袋を床に置き、料理の準備を始める。彼女にとっては初めての台所なので準備には若干手間取ったが、調理は滞りなく進んでいった。

20分も経たない内に雑炊が出来上がる。ご飯はレンジでチンするだけのインスタント物。

「食事、出来ましたよ。トレーナーさん」

「ありがとう……」

トレーナーはベッドから起き上がり、のそのそと机の前に移動する。

「卵とネギの雑炊です。まずは梅の付け合わせと一緒に食べてください」

小皿に盛り付けられた雑炊。具材はたっぷりのネギと卵、加えて上にちりばめられた梅干し。

雑炊の汁は粉末出汁で取った簡易的な出汁だが、水溶性片栗粉でとろみが付けられている。

トレーナーは何気に手の込んだ雑炊を一口食べた。

「酸っぱい……」

小学生のような感想を口にしながら、食べ進めるトレーナー。酸味には食欲増進効果がある。さらにとろみのある汁のおかげで、滑るように米が彼の喉を通る。

あつという間に小皿が空になった。

「二杯目以降は好きな付け合わせで食べてください。梅、たくあん、昆布の佃煮、鮭フレークなど用意してありますから」

熱で汗をかいた体が塩分を求めるのか、たくあんや昆布の佃煮を主な付け合わせとし、二杯三杯食べ進め、レイが作った雑炊を完食するトレーナー。

「(一)馳走様……」

「風邪薬です。飲んでください」

「ありがとう……」

風邪薬を白湯さかで流し込むトレーナー。ベッドに戻ろうと立ち上がるが、足元がふらつき机に手を付いてしまう。

「無理しないでください。私が支えますので」

「ごめんね……」

「いえ、こんな時ぐらいは私を頼ってください」

トレーナーは肩を借りながらなんとかベッドまで戻り、横になる。

「おでこに張りますね」

レイは買ってきた冷却ジェルシートをトレーナーの額に張り付ける。その際、指が彼の顔に触れた。

（熱い。何度あるんでしょうか……）

「熱、計りましたか？」

「計ってない……」

「ひどい熱です。タクシーを呼ぶので病院に行きませんか？」

「いや、良いよ……。今はじつとしていたい……」

「……そうですか」

トレーナーはそれきり目をつむった。

トレーナーさんは眼鏡をかけたまま寝始めた。そつと眼鏡を外し、邪魔にならない所に置く。

改めて彼の頬に触れる。やはり熱い。何度熱があるのだろうか。立つだけでふらくほど衰弱していた。微熱などと言う段階ではない。

「トレーナーさん……」

看病に来る前はスターの言葉に浮かれた考えの一つや二つを持っていたが、今のトレーナーさんの状態を見ると、ただただ心配の感情だけが浮かんでくる。

「……うう……」

トレーナーさんが眉をしかめて呻く。それを見ると私の方まで苦しくなってくる。

私の体調が悪化したわけでは無い。彼の苦しむ姿を見るのが苦しい。

許される事ならトレーナーさんの苦しみを私が請け負ってあげたい。彼は私の後ろ暗い本能、業を半分背負ってくれた。だから今は私が……。

風邪は移すと治るといふ迷信がある。なら私がトレーナーさんから風邪を貰えば、彼

の風邪が治るだろうか？

風邪はインフルエンザなどと同じようにウイルスの影響でそうなる。風邪を引いている人が咳やくしゃみをする、飛沫と共にウイルスが空気中に散らばり、それを他の人が吸い込むことで感染が広がる。

つまり直接彼の風邪ウイルスを体に取り込むのが早い。

この時の私はトレーナーさんの事が心配過ぎて、正常な思考では無かった。迷信を根拠に行動しようとしたのはそのせいだ。

とにかく彼の風邪ウイルスを取り込んで、風邪をうつしてもらおう。そう考えた私は、顔をトレーナーさんの顔に近付け……………唇を重ねた。

何の感慨も無かった。しかるべき時にすれば、顔を赤面させ、心臓の鼓動が二倍速になつていた事だろう。

しかし今の私にとってはするべき事をしただけ。感情が動くことは無かった。

ちろ、と彼の口内を舐め、唇を離す。

「これできつと……………」

それ以降、私はベッドの横で、彼の様子を見守り続けた。

しんどい。

頭が痛いわけでは無い。喉が痛いわけでは無い。呼吸が苦しいわけでは無い。

ただしんどい。体が重い。安静にしているのに体の熱が自身を苛み続けている。

意識を消してしまいたかった。寝るか気絶してしまえば、一時はこの苦しみから解放される。

しかしこれまでに寝すぎたせいか、なかなか寝つけない。半覚醒状態のままうなされ続ける。

「……レイ……」

なぜか担当バの名前を呼んでしまった。幽かすかな意識の中、手にひんやりとした感触が。

「はっ。ハイッ」

手に感じる冷たさが全身に広がっていく。熱に浮かされた体が少し楽になった。

薄く目を開けると、見慣れた彼女の顔が見える。体の不調に引きずられ、不安定になつていた精神が落ち着く。

彼女がそばにいてくれる。今はそれが何より頼りに思えた。

## 十九話 犠牲になった枕

カーテンの隙間から朝日が漏れている。その光に反応してトレーナーの瞼は開かれた。

「う……」

トレーナーは、汗で寝間着が張り付いているのに顔をしかめる。すぐに布団をめくり、ベッドに腰掛ける体勢に。そして額に手を当てた。

平熱。体のどこにも異常が無い。

それを感じた彼は部屋の中を見回す。彼の目はソファで横になっているレイの姿を捉えた。

少しの間、彼女を見つめてから彼は浴室に向かった。

軽くシャワーを浴びた彼は普段着に着替える。そしてキッチンでコーヒーを淹れる。

彼が二つのマグカップを手に部屋に戻ると、ちょうどレイが目を覚ましていた。

「おはよう、レイ……」

「……おはようございます」

「コーヒー、機械で淹れたものだけど飲むかい……？」

「……いただきます」

レイはトレーナーからマグカップを受け取る。レイはブラックで、トレーナーはミルクを混ぜ、それぞれのマグカップに口を付けた。少しの間において、トレーナーが口を開いた。

「一日中看病してくれたのかい……？」

「……ええ。スターに頼んで着替えなども持ってきてもらいましたし、外泊届けも出しています」

「そうか……。ありがとうございます……」

トレーナーの手がレイの頭に伸びる。彼女は頭を撫でられるがままにしていた。

「あ、つと……。ごめ、ん……。？」

不用意に頭を撫でてしまった事を謝ろうとしたトレーナーだったが、何か異変を感じて口をつぐむ。

頭を撫でていた彼の手は額や頬に移動する。

「レイ、熱が……」

レイはトレーナーの手を握り、ゆっくり引きはがす。

「……大丈夫ですよ。私、平熱が高いだけです。コーヒーを飲んだらすぐ帰りますね」

急いでマグカップの中身を飲み干そうとするレイ。しかしトレーナーはその手を止める。

「ごめん、私の看病をしたばかりに……」

トレーナーの言葉を聞いたレイは、悲しそうに眉を曲げた。

「……いや、ありがとう……。君の看病のおかげで私はすっかり元気になったよ……」

続く言葉を聞いたレイは顔を綻ばせる。尻尾が一跳ねした。

「……良かったです。トレーナーさんが元気になつて」

「だから今度は私が看病する番だ……」

「……いえ、そうすればまたトレーナーさんが風邪にかかるかもしれません。幸い微熱のようなので、寮に戻って安静にしていればすぐ治りますよ」

「ならここで安静にして、風邪を治してから寮に戻った方が良い……。少しなら私も大丈夫だから……」

トレーナーはレイの手を優しく、しかし強く握った。

「……分かりました。少しの間、トレーナーさんのお世話になろうと思います」

「うん……。して欲しい事があれば遠慮せず何でも言つてほしい……」

「何でも……」

レイは斜め上に視線をやり、少し考える。

「……では一つお願いを。朝ごはんは辛さ控えめのサンドウブチゲにして欲しいです」  
「分かったよ……」

もうしばらく二人の時間は続く。

ウウウウン……………

暖房の作動音が響く部屋の中で、二人はソファの上にいる。

レイはソファに横たわり、その頭は座っているトレーナーの膝の上にある。所謂、膝枕の体勢。

「……トレーナーさん、手を……」

レイがそう言うと、トレーナーは彼女の頬に手を触れさせる。

「……冷たくて気持ち良いです……」

トレーナーは指の甲、指の腹、手の甲、手のひらを順に押し当て、冷たさを余さずレ

イに届ける。

片手が終わればもう片方の手。再び同じように冷たさを届ける。頬と手の温度が同じになると役目を終えた手は頬から離れようとする。

しかし、離れ際にレイが頬をトレーナーの手に擦り付けた。その動きを受けてトレーナーの手は頬の上に留まる。

「……頭……」

小さな声がレイの口から洩れた。トレーナーに伝えようとして発した言葉ではない。考えていた事を無意識に漏らしてしまった結果だ。

その声はトレーナーの耳に届いたらしく、彼女の手が彼女の頭に置かれる。

ぼす……とわずかな音の後、すつ……と指で髪を梳く音が断続的に部屋に響く。

レイは満足そうな表情で目を閉じる。朝に飲んだコーヒーマシンのカプセルが切れたのか、彼女の意識はまどろみの中に溶けていった。

ガチャ



「何？ もしかして向こうで何かあった？」

レイの異常な様子に面白そうなものを感じ取ったスターは、ニヤリと口角を上げる。  
「……今日の朝、トレーナーさんから風邪を貰ったようで熱が出たんです……。トレーナーさんは体調が悪かった私の看病をしてくれたんです……」

レイは枕に顔を埋めたまま話し始めた。

「は、それで今日は帰りが遅かったのかあ。それでそれで？」

「……体調が優れなかった私は、その、理性が弱くなっていたのかトレーナーさんに色々甘えてしまいました……」

「具体的には？」

「……膝枕……頬……頭……」

「そんな暗号チックに言わなくても……。ま、とにかく膝枕してもらいながら顔中撫でもらった、って事か」

面白い事を聞いた、という顔をするスターだが、どこか物足りなさそうでもある。

「う、くん、結構控えめだね。枕を引きちぎるくらいだから、てつきり弱っているトレーナーの唇を無理やり奪うくらいはしたのかと思っちゃよ」

びくり、とレイの体が震えた。

スターはレイの様子を見て、目を丸くする。

「…………え？ マジ…………？ 冗談のつもりだったんだけど…………。え？ 本当にやつちやつた…………？」

ブチブチブチ…………！

「違うんです…………！ あれはトレーナーさんのためにと思つて…………！」

「けしてやましい気持ちあつたわけでは…………！ 医療行為！ ただの医療行為なんです…………」

「キスのどこが医療行為なのかは分からないけど、分かつたから…………分かつたから中綿まで引きちぎらない！」

その日、レイは枕無しで寝る羽目になつた。

## 二十話 帰省

二階建てのどこにでもあるような一軒家。そこはレイの実家だ。レイは玄関前で白い息を吐いていた。

しばらく立ち呆けていたが、やがて玄関のインターホンに彼女の手が伸びる。しかし、ボタンを押す手前で指が止まった。再び玄関前で立ち尽くす。

彼女は両親の事を長い間避けていた。骨折をきっかけに、病院で和解したとはいえ、それだけで今までのわだかまりが全て無くなったわけでは無い。

何度かお見舞いに来た両親とは会っているもの、それからしばらく間を開けての帰省。レイは両親と顔を合わせる事に躊躇ためらいを抱いていた。

彼女はインターホンを押す代わりに、玄関のドアノブに手を掛ける。ガチャ、と控えめな音が鳴った。

彼女は鍵がかかっている事に少し驚いたが、扉を開いてそのまま中に入る。

これといって特筆するべき所のない玄関。しかし、彼女にとっては懐かしい玄関だ。トレセン学園に入る前は毎日見ていた玄関。

久しぶりの実家に、目を細めて昔を懐古する彼女。そんな時、廊下に出てきた母親が

玄関に佇（ただず）む彼女を見つける。

「レ、レイ……………」

「……………ただいま帰りました」

驚く母親。顎を引き、気まずそうな顔をするレイ。

「帰ってきてたのね！　玄関は寒いでしょう？　早く中に入っちゃいなさい」

「……………はい」

破顔してレイを歓迎する母親に、彼女も雰囲気を和らげた。靴を脱いで廊下に入る。母親の後を追うようにリビングに入ると、そこには父親もいた。

「お父さん！　レイが帰ってきたわ！」

「ただいま帰りました」

「おお、お帰り。帰ってきてくれたんだな」

「大晦日と正月は二人と一緒に居ようかと。去年は帰省すらしなかったので……………」

レイのウマ耳が垂れた。それを見た父親は優しく声を掛ける。

「今年は帰ってきてくれたじゃないか。ほら、外は寒かっただろう。コタツに入ったらどうだ？」

レイは小さく尻尾を振る。

「……………分かりました。その前にお風呂に入ってきてますね」

荷物を置き、着替えを取ろうと衣装ダンスの方に向かうレイ。彼女はダンスの一番下の段を開くが、そこには何も入っていないかった。

「おいおい、着替えはトレセン学園に持って行っただろう」

「……そうでしたね。昔の癖でつい」

レイは恥ずかしそうな顔をしながら、持ってきた荷物から着替えを取り出す。そして浴室の方に向かった。

体を清めたレイはラフな格好に着替え、リビングに戻る。両親たちはコタツに入っ  
て、テレビを見ていた。その輪の中にレイも入る。

しばらくは誰も喋らず、年末の特番を三人で静かに眺めていた。番組がCMに入った  
時、父親が口を開く。

「レイ、コーヒー飲むか？」

「そうですね。淹れましょうか」

「今日は私も飲むかしら」

テレビを消した後、三人は立ち上がり、キッチンへと向かった。キッチンには食器棚

とは別に、ポット、グラインダー、フィルター、ドリツパー、サーバーなどコーヒー用品が並べられた棚がある。

その棚から器具を取り出し、一通りの準備を終えた三人は棚の一番下を開く。そこにはラベルが張り付けられた茶色の紙袋が。ラベルにはコーヒー豆の銘柄が書かれている。

「父さんはサントスだ」

「アイリッシュコーヒーアイリッシュウイスキーにコーヒーを混ぜ、生クリームを浮かべたカクテルですか？ 昔から変わっていませんね」

「大晦日の夜だし、アルコールを入れようかなと……」

「お母さんはマンデリンかな。冷蔵庫から牛乳取ってこないと」

「ブラックで飲めないのは相変わらずですね」

「この年になると、そうそう味覚は変わらない物よ。ミルクを混ぜないと苦くて苦くて」  
「レイはどうする？」

「私は……」

どのコーヒー豆にしようかと目を滑らせるレイ。やがて、一つの紙袋を手を取った。

「ハワイのコナ……買ってくれたんですね。私しか飲まないのに」

「ああ、レイの好きな銘柄だからな」

コーヒーは肉や魚と同じ生鮮食品。密封状態で約90日。開封後は約30日程度が賞味期限だ。

レイが二年ぶりに帰ってきたにも関わらず、彼女しか飲まない銘柄がある。それは昔の残りでは無く、わざわざ両親が買ってくれたという事に他ならない。

「……ありがとうございます」

レイは尻尾を嬉しそうに二、三度揺らした。

銘柄を選び終えた三人は、コーヒー豆を挽き始める。ゴリゴリ、と豆が砕ける音が響く。

「学校ではどうなの？」

母親がレイに話しかける。

「赤点は取っていませんし、レースの方も観戦に来ていただいた通り好調でしたよ。今は療養中ですが」

「いえ、そうじゃなくてね……。その、友達とか、ちゃんと出来た？」

腫れ物に触るように聞く母親。

「友達、ですか……」

レイはコーヒーを挽く手を止める。

「一人だけ。不道德な私には過ぎる、良い人です。」

彼女が背中を押してくれなければ、お二人を避けたままだったかもしれない。

今こうして二人と……。お父さん、お母さんと一緒にコーヒー豆を挽く事も無かったかもしれない」

「そう、そんな子が……。お母さん、安心したわ。それとその子に感謝しないとね」

「それとトレーナーさんにもな。父さんと母さんは、彼に背中を押してもらったんだ。そうでなければあの日、レイの病室に行かなかっただろうから」

「……。そうですね、トレセン学園では良い縁に恵まれました」

三人はとつくに挽き終えていたコーヒー豆をグライNDERから取り出した。

それぞれが自分のコーヒーを淹れ終え、コタツの中に入る。静かなリビングにコーヒーが喉を通る音だけが響く。

レイのカップの中身が半分になる頃、父親が口を開いた。

「レイは向こうで好きな子でも出来たか？」

「……。っ！ げほ、げほっ……。っ！」

父親の発言にむせるレイ。

「お父さん。もう酔いが回ったの?」

父親の発言を嗜める母親。父親のカップの中身はすでに空になっていた。

「す、すまない、レイ。思ったより酔っているようだ……。それにトレセン学園はウマ娘しかないから実質女子高みたいなものだったな。男の子がいらないなら浮ついた話も無いか」

そう自己完結する父親だが、レイの顔が赤くなっているのを見て驚いたような表情をする。母親は何かピンと来たのか、ニコニコと笑っている。

「あのトレーナーかしら? 真面目で誠実そうな人だったわね」

「わ、私の口から言ったわけでもないのに……」

レイの遠回しな肯定の言葉を聞いた母親は「やはり」という顔で話し続ける。

「まあ、トレセン学園で交流のある男性は限られるし、それにしたって担当トレーナーと恋仲になる……ってというのは昔からある事例だしねえ。創作でもたまに見るわよ、そういう設定。」

お母さんも地方のトレセン学園にいた時はそういうの夢みてたのよ? まあ、私の担当をしてくれたのは定年間際の歳を召した女性だったから、そういう事にはならなかったけど」

「そ、そうだったんですね……」

「あ、ああ、そういう事か……」

話をするレイと母親の隣で、父親は納得がいった、という顔をしていた。

「お父さん、そういう事ってどういう事？」

「いや何、トレーナーという発想が頭に無くてな。てつきり同性愛の気があるのかと勘違いしてしまっただけだよ。友達が一人だけいると言うからその娘かと」

「ス、スターと私が恋仲ですか。」

「とはいえ彼女が男性だったとしたら……。まんざらでもありませんね。一緒にいて楽しいですし、飽きる事はなさそうですから」

「あら、かなり仲良くしてるのね。……で？ トレーナーさんの事はどう思ってるの？」

「誤魔化されてはくれませんか……」

目を輝かせながら、話題を戻す母親に苦笑いをするレイ。こうなつては仕方ないと、話す内容を考え始める。

「……………彼と一緒に居ると、とても落ち着くんです。彼がそばに居るだけで心が満たされます。欠けていた心の隙間が満たされるんです。」

彼は私の事を受け入れて、一緒に修羅の道を歩んでくれましたから……」

遠くを見つめるような表情をするレイ。トレーナーへと思いを馳せているのだろう。

「……………」

両親は少し悲しそうな、不甲斐ない、といったような表情を浮かべる。

「今も満たされていますよ。お母さんも、お父さんも、私を受け入れてくれましたから」

レイはそうフォローする。それを聞いて両親は表情を和らげた。

「……そうか」

「……ありがとうね」

レイの頭に両方向から手が伸びてきた。二つの手はレイの耳を避け、頭を撫でる。

レイは目を閉じて、両親の手に身を委ねた。

しばしの間、無言の時間が続いた後、レイが口を開く。

「トレーナーさんと一緒に居ると、落ち着くのもそうなんです、それ以上に胸が高鳴る事もあるんです。例えば、ふと彼の香りがした時とか、彼に触れられた時とか。」

「そ、それと……それ、と……」

レイの顔が一瞬で真っ赤になる。

「何を思い浮かべた事やら」

「が、学生の身として行き過ぎた行為はいかんぞ!」

呆れるような顔をする母親と、慌てる父親。レイは両手で顔を覆い、その場に寝転がる。

「まあ、年齢差もあるし、担当とトレーナーの立場が有利に働く事も不利に働く事もある

だろうけど、頑張りなさい。

卒業するまできちんと彼の心、引き留めておきなさいよ?」

「……善処します」

レイは小さな声で母親に返事した。

「……もう11時半か。そろそろ年越しそばを食べようか」

時計を見た父親がそう提案した。

「そうね、そろそろ作ろうかしら。レイ、具はネギとカマボコと海老天で良いわよね?」

「あ、七味唐辛子ありますか?」

レイがそう言うと、両親は驚きを顔に表す。

「レイ、辛い物苦手じゃなかったか?」

「そうよ、カレーも蜂蜜とリングを混ぜた甘口じゃないと駄目だったのに……」

「つい最近、食べれるようになりまして……」

レイはトレーナーの顔を思い浮かべ、やんわりと笑みを浮かべた。

## 二十一話 愛だの恋だの

「ただいま……」

「おかえり、響ひびき。丁度夕飯が出来た所、タイミングぴったりね」

レイのトレーナーは靴をそろえ、玄関に上がる。彼の担当が帰省しているのと同様に、彼も実家に帰省していた。

彼がリビングに入ると、食卓には三人分の料理が並んでいた。

「律りつ！ G I Tトレーナー様のご帰宅よ！ 早く降りてらっしゃい！」

母親が二階に向けて大声を出す。遅れて「分かったって！」という、声が返ってきた。

「紬つむぎ母さんは……？」

「仕事で海外。さつき「Happy new year」ってメッセージが来てた」

「時差の影響が凄いね……」

ドタドタ、と階段を下りてくる音がした後、すぐにリビングの引き戸が開く。

「久しぶり、律……」

「お盆以来だっけ？ 久しぶり、兄貴。飯食いながら話そうぜ」

トレーナー、弟の律、母親の三人は食卓に着いた。

「「いただきます」」

その声を皮切りに、トレーナー宅の晩餐ばんさんが始まった。

「兄貴、最近仕事はどうよ？」

「暇してるよ……。担当が怪我でリハビリ中だから仕事の量は減っているし……」

「他の娘は担当しないのか？ 一人の担当が療養中なら学園側から、他の娘の面倒見ろ、

とか言われそうだけど」

「一応、まだ新人扱いだからね……。そこまでは言われてないよ……」

「ふくん……。ま、兄貴みたいな悪評まみれのトレーナーに教わりたいって、好き者も少ないと思うけど。」

あれだけ悪目立ちしたんだから脅迫状とか来てたりして」

「脅迫が八件、殺害予告が二件来てたかな……。その時は一応、防刃チョッキを着こんでたよ……」

トレーナーの言葉を聞いて弟は箸を一本落としてしまう。

「マジで来てたんだ……。そこまでして、よくあの娘の担当続けるなあ。もつとまともな奴が他にもいるだろ？」

「もとより、まともかどうかを選ぶ基準にはしてないよ……。彼女から何か感じる物があつたからスカウトしたんだ……」

「相変わらず兄貴の嗜好はよく分かんねえ。まあ、怪我はしたけど勝ってるし、相性は良かったんだろうな」

二人はしゃべりで乾いた口を水で潤す。

「そういえば響、恋人とか出来た？」

兄弟の会話が途切れた所に、母親がぶっこんできた。

「あ、俺も気になる。兄貴の周りには浮ついた話が一切無かったからな。職場恋愛とかしてねえの？」

「いや、恋人はいないよ……。けど……」

トレーナーにしては珍しく言い淀む。

「けど？」

「気になる人はいる、かな……」

「へえ。誰、誰？」

「どんな人？」

「担当の娘……。彼女が隣にいてくれると、とても落ち着くんだ……」

トレーナーがそう言うのと、母親と律は一瞬驚いた表情をする。しかしすぐにいつもの調子に戻った。

「ふくん、やっぱり兄貴もウチの家系かあ。ウマ耳、尻尾好きにロリータコンプレックス

12〜15歳程度の女性に性的興奮を覚える人を指す。ロリコンと省略される事もあ  
る、と……」

「バイ異性と同性、どちらも恋愛対象の人を指すの私からとんでもないのが生まれたものね……」

トレーナーの家族構成は母親、母親、トレーナー、そして弟の律の四大家族。母親同士、籍は入っていない。現在家にいるバイの母親から体外受精で生まれたのがトレーナー。現在海外にいるレズビアン女性の同性愛者を指すの母親から生まれたのが弟。

そういう複雑な家庭環境で彼は育っていた。

「いや、トレーナーになると言い出した頃から怪しいとは思ってたんだよなあ。ロリコンかどうかはともかく、ウマ耳と尻尾は好きそうだな、って」

「いや、別にウマ耳好きでも尻尾好きでも、それにロリコンでも無いと思うんだけど……」

「あれ、そうなのかな？ でも好きなんだろ、担当の娘の事」

「別に性的興奮を覚えているわけではないよ……」

「好きじゃなくて愛してる、って事かしら？」

兄弟の問答の間に母親がしたり顔で割って入ってくる。「愛」というクサイ言葉に弟は何とも言えない表情を浮かべる。

「愛、ねえ……。まあ、性欲と好きはまた意味が違ってくるよな。」

「メカフィリア機械性愛。機械や工業製品に対して性的興奮を覚える人を指すの俺にも、ずっと一緒に居て苦痛じゃない友人はいる。そいつらの事は好きだ。けど性欲は抱いてない」

「そうね。私も響や律の事は好きだけど、性欲を抱くかと言われれば違うし」

「それは普通じゃないか？ 近親には性的興奮を抱かないのが一般的だろ」

「響はともかく、律と私には血の繋がりは全くないでしょ。」

「そして私のストライクゾーンは下にも広い。つまり律も本来ならいける口。律は紬母さんに似てるし尚更よ」

「けど、母さんは俺の事を好きではあるが性的興奮は覚えない」

「そうそう。子供への愛情、って奴」

「愛……。愛ねえ……」

律はスマホを取り出し、ネットで検索をかける。

「愛」——そのものの価値を認め、強く引き付けられる気持ち。可愛いがり、慈しむ心。大事なものとして慕う心。

「好き」——心が惹かれる事。気に入る事。

「恋」——異性に愛情を寄せる事、その心。ここでも愛か……。

『性的興奮』——異性の臭気や行動によつて引き起こされる、生殖に伴う興奮状態。人に至つては、シンボルによつても興奮する場合がある」

「シンボルによつても。それは律が良い例ね。自動車のマフラーのどこに興奮できるんだか……」

「うるせえ、こつちだつて人間の胸や尻に興奮できる神経が理解できねえよ。」

……話を戻すが、ネットで調べた限りだと、兄貴が担当に抱いている感情は『愛』でも『好き』でも『恋』でも、どれも良きそうだな」

「でも、母さん的には人を『好き』っていうと、そこには少なからず性的な目を向けている、つて意味も含まれてる感じがするかな。『恋』も一緒。」

「やっぱり『愛』よ『愛』！ その人、人格、存在を可愛がり、慈しむ心こそ『愛』よ！」

「勝手に意味を捏造するなよ……。とはいへ、人が異性を好きになるのは子孫を残すため、つまり性欲が元の場合もあるか。」

両想いの二人が結婚して子供つたら急に冷めた、なんて話も聞くしな。その場合は性的興奮が『好き』の大半を占めていた、つて事になるのか？」

「結婚後に大きな問題がなかったのならそうでしょうね。『恋愛』の『恋』だけだつたつて事。『愛』が無かつたのよ」

「『恋』と『愛』……」

律は再びスマホで検索をかける。

「『恋』とは自分本位のもの、愛とは相手本位のもの」

「愛はお互いを見つめ合う事ではなく、ともに同じ方向を見つめる事である……  
だつて」

「そうよそうよ！ 性欲という本能のままに相手を求めるのが『恋』！ 自分を犠牲にしても相手に何かをしてあげたいのが『愛』！ 無償の愛よ！」

「あつそ……」

ヒートアップする母親を放置し、律はスマホをポケットにしまう。

「ま、ともに同じ方向を見つめる、つてんならウマ娘とトレーナーの関係はまさにそれだな。一年は一緒にやってるんだろ？ 兄貴が担当の娘に特別な感情の一つぐらい抱いてもおかしくないつて」

「そう、かな……」

「とはいえだ」

律は箸でトレーナーを指す。

「兄貴の思いが『恋』にせよ『愛』にせよ、担当が学生の内は手を出すんじゃないぞ。現代社会じゃあ、それは犯罪だ」

「それは分かつてるよ……」

「なら良いけどよ。ごちそうさまでした」

弟は食器をキッチンに片付け、そこで食後のコーヒーを作り始める。

「あ、私にも作ってくれないかな……」

トレーナーの言葉を聞いて、弟も母親も驚く。

「俺の聞き間違い？ 未だにピーマンすら苦手な子供舌の兄貴がコーヒー？」

「律が作ってるのはココアじゃないのよ？」

家族からの一斉に詰められ、苦笑いを返すトレーナー。

「最近、飲み始めたんだ……。とはいえ、牛乳は欲しいかな……」

「どういう風の吹き回しだか……。ま、了解」

ちよつと特殊な一家は、このような調子で年を越していった。

## 二十二話 正月明け

正月三が日の最後、1/3。

私は三日間の帰省を終え、実家からトレセン学園の学生寮に戻ってきていた。自室の扉をノックする。

返事は無かった。同室相手のスターはどこかに出かけてしまっているのだろうか。

鍵を開け、中に入る。ベッドが二つある共用の部屋は随分と散らかっていた。スターは帰省しなかったようなので、年末年始の間にこれほど散らかしたのだろうか。

手持ち無沙汰だった私は、ひとまず部屋を綺麗にする事にした。一年ほど一緒に暮らしていたため、何をどこに収納するかは知っている。

片付いた部屋の中で、自分のベッドに腰かける。時計を見ると、時刻は10時半。お昼には早い。

「……………」

誰もいない部屋の中で、ふと寂寥感せきりょうかんに襲われた。

もう少し、帰って来るのを遅らせた方が良かったかも……

スマホを取り出す。連絡先に登録されているのは、スターと両親とトレーナーさんだけ。その内、トレーナーさんの部分をタップしようとして……止めた。

まだ三が日。きつと迷惑になる……

そう思い、ベッドに寝転んだ。

「……………」

しばらくじつとしていたが、持っているスマホで検索をかける。調べたい事を調べた後、私は身支度をして外に出かけた。

「らっしやいー!」

私の出掛け先は、以前トレーナーさんと来たラーメン屋。スマホで調べた結果、1／3から営業を再開しているようなので、こうして足を運んだ。

店内に入った後、すぐに辺りを見回す。当然だが、そこにトレーナーさんの姿は無い。

「……………すみません」

椅子に座り、店員を呼ぶ。

「へいー!注文は?」

「魚介豚骨ラーメンの大盛を一つ。麺の固さは普通でお願いします」

「へいっ！ 魚豚大盛普通！」

「了解！」

店員の声が騒がしかったのも一瞬。店内BGMとわずかな調理音が厨房から聞こえてくるだけに。店内が沈静化するのと同時に、再び寂寥感せきりようかんが襲ってきた。

「……………トレーナーさん……………」

カウンターに常備されている調味料、その中の赤ダレの小瓶に触れた。

同日11時半。レイのトレーナーは自室で本を読んでいた。実家からは帰省済みだ。机の上には骨折治療後のリハビリ方法、ウマ娘の骨折についての本が山のように積まれている。その横で起動しっぱなしのパソコンの画面には、論文データベースのホームページが。

本と同じくウマ娘の骨折、そのリハビリ、再発防止策など、気になった論文にブックマークが付けられている。

ボキ……

トレーナーが本で気になった内容をメモしていると、シャープペンシルの芯が折れた。ペンのお尻を叩くが、いつまでたつても芯が出てこない。

「ふー……」

トレーナーはペンを置き、椅子の背もたれに寄り掛かった。彼がふと時計を見ると、もうすぐ昼飯の時間という事に気づく。

「……………外食にしようか……………」

目を閉じてたつぷりと考えた後、トレーナーは外出準備をし始めた。

カランカラン

鐘の音を立てて開いたのは、レイの行きつけのカフェの扉。

トレーナーは店内を見回す。その後、少し寂しそうな顔をした。彼は座席に座り、店員を呼ぶ。

「(注)注文は……」

「ペペロンチーノとアラビアータ……。それと食後にカフェオレを……」  
「承りました」

トレーナーはオーダーを通した後、後ろを振り返る。トレーナーの視線の先には、彼の担当と座った事のあるボックス席が。

「……………」

トレーナーは名残惜しそうにボックス席から目を切った。

1/4、トレセン学園のコース上。レイとトレーナーの二人はジャージ姿でそこにいた。

「柔軟も終わったし、今日は軽く走ってみようか……」  
「分かりました」

レイはコース上を歩く。そこからジョギング、ランニング、人の全力疾走程度のスピードまで段階的に速度を上げていった。

コースを一周しトレーナーの元に戻って来るレイ。

「足は大丈夫かい……？ 違和感や痛みは……？」

「問題ありません。……もう少し走ってもよろしいでしょうか？」

「その前に脚を見せて欲しい……」

レイはベンチに座り、ジャージの裾をめくる。トレーナーは彼女の左足に触れた。

脛すねから足首にかけてを触診した後、今度は右足を触診する。

「うん、大丈夫……。走ってきて良いよ……」

「分かりました」

レイは再びコースを走り始める。今度はコースを五周。そして息を少し荒くしながら、トレーナーの元に戻る。

「お疲れ……」

トレーナーはスポーツタイプの水筒をレイの方に差し出す。

「凄いね……。全力疾走ではないけど、怪我をする前とフォームがほとんど変わってない……。イメージトレーニングが思ったより効いたみたいで……」

トレーナーが話す一方で、レイは差し出された水筒をじっと見つめていた。

「レイ……？」

「久しぶりですね。こうしてトレーナーさんの手から水筒を渡されるのは……」

レイはしみじみと呟く。そのまま、トレーナーの手に自分の手を重ねるようにして水

筒を両手で持つ。

「私がこうして水筒を渡せるのも君がりハビリを頑張ってくれたからだよ……。本格的な練習が出来るようになればタオルも渡せるようになる……」

レイはトレーナーの手から水筒を受け取った。後ろ髪を引かれるようにゆっくりと。

「……そうですね。今は水筒だけで満足しておきます。タオルはもう少し後の楽しみにとっておきましょうか」

ふわりと笑ったレイは、水筒のストローに口を付けた。

レイが走るといふ事で、様子を見に来ていたスター。彼女はもちろん二人のやり取り、その一部始終を見ている。

彼女はレイが無事に走れた「安堵」と、他人の睦み合むついを見せられた「なんだこりや」が混ざった変な顔をしていた。

## 二十三話 思い、重い

正月が明け、冬休みが明け、学校が始まってから直近の土曜日。レイは自室で後悔していた。

（私が走れるようになるまで、という条件は付けなかった方が良かった……）

後悔の原因は、レイの骨折が治った時、快気祝いは何が良いと言われて、返した文言の一つ。

“では、毎週土曜日にトレーナーさんの時間を二時間、私に頂けませんか？ 私が走れるようになるまでで良いので……”

あの時なにげなく付けた期限が、彼女からトレーナーと外出する理由を奪っていた。

（別に期限が切れたから、彼を誘うのがダメ、というわけでは無いけど……。正当な理由もないのに毎週誘うのは重い、かな……？）

変に遠慮するが、トレーナーと会いたい欲を抑えられない彼女が取る行動は一つ。街中で偶然出会う事を期待して外出する、だ。

トレーナーと偶然出会うべく街に繰り出したレイだが、当然トレーナーとはなかなか出会えない。そもそも彼が外出しているかどうかすら分からないのだ。

そんな状況でレイとトレーナーが出会う確率など、紙のように薄い。

しかし、彼女の一途な思いが実つたのか、13時を過ぎる頃にそれは実現した。

レイが町中にある銅像の前を通りがかつた時、そこでトレーナーらしき人影を視界に捉える。

(……今のは?)

レイが気になった方を二度見すると、そこにいたのはトレーナー本人。向こうはレイには気づいていない様子。

「……………」

目当ての人を発見できた彼女。しかし、その場から動こうとしない。

(ま、まさか本当に会えるとは……。

会えたのは嬉しい、けどなんて声を掛ければ……? 昼食はもう終わってしまったし

……。

というより、彼があの場合から動かないのは誰かと待ち合わせをしているからでは?

だったら声を掛けるのは迷惑になるかも……」

嬉しさよりも驚きの方が勝ったレイは、そんな事を考える。彼女が悩んでいる間に、トレーナーの近くに歩いていく人が現れた。

（やはり待ち合わせ、を……？）

そこでレイの思考は止まった。

トレーナーの近くに寄って行ったのは、洒落た服に身を包んだ大柄な女性。その女性を見た途端、トレーナーは嬉しそうな空気を纏っていた。何やら楽しそうに会話を始める。

「……………」

それを見たレイはフードを強く被り、その場を立ち去った。

「悪い悪い、遅れちまって」

「5分程度だし問題無いよ……。というか今日は女装してきたんだね……」

「そういう気分だったしな。……女声で口調も変えた方がよろしくって？」

「別人という気がして落ち着かないから普段の口調で頼むよ……」

「了解。今日はダーツ、ビリヤード、ボウリングの三本勝負で負けた方が今日の飲み代を奢るって事で良かったよな？」

「ええ……。それじゃあ行こうか……」

自室に戻るなり、ベッドに伏せて毛布を被る。

トレーナーさんもいい年をした男の人。恋人の一人ぐらいはいる、か……。

街中で見た光景がフラッシュバックしてくる。

トレーナーさん。自分より背が高い人が好みなのかな……。私みたいな小さいのではなくて……。

寝返りを打つ。

いや、見た目ではない。きっとあの人は人格が優れているのだろう。私のように不徳な人間と比べてよっぽど……。

「……………はあ……………」

重たい息がこぼれる。

今だってそうだ。トレーナーさんをあの人に取られて嫌な気分になっている。あれほど楽しそうにしていたのだから、お似合いの二人だ、と祝福するべきなのに。

ビ：ビ、ビビ：：ツ！

爪を立ててシーツを搔くと、音を立てて破れていく。

トレーナーさんも楽しそうにしていた。なのに私には負の感情が湧き上がっている。

彼のそばにいるべきなのは私。あの人では無くて私のはず。どうして彼の隣にお前がいるんだ？

そんな醜い負の感情が湧いて止まらない。

彼が楽しそうにしていたのを喜んであげられない私が彼のそばにいるべき？ ……

とんだお笑い草。

ガン！

寝返りを打つと壁に頭をぶつけた。丁度良い、自傷したかった気分だ。

そう、この嫌な気持ちも負の感情もきつと私が欲深いせいだ。あの時もそうだった。

トレーナーさんだけで我慢しておけばよい所を、欲張ってもつと多くの人に私の思想を認めてもらおうとした。結果は彼に迷惑をかけただけ。

今もそうだ。彼とずっと一緒にいたいと思っている。もうそれが欲張りだ。偶然、彼に出会って、私の思想を認めて、支えてもらって……。私は何もしてないのに彼から多

くの物を貰った。

たいした労力も払わず、たまたま運が良く手に入れた物をずっと手放したくない……それを欲張りと言わずして何と言うのだ。

私が今こうして最悪な気分になっているのは当然だ。人の夢を挫き、笑うような性根の悪さに加えて強欲とくれば、それはもう当然。因果応報。

今までが幸運すぎただけだ。しかし、悪運はもう尽きたのだろう。

「……………う、えつ……」

噛んでいた布団の繊維が喉に絡まって気持ち悪い。

そもそも学生の私では無理な話だ。トレーナーさんとそういう関係になろうだなんて。私が卒業するまで彼に待ってもらおうつもりだったのか？

そんな魅力が私にあるとでも？ 悪である私にそんな魅力があるとでも？ 思い上がりも甚だしい。

ドタツ

体が床に叩きつけられた。ベッドから落ちたようだ。

今日の事は忘れる。そして休みの日にトレーナーさんと会おうとするな。彼とはトレーニングで顔を合わせるだけで良い。それだけでも十分満たされる。

……けどその先は？ 私と彼が担当とトレーナーの関係止まりなら、私が学園を卒業

した後は他人になってしまおう。彼との関係はタイムリミット付きになってしまおう

……嫌だ、嫌だ嫌だ。彼と会いたい。

毎日でなくても良い。二日に一回、一週間に一回……隔週、いや、一か月に一回……ほんの少しだけでも良い。完全に縁が切れるのだけは……。

ガリ、ガリガリ……ベキッ……

胸が引き裂かれているのではという程痛い。床のカーペットを搔くあまり、割れてしまった爪の痛みも気にならない。

こんな痛みは初めてだ。大切なものを失う痛み。将来そうなる事を想像しただけで気が狂いそうになる。

大切なものを失うどころか、トレセン学園に入るまで持つてすらいなかった私にとつては未知の痛み。それゆえに痛烈。

苦しい、気持ち悪い、胃が痛い。

菊花賞で彼の指示を無視して骨折した罰？ それともゴール後に彼の腕を傷つけてしまった報い？ いや、他にも……

床でのたうち回りながら過去の行いを掘り返し、自分を苛み続けた。

「ただいま……?」

冬は日暮れが早い。外が薄暗くなる頃、スターは鍵の掛かっている自室の扉を開ける。

彼女は灯りが付いていない事を不審に思いながらも、部屋に入り、電気をつけた。その途端、部屋の惨状が彼女の目に飛び込んでくる。

「なっ……! 何、これ……!」

へこんでいる壁。シーツがズタズタに割けたベッド。赤黒く汚れたカーペット。床に散乱する毛布。その上に倒れているレイ。

「レイ! 大丈夫!」

スターは突っ伏しているレイのそばに近寄る。

「スター……」

「……!」

レイが仰向けになり、スターと目を合わせる。その目は涙の塩分で炎症を起こし、赤く腫れている。

スターは今までレイが泣いている場面を見た事が無い。そのため動揺してしまい、二

の句が継げない。

「スター……すたあ……」

爪が割れ、乾いた血がこびりついた手がスターの方に伸びる。異様な手にスターは体を強張らせたが、その手を避ける事はしなかった。

結果、その手はスターの背中を掴み、レイはそのそと起き上がる。

「やだ……やだよ……。ずっと一緒にいたい……」

スターの胸に顔をうずめ、すすり泣くレイ。スターは無理な体勢で泣くレイを腕で支え、落ち着いた声で問いかける。

「レイ、何があったの?」

「トレーナーさんのそばにいるべきなのは私じゃなくて……。でも、それだとトレーナーさんと一緒にいられなくて……。卒業したら終わりになっちゃって……。そんなのいや……」

普段の尻尾を掴ませないような敬語調ではなく、精神退行したような口調のレイ。深刻そうだと、思ったスターは唾を飲み込み、努めて優しく語り掛ける。

「……なんでトレーナーのそばにいるべきなのはレイじゃないの?」

「トレーナーさんにはもう相手がいるから……」

「! 本当!」

「さつき……女の人と街で待ち合わせしてた……」

「……見たのはそれだけ？」

「うん……だからダメなの……。私みたいなのよりずっと良い人がいるの……」

それきり、レイはスターの胸に顔を押し付けながら、たまに呻くような声を上げるだけだった。

「……、……………」

スターは口を開き、何かを言おうとしたが、途中で止める。代わりにレイが落ち着くまで、ずっと彼女の背中をさすっていた。

「…………ごめんなさい。服、汚して……」

「いいよ。血は乾いてたからほとんど汚れなかったし」

割れた爪の手当と部屋の片づけを終えて、レイとスターは床に座り込んで対面していた。

「落ち着いた？」

「うん……」

いつものレイなら「はい」や「ええ」と答える場面。まだ完全に立ち直れてはいない様子。

「それで？ トレーナーが女性と待ち合わせをしてたって？」

「うん……」

じわり、とレイの目元に涙がにじむ。

「あーほら、泣かない泣かない……。別に待ち合わせしてたからって付き合ってるって事にはならないでしょ？ 確認取ったの？」

「……取ってない」

「なら姉とか母親とか女友達とかかかもしれないじゃん。そんなに悲観的になること無いって」

「そうかもしれない……。けど関係無いの。私みたいなのじゃ駄目なの……。トレーナーさんの隣にいちやいけないの……」

「どうしてレイじゃダメなの？」

「……私はトレーナーさんから貰うばかりで何もしてあげられてないの……。それどころか迷惑、かけて、ばっかりで……」

「だから自分はトレーナーの隣にいるのには相応しくないって？」

レイは首を縦に振る。

「私みたいな厄介者じゃなくて、もっと、良い、人が……」

「じゃあレイはトレーナーを他の人に譲ってもいいの？」

「……………やだ……………やだよ……………」

レイの頬をボロボロと水滴が伝う。

「その涙が答えじゃない。トレーナーとずっと一緒にいたいなら、その待ち合わせをしていた人からトレーナーを奪い返すぐらいの気持ちでいかないか」と

「でも……………私のそういうところがダメなの！ 厄介者の癖に執着心と我欲だけ強くて……………！ そんな私がトレーナーさんのそばにいる資格なんて……………！」

「関係ないよ」

レイの話をバツサリと遮るスター。

「駄目とか資格とか言ってるけどさ、それはレイの頭の中の話でしょ。大切なのはレイの頭の中じゃなくて現実。」

トレーナーはレイの事を嫌がってる素振り、見せてたの？」

「……………それは……………」

スターは床のカーペットをトントンと叩く。それをきっかけに過去の自分では無く、過去のトレーナーについての記憶を探るレイ。

そうして思い出されるのは、無表情の中に柔らかさを伴ったトレーナー独特の表情。

自分を心配してわずかに眉が下がった表情。いつもの無表情とは一転して、黒幕としての役割を果たす時の表情。

そのどれもが正の表情だった。悲しみや怒り、呆れに染まっていた時は一度たりとも無い。

「嫌がる素振りは見せてなかった……」

「ならレイは今のままで良いじゃん。トレーナーさんにとっては厄介者じゃないって事だからさ」

「……けど、それは担当とトレーナーの関係だからで……。学生の私とトレーナーさんがそれ以上の関係になるのは……」

「難しいって?」

レイは首を縦に振る。

「はあく……そんな事よりGI二つ取る方が遥かに難しいって。オークスと菊花賞、レイは一年で十数個しかないGIを二つも取ってるんだから、禁断の恋ぐらいで諦めないよね」

「……レースは私に才能があったから……。恋愛方面はとも……」

「じゃあもしレイに走りの才能が無かったら、他のウマ娘の夢を挫くという夢は諦めたの? レイの欲望、一生押し込めて生きるつもりだったの?」

スターはレイの胸を指で突く。かなり強めに突かれたのか、レイの体が仰け反る。

「……………いえ」

レイはスターの手を掴み、ゆっくりと押し返した。

「きつと今以上に鍛錬に身を費やしていたと思います……………。昔の私はその欲望に従って生きる他ありませんでしたから……………」

レイの口調が戻る。

「そして今はトレーナーさんと一緒にいたい。その欲望に従って生きる他ないのでしょうね……………」

その様子を見てスターはやれやれと肩をすくめた。

「欲にまみれた醜い私ですが……………精一杯あがいてみるとしましょう」

包帯が巻かれた手でスマホを手取るレイ。そして連絡先の中の「トレーナーさん」をタップする。数度のコールの後、通話が繋がった。

「もしもし、トレーナーさんですか？」

『レイ、珍しいねこんな時間に……………。なにか緊急の用かい……………?』

「いえ、外出のお誘いですよ。明日、例のカフェに行こうと思っっているのですが、トレーナーさんも一緒に……………どう、ですか？」

わずかにレイの手が震える。

『構わないよ……。 11:00に三女神の像の前に集合で良いかな……。?』

「……………ええ。ではまた、明日に」

『あ、少し待ってほしい……………』

「なんででしょうか？」

『いや、私の気のせいなら良いんだけどね……。 声を聞く限り、元気がなさそうだったから……。 何かあったのかい……………?』

「……………お気遣い、ありがとうございます。 私は大丈夫ですよ」

『そうか……………。 それじゃあ、また明日……………。 お休み、レイ……………』

「ええ。 トレーナーさんもお休みなさい」

プツッ

「……………ふ……………」

通話が切れた後、レイは力なく床に倒れる。

「行動早っ、もう約束取り付けたの？」

「ええ、行動は早い方が良いでしょう？ 仮にトレーナーさんに恋人がいたとしても

奪って見せますよ。 私は他人を喰って生きてきた悪役ヒールですから」

「流さっすつ石猟犬、そうこなきやあ」

立ち直り、前に進むもうとするレイの様子に安心するスター。 一方で現実的な問題を考

える。

（とはいえトレーナーが会っていたのが親族とかじゃなく、恋人だった場合……かなり厳しいか？）

今日、つまり休日のお昼に待ち合わせしていたって事はプライベートな関係で……いや待て、今日の……昼？）

今日の昼。レイのトレーナー。女性と待ち合わせ。

三つのフリーズはスターをある仮定へと導く。

「……………」

スターは自分のスマホを取り出し、彼女のトレーナーに電話を掛ける。

プルルルル……ピッ

『スターか？ こんな時間、しかも休日はどうした？』

「トレーナー、今日の昼、予定あるって言ってたけど……女装してレイのトレーナーと遊んだりしてないよね？」

『いや、遊んでたぞ。いったいどこで知ったんだ？』

「……………」

『……ん？ もしもし？ スター？ どうかしたか？』

「こんのバカチンがあ!!!」

あまりのスターの大声に、隣室の娘達が様子を見に来た。

## 最終話 結末

日曜日のトレセン学園。閑散とした正門広場にはウマ娘の始祖と噂される三女神の像が鎮座している。その三女神像の前に一人のウマ娘が居た。

彼女は曇り空の下、襟の高いコートを身に纏い、人を待っていた。待ち合わせの時間にはまだ早い、憂いを帯びた顔で三女神像の前をせわしなく歩き回っている。

彼女はスマホを確認する。時刻は10:50。待ち合わせの時間まであと10分。彼女の顔はどんどん切羽詰まったものに。

コツ……

ほんの少しだけ鳴った靴音。わずかなその音を敏感に聞き取り、彼女は振り向く。靴を鳴らした相手は、小さく手を上げて彼女に挨拶した。

「おはよう、レイ……。いや、こんには、かな……」

トレーナーの声を聞き、姿を見たレイは、強張らせた顔と体をみるみる内に弛緩させ、小走りでトレーナーの方へと向かった。

レイはトレーナーに突進する勢いで近づく。トレーナーも衝突を予期したのか、彼女を受け止める体勢を整える。しかし、レイは寸前で理性を取り戻し、トレーナーの手前

で止まった。

「トレーナーさん……！」

心底嬉しそうな声。

「少し待たせちゃったかな……。ごめん……」

トレーナーは広げた手を元に戻しながら、謝罪の言葉を口にする。

「いえ、私が早めに来てしまっただけです。まだ待ち合わせ時間には早いですし、トレーナーさんが謝る必要はありませんよ」

「そう言ってくれると気が楽になるよ……。それじゃあ行こうか……」

「はい」

二人は横並びで歩き始める。目的地はレイの行きつけのカフェ。その道中二人は無言だった。お互い話す事が思いつかなかったのだろう。

しかし、気まずい雰囲気になる様子はない。それどころか心地の良い沈黙が二人を包んでいる。車や他の歩行者の立てる音が邪魔に感じられるほど。

「……………」

レイは横を歩くトレーナーの方を見ると同時に手を伸ばす。だが、トレーナーが上着のポケットに手をつ込んでいるのを確認すると、伸ばした手を引っ込める。

彼女の手がコートにポケットに収まろうとする間際、トレーナーの手が伸びてきて、

それを阻止した。

レイはその場で立ち止まり、繋がれた自分の手とトレーナーの手を見つめる。少し遅れてトレーナーも立ち止まった。

「嫌だったかな……？」

「いえ……こうしたいと思っていました」

触れるだけだった二人の手は、ゆるりと絡み合う。手袋越しに手を繋いだ二人。目的地まで、安楽とした無言の時間が過ぎていった。

カフェに着いてからも二人はほとんど言葉を交わさなかった。口を開いたのは店員への注文の時と、手袋を外し包帯が露わになったレイの手をトレーナーが心配した時ぐらい。

今は食後のコーヒーを嗜んでいる。レイは黒のブレンドコーヒーを。トレーナーは茶色のカフェオレを。

トレーナーは三口ほどでカフェオレを飲みきり、空のカップをソーサーに置く。一方

でレイはカップに口は付けるが、中身をほとんど飲んでおらず、まだ半分以上残っていた。いつもより明らかにペースが遅い。

「すみません……」

トレーナーは手を上げて店員を呼んだ。

「コーヒーゼリーを一つ……。レイも食べるかい……？」

「お願いします」

「コーヒーゼリーを二つ……」

「かしこまりました」

店員が席を離れていく。レイは申し訳なさそうに目を伏せ、口を開く。

「……………」

しかし言葉は発されなのまま、口が閉じる。レイは伏せた目を上げ、再度口を開いた。

「お気遣い、ありがとうございます」

眉を下げて、困ったように笑いながらそう言った。

デザートを食べ終えた二人はカフェを退店。帰る道中も会話は無かった。

手を繋いだまま並んで歩く。レイが手を怪我している事を知ったからなのか、トレーナーの手は少し緩められていた。代わりに離すまいと、レイの手には力が込められる。「……………」

爪の傷が痛むのか、眉をしかめるレイ。しかし、手から力を抜くことはしなかった。

二人は学生寮の前に着いた。

「それじゃあ、また明日……………」

「……………はい」

レイは繋いだ手を未練がましく離れた。トレーナーはレイに背中を向け、歩いて行ってしまう。

コツ……………コツ……………

トレーナーの足音がレイから遠ざかっていく。

「また……………明日……………」

コツ……………コツ……………

トレーナーの足音がレイの耳に入らなくなる。

「……………っ！」

遠ざかるトレーナーの背中を目掛けてレイは足を踏み出す。彼女の足の回転は次第に早まり、勢いのままトレーナーの背中に抱き着いた。

「っ、レイ……………」

タツクルを受け、たたらを踏むトレーナー。

「……………すみません。耐えられなくなつて……………」

トレーナーの腰に手を回し、背中に額を付けるレイ。

「私が学園を卒業してしまえば、こんな風に別れるかもしれないと思うと……………」

「卒業、か……………」

トレーナーはレイの腕に巻き込まれた左腕を抜き、両腕を自由にさせる。

「私はトレーナーさんと一緒に居たいです、ずっと……………。昨日、はつきりとそう認識しました。だからトレーナーさんが私のトレーナーである限り、私はアナタと一緒に居続けたい欲をむき出しにし続けます。それに……………」

トレーナーを抱く手に一層力を込める。

「私、狙った獲物を逃がした事ありませんから。……………今はまだ、ターフの上だけですけれどね」

小さな声で補足するレイ。

「……………そう、か……………」

トレーナーは腰に回されたレイの手に自分の手を優しく被せる。

「レイ……………」

「何ででしょうか？」

「君の気持ちは良く分かったよ……………。だから明日の放課後、トレーナー室まで来て欲しい……………」

「……………命令とあらば、仰せのままに」

芝居がかった、しかし不安を押し殺せていない声が響く。

レイがトレーナーから離れる時、今度は逆にトレーナーがレイを正面から抱きしめた。

「……………!?!」

トレーナーの胸の中で目を丸くしたり頬を赤らめたりと忙しいレイ。

「必要のない悲しみ、辛苦、痛みをレイから遠ざけてあげたい……………。多くの安らぎ、平穩、喜びを君に与えてあげたい……………。私はいつもそう思っている……………」

トレーナーはゆっくりと話す。

「その気持ちを今は言葉でしか表せない……………。だから明日まで待つてほしいんだ……………」

「……………」

一連の言葉を聞き、レイはトレーナーを抱き返す。

「分かりました。必ずや、明日……」

時刻は午後一時半。太陽の熱を十分に吸収した地表からの放射熱が街を温めていた。

コンコン

「どうぞ……」

「失礼します」

放課後のトレセン学園。レイは昨日の約束通り、トレーナー室に来ていた。

「とりあえず座ろうか……」

二人は机を挟んで対面する。

「一日時間を貰ったのはこれを用意するためだったんだ……」

そう言ってトレーナーが取り出したのはファイルに入った書類。それをレイの方に差し出す。

A3サイズ用の紙、その一番上には「婚姻届」の文字が。夫の欄にはトレーナーの本

名と捺印が。

「これ、は……」

「レイに持つていて欲しい……。君が卒業した時、君がまだ私の事を好いてくれているのなら、役所に持つて行こう……」

トレーナーは胸元から簡素な指輪を取り出す。

「そして、これと対になる指輪を買いに行こうか……」

トレーナーは指輪を自分の左手薬指にはめる。

「それまでは君にキープされておくよ……」

「……………」

レイは瞳に涙を溜めながら、婚姻届が入ったファイルに手を重ねる。

「良いんですか？ こんな大切な物を私に渡して……？」

「ええ……」

「途中でトレーナーさんが私の事を嫌いになっても、私が勝手に届け出すかもしれないかもしれませんよ……？」

「君の事を嫌いになる事は無いよ……。これはその覚悟と証明のつもりだ……」

トレーナーは右手を伸ばし、包帯が巻かれたレイの左手に触れる。

「昨日も言ったけれど、必要のない悲しみ、辛苦、痛みを君から遠ざけてあげたい……」。

多くの安らぎ、平穩、喜びを君に与えてあげたい……。それが私の欲だ……。

いつもそうしたいと思っている……。君が許してくれるなら生涯でも……」

その言葉を切っ掛けに、レイの下まぶたが決壊した。涙がファイルを打つ。一つ、二つ、三つと。レイは右手を伸ばし、指輪が付けられたトレーナーの左手に触れる。

「私は……昨日も言いましたが、トレーナーさんと一緒にいたいんです……。あなたが許してくれるならずっと……。生涯ずっと……！」

その日からトレーナーの左手薬指には生涯指輪が光り続けたそうなの。